女子國文大綱 壹

375.9
Hi·18
資料室

42281
教科書文庫
4
810
42-1930
20000
64440

資料室

昭和五年九月八日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

平林治德編

女子國文大綱 壹

立川書店發行

375.9
Hi 18

廣島大學
教
64440
圖書

國體觀念の涵養、國民精神の作興、國語の正しき理解と使用、情操教育等國語教授の使命は益々重大を加ふるに當り、これに重要なる關係を有する教科書が一夜作りの無責任なものであつてはならない事を痛感したのが本書編纂の動機であります。

材料に就いては權威ある作家の手になつたもので、純正なる國語の表現であり、之を玩味する事によつて、わが國の特質を悟り、われらの祖先、ひいては日本人たるわれ自らの本質を感得するに便なる作品を採り、一方常識を廣め、情操を高め全人間教養に役立つものを選ぶ事に苦心しました。

排列に就いては作品の本質を吟味して、相似たものを連續し、理會の順序を自然ならしめ、且讀後の印象を深からしめ、而もその間に變化あらしめるやう留意しました。

卷九・十に於ては江戸時代以前の作品を倒敍式に排列し、その間に適當の現代文を挿入し卷末の日本文學年表と相俟つて、文學史の概念を得るに便ならしめました。

採擇の作品に就いては、出來るかぎり原作を尊重しましたが、教授上の用意から多少の改竄をした點は特に原作家の諒恕を仰がねばなりません。頭註に原本の刊行年月・發行所等を記したのは、出所を示す一方、自修に便ならしめ、進んで研究を深める興味を起させ度い老婆心からであります。

美術史等の講義の無い中等學校に於て美的情操を養ふのは國語教授の重要な役目と考へますので、挿繪には特に意を用ひ、なるべく古今の名畫・彫刻・建築等の寫眞を挿入し、表紙の題箋は藤原行成筆と稱せられる御物倭漢朗詠集から拾字したものであります。

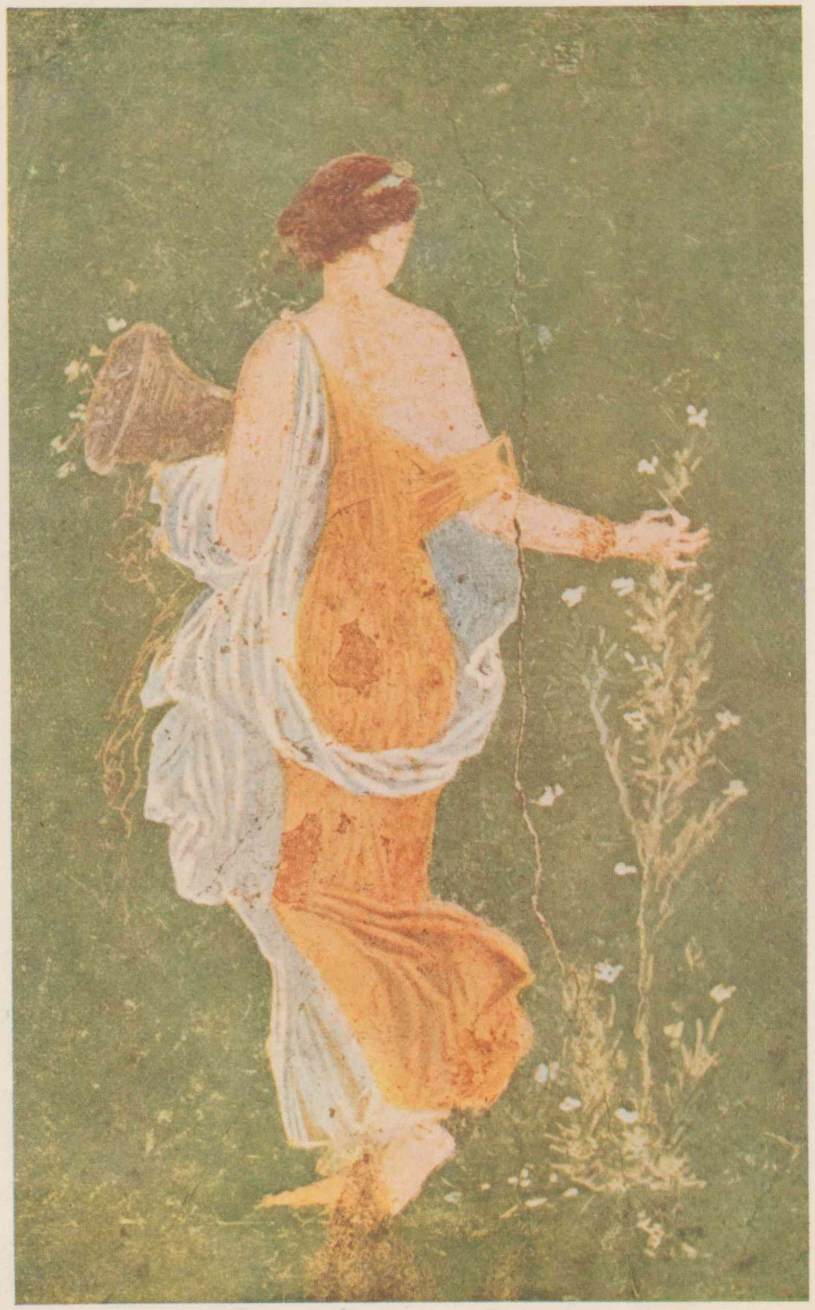
女子國文大綱　卷八

目次

一　詩文の格調……（文語）……上田敏　一
二　夕ぐれの時はよい時……（詩）……堀口大學　六
三　心眼をひらく……（文語）……中川一政　一一
四　良寛の歌と手紙……良寛　一四
五　高瀬舟……（口語）……森鷗外　一七
六　觀潮樓……（口語）……永井荷風　三一
七　徒然草抄……（文語）……吉田兼好　三九

八　兼好法師……（口語）……相馬御風　四八
九　心と言葉……（口語）……和辻哲郎　六一
一〇　芳賀先生を悼みて……（口語）……藤村作　六七
一一　三人の訪問者……（口語）……島崎藤村　七五
一二　秋夜四錄……（文語）……幸田露伴　八七
一三　くさびら……（口語）……泉鏡花　九四
一四　小品三章……（文語）……一〇〇
一五　百蟲譜……（文語）……横井也有　一〇三
一六　實朝の歌……（口語）……齋藤茂吉　一〇八
一七　愛兒の死……（口語）……西田幾多郎　一一七
一八　落花の雪……（文語）……（太平記）　一二〇

附　南風遺響……（歌）……（新葉集）　一二六
一九　母……（口語）……室生犀星　一二八
二〇　新春母の許へ……（手紙）……賴山陽　一四一
二一　夫の訃を報ずる文……（手紙）……賴山陽妻　一四四
二二　赤壁の賦……（文語）……蘇東坡　一四九
二三　出師の表……（文語）……諸葛孔明　一五二
二四　星落秋風五丈原……（詩）……土井晚翠　一五七
二五　長柄堤の訣別……（劇）……坪内逍遙　一六〇
二六　足ずりの事……（文語）……（平家物語）　一七二
二七　紅葉の事……（文語）……（平家物語）　一七八



花摘むニムフ　ポンペイ壁画

（二　夕ぐれの時はよい時）

花摘むニムフ　ナムペイ壁畫　ナポリ國立美術館藏

ポムペイ壁畫は何れも實に明快なる色調によつて畫かれたれど、初期に發掘せられたるものは可成破損せるもの多し。完全なるものの大部分はナポリの國立美術館に集めらる。花摘むニムフは巾一尺五寸高さ二尺程の小品なれども新鮮なる色彩を保てるものにしてポムペイ壁畫中の逸品なり。

白綠色の背景に描出されたる女の姿は實に輕やかに優しく、且極めて自然なる姿態をあらはせり。輕妙にして簡明なる筆技は、淡々たる色調とともに、全畫面に清楚にして可憐なる趣を漲らしむ。

女子國文大綱

卷八

上田　敏

上田　敏
靜岡縣の人、英文學者、文學博士、京都帝國大學教授。大正五年歿、年四十三。

一　詩文の格調

道德に於て、徒らに格言箴戒を口にして善行を實修せざるものが價値なき如く、詩文に於ても、單に內容・思想を偏重して格調を未なりと排斥するものは、未だ眞正の洞察を得たる人といふ可からざるなり。修學の法粗鹵にして素養・訓練を煩はしとする人々は、動もすれば思想を偏重する弊に陷り易きものなれど、眞正なる妙趣を味はゝんと欲する士は、かまへてこの邪徑に蹈入らず、內容・外形の一致融合に初より留意せらるべし。最も効果ある詩文の防腐劑は實にその格調なり。古へより一ふしある識見を吐露し、稱讃すべき議論を唱道せし人は、その數量り知るべからずといへど

上田敏

も、須臾にして世の記憶より消滅するは、ひとへに格調に於て未だしき所あればなり。

然れども、吾等の唱道する格調といふものは、ただ艶麗なる詞章を列ね、流暢なる語勢を加ふる義にあらず。詩文の語は樂律の音と類を異にし、ただ聽覺に快感を惹起すを以て能事畢れるにあらず。此處に格調といふは、寧ろ思想發展の徑路に絶倫の氣風ありて、雄偉勁健なるを意味す。されば格調の美を有せんと欲せば、思想の美なかるべからず。又思想の秀でたるを形づくらんとせば、必ず同時に格調の秀でたるを形づくらざるべからず。

典雅沈靜は格調の精髄なり。靜冽にして從容迫らず、勢餘りありて氣舒びたるは詩文の上乘なるものか。激越にして沈靜なき文は常に粗笨未熟の蹤あり。護摩壇に燃ゆる黑烟の如き詩文は秀逸の作にあらず。黃金・白銀の扉に映じたる燈明の澄耀きて、敬虔の意を啓示する如きをこそ眞正の模範と稱すべけれ。典雅なる詩文には清秀の態あり、沈靜のもの亦必ず莊重の風を具ふ。

格調の美はまた大いに感情の節抑に因りて增加せらる。怨嗟・哀愁の調は素より幽麗の妙ありて、詩文の一要素なれど、かの悲哀の極に達して號叫の狀を呈するものは、婦女の痴態にして性情の薄弱なるを示し、遂に莊重の美を損ずるに至らん。長江の水汪洋として細波なく、激湍なき如く、秀拔の詩も亦岷江の楚に入りたるを學びて、萬斛の悲愁を蓋ふに從容の態を以てすべし。情熱の微弱なるは素より詩文の域に入らずと雖も、熾烈なる感情を節抑し

岷江　支那四川省に在る大河。

たるものは、益々その美を增加するものにして、吾等が古代ギリシヤの美術に於て、最も尊重するもこの美性なり。　イタリヤの詩人ダンテが地獄の呵責をまのあたり見たる如く書きなしたる神曲といふ詩が、その格調に於て激稱せらるゝも、偏へにこの詩人が意志力の旺盛にして、節抑の美德いつも篇中に顯れたればなり。

秀拔なる格調の原因として、簡素を奬說するものあり。　これまことに道理ある議論にして、艷美絢爛の文は、大方雄勁の調なく、深大なる感觸を與ふること能はざるを常とすれど、濃艷一轉して莊麗となり、華美形を變じて燦然たる詞章の綾を成さ

ダンテ　イタリヤ最大の詩人、前半生は學生・兵士・醫師・政治家等の徑路を經、最後の十七年は追放の客として終る。（西暦一二六五—一三二一年）

ダンテ像

神曲　地獄界・淨罪界・天堂界の三部に分れ、彼の人格と、中世キリスト教文明を背景として描かれし不朽の大作。

ば、堂々たる臺閣の風を備へて魁偉の勢あるべく、終に格調の上乘なるものを生ぜん。　イギリスの文章の例を取れば、ギボンが羅馬帝國衰亡史の如きは、簡素に因らずして、而も秀拔の格調を捉へ得たるものなり。

ギボン　英國の歷史家。（西暦一七三七—一七九四）

マシュー、アーノルド　英國の批評家、詩人。（西暦一八二二—一八八八）

Matthew Arnold

ギボン像

イギリス近代の一大批評家マシュー、アーノルドが、詩歌の巧拙を判ずる唯一の試金石は、古來の秀句より外にあるべからずと說きしは名言なり。　居常名篇傑作を精讀して、その秀拔なる格調を鑑賞し慣れたるものは、その趣味不知不識の間に發達して、精微なる批判力を養成し來るものなれば、一朝詩文の品評を試みんと欲するに當りて、直に犀利明快の裁斷を下す事を得るなり。　されば詩文に志す人人は常に名家の筆路に細心の研究を施し、能くその格調の美に留

意して、縹渺たる神韻を逸する事なく、十分その妙趣を掬せんと努むること肝要なり。今茲にイギリスの詩文を味はゝんと欲する人、先づミルトンの作を精讀し、その格調に於て發明する所あらば、餘の詩人を研究するに於て、大なる助を得べし。蓋しミルトンの如きは、世界の文學者中にても最も格調の點に於て成功したる詩人の一人なればなり。而も格調の論、獨り瀛西の詩文に止るべからず。古往今來廣く東西の文學に施して悖らざる見と信ずるなり。

（上田敏全集）

ミルトン　Milton　イギリスの詩人、中年に失明す。その著失樂園は著名なり。（西暦一六〇八―一六七四）

ミルトン像

上田敏全集　第三卷、「詩文の格調」四一〇頁―四一三頁。昭和三年六月、改造社發行。

堀口大學　東京の人、明治二十五年生。詩人。

二　夕ぐれの時はよい時

夕ぐれの時はよい時　堀口大學

かぎりなくやさしいひと時。
それは季節にかゝはらぬ、
冬なれば暖爐のかたはら、
夏なれば大樹の木かげ、
それはいつも神祕に滿ち、
それはいつも人の心を誘ふ、
それは人の心が、
ときに、しばしば、
靜寂を愛することを、
知つてゐるもののやうに、
小聲にさゝやき、小聲にかたる……

夕ぐれの時はよい時。
かぎりなくやさしいひと時。

若さにほふ人々のためには、
それは愛撫に滿ちたひと時、
それはやさしさに溢れたひと時、
それは希望でいつぱいなひと時、
また青春の夢とほく、
失ひはてた人々のためには、
それはやさしい思出のひと時、
それは過去つた夢の酩酊、
それは今日の心には痛いけれど、
しかも全く忘れかねた、

そのかみのなつかしい移り香。

夕ぐれの時はよい時。
かぎりなくやさしいひと時。

夕ぐれのこの憂鬱は何所から來るのだらうか？
だれもそれを知らぬ！
（おゝ！だれが何を知つてゐるものか？）
それは夜とともに密度を增し、
人をより强き夢幻へみちびく……

夕ぐれの時はよい時。
かぎりなくやさしいひと時。

夕ぐれ時、
自然は人に安息をすゝめるやうだ。
風は落ち、
ものの響は絶え、
人は花の呼吸をきゝ得るやうな氣がする。
今まで風にゆられてゐた草の葉も
たちまちに靜まりかへり、
小鳥は翼の間に頭をうづめる……
夕ぐれの時はよい時。
かぎりなくやさしいひと時。

（明治大正新詩選）

明治大正新詩選　二一七頁―二一八頁。昭和四年六月、白帝書房發行。

中川一政　畫家、東京美術學校出身、春陽會々員。

中川一政

三　心眼をひらく

轉機

轉機とは何ぞ。
その以前は肉眼の世界なり。
その以後は心眼の世界なり。
唯見た物を描寫すれば畫が
出來るに非ず。
荒唐無稽のものを描けば畫
が出來るに非ず。
心眼の有無これを決す。

馬と人間

馬と人間とどちらがよいかと云ふことが議論になり、兩族集つ

中川一政

て評議の結果、人間は人間の方がよいといふ事に卽決して、馬の使者を待てり。

使者來つて得々と答へて曰く、

「やはり馬の方がよい。」

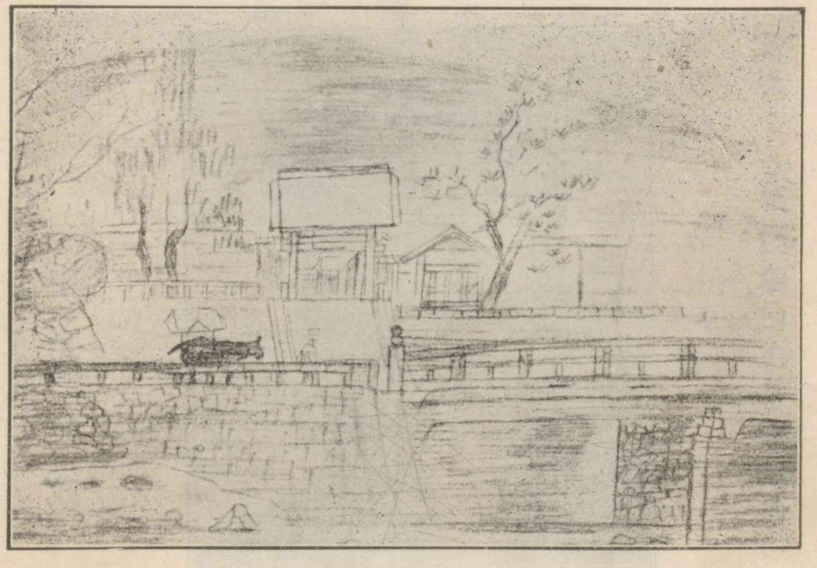
妄想

負くべきものには負けては如何。

遇ふべきものには遇つたら如何。

之に依つて妄想無し。

得



淋しき時に淋しきとくあり。

賑かなる時に賑かなるとくあり。

人に惡口云はるれば云はれたとくあり。

人にほめらるれば賞められたとくあり。

どちらへころんでも損をせぬ人間あり。

神品も凡品

悲しみは悲しみを持つ人々にのみ了解さるべし。

人の悲しみを悲しむは、わが身に引きくらべて悲しむなり。

わが身に悲しみの用意あり、人の悲しみを受くるなり。

畫も亦かくの如し。

一つの畫が人に迫るは、觀者の用意に向つて畫がはたらきかけるなり。觀者の用意なくば神品も凡品の如し。

鈍根

利根の者は早くわかり、鈍根の者はなか〳〵わからぬ。利根の者の早くわかるは往々過ぎたるは及ばざるが如し。

鈍根の者よ安心せよ。

君がわからぬうちはわからぬと言へ。

君がわかつたと云うた時のたのもしさよ。

（中川一政畫集）

中川一政畫集
「美術の眺め」より。大正十五年四月、アトリエ社發行。

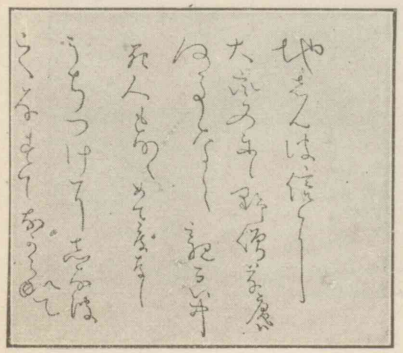
四　良寛の歌と手紙

良　寛

霞立つながき春日にうぐひすの
　なく聲きけば心はなぎぬ
飯こふとわが來しかども春の野に
　すみれつみつゝ時をへにけり
かすみ立つ長き春日を子供らと
　手毬つきつゝ此の日くらしつ

良寛筆蹟

良寛俗名山本榮藏。越後出雲崎の人、十八歳の時出家、海内を歴遊し奇行多かりき。詩歌をよくし、草書に巧なり。天保二年（二四九一）寂、年七十四。

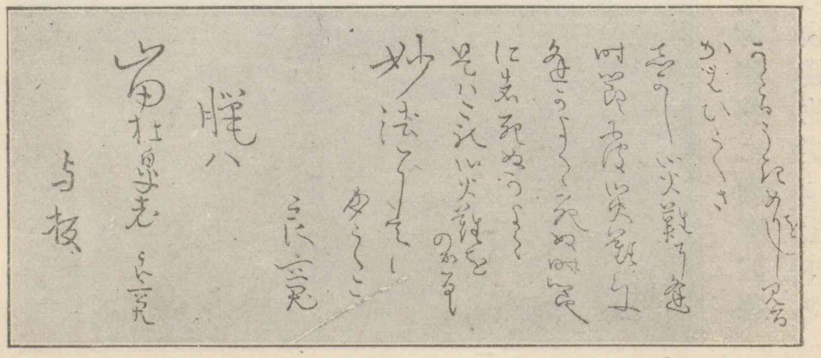


梓弓春になりなば草のいほを
　とくでてきませあひたきものを
風はよし月はさやけしいざともに
　をどり明さむおいのなごりに
はるはあめ夏ゆふだちに秋ひでり
　世の中よかれわれ乞食せむ
いかなるが苦しきものと問ふならば
　人をへだつる心とこたへよ
紀の國の高野の奥の古寺に
　杉のしづくを聞き明しつゝ

（良寛和尚詩歌集）

山田杜皐へ

地震は信に大變に候。野僧草庵は何事な



右　續

良寛和尚詩歌集
相馬御風編、大正七年、春陽堂發行。

く親類中死人もなくめで度存じ候。うちつけに死なば死なずてながらへてかゝるうきめを見るがわびしさ

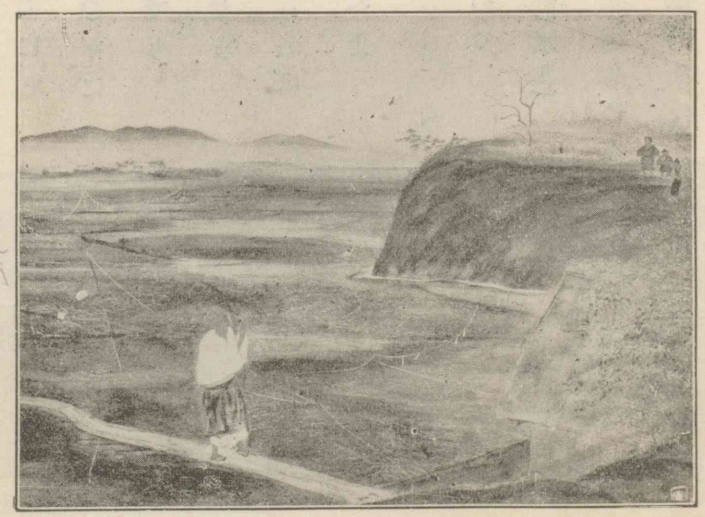
しかし災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく候。死ぬる時節には死ぬがよく候。是はこれ災難をのがるゝ妙法にて候。かしこ

臘八　　良寛

山田杜皐老

解良叔問へ

先日は御書面辱く拝見仕り候。寒氣の節彌御雄勝に御座被遊大慶に奉存候。野僧無事に罷過し候。わすれ候錢並びに托鉢の



里の良寛

良寛和尚尺牘
相馬御風編、大正九年十二月。春陽堂發行。

良寛の家

森鷗外
名は林太郎、島根縣の人、東京帝國大學醫科出身、醫學博士、文學博士。大正十一年歿、年六十一。

米落手仕り候。從是冬ごもりのしたくに候。來春は早速御目にかゝり可申候。以上

柴燒いてしぐれ聞く夜となりにけり。

十月五日　　良寛

（良寛和尚尺牘）

五　高瀬舟

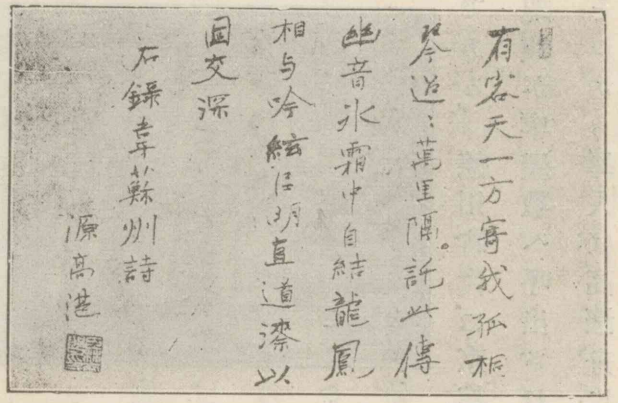
森　鷗　外

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると本人の親類が牢屋敷へ呼出されてそこで暇乞をすることを許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ廻されることであつた。それを護送するのは京都町奉行の配下にゐる同心で、この同

心は罪人の親類の中で、主立つた一人を大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つた事ではないが、所謂大目に見るのであつた、默許であつた。

當時遠島を申し渡された罪人は勿論重い科を犯したものと認められた人ではあるが、決して盜をするために、人を殺し火を放つたといふやうな、獰惡な人物が多數を占めてゐたわけではない。高瀨舟に乘る罪人の過半は、所謂心得違のために、思はぬ科を犯した人であつた。

鷗外筆蹟


有客天一方寄我孤桐
琴道萬里隔託此傳
幽音氷霜中自結龍鳳
相与吟絃上明直道潔以
固交深
石鍾韋蘇州詩
源高港

さういふ罪人を載せて、入相の鐘の鳴る頃に漕出された高瀨舟は、黑ずんだ京都の町の家々を兩岸に見つゝ、東へ走つて、賀茂川を横ぎつて下るのであつた。

何時の頃であつたか、多分江戸で白河樂翁侯が、政柄を執つてゐた寛政の頃でもあつただらう。知恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕に、これまでに類のない、珍しい罪人が高瀨舟に載せられた。それは名を喜助といつて、三十歳ばかりになる住所不定の男である。固より牢屋敷に呼出されるやうな親類は無いので、船にも只一人で乘つた。

護送を命ぜられて、一緒に船に乘込んだのは、同心羽田庄兵衞である。偖、牢屋敷から棧橋まで連れて來る間、この瘠肉の色の蒼白い喜助の樣子を見るに、如何にも神妙に如何にも大人しく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆らはぬやうにしてゐる。しかもそれが罪人の間に往々見受けるやうな、溫順を裝つて權勢に媚びる態度ではない。

白河樂翁　松平定信。德川吉宗の孫、陸奥白河の城主、天明六年老中となり、德川家齊を輔佐して諸政を改革す。文政十二年（一八二九）歿、年七十二。

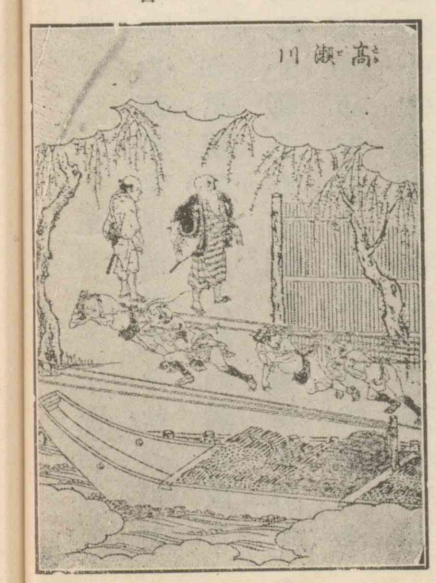
高瀬舟（都名所圖繪所載）

庄兵衞は不思議に思つた。そして船に乘つてからも、單に役目の表で見張つてゐるばかりで無く、絶えず喜助の擧動に細かい注意をしてゐた。

其の日は暮方から風が歇んで、空一面を蔽つた薄い雲が、月の輪廓をかすませ、やう〳〵近寄つて來る夏の溫さが、兩岸の土からも、川床の土からも、靄になつて立昇るかと思はれる夜であつた。

下京の町を離れて、加茂川を横ぎつた頃からは、あたりがひつそりとして、只舳に割かれる水のさやきを聞くのみである。

夜船で寢る事は罪人にも許されてゐるのに、喜助は横にならうとせず、雲の濃淡に從つて、光の增したり減じたりする月を仰いで



右同

默つてゐる。その額は晴れやかで、目には微かな輝きがある。

庄兵衞はまともには見てゐぬが、始終喜助の顏から目を離さずにゐる。そして不思議だ不思議だと、心の內で繰返してゐる。それは喜助の顏が縱から見ても、横から見ても、如何にも樂しさうで、若し役人に對する氣兼がなかつたなら、口笛を吹始めるとか、鼻唄を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。庄兵衞は心の中に思つた。これまでこの高瀬舟の宰領をしたことは幾度だか知れない。しかし載せて行く罪人は、いつも殆ど同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な樣子をしてゐた。それにこの男はどうしたのだらう。遊山船にで

も乘つたやうな顏をしてゐる。ひよつと氣でも狂つてゐるのではあるまいか。いや〳〵それにしては、何一つ辻褄の合はぬ言語や擧動がない。この男は如何したのだらう。庄兵衞が爲には、喜助の態度が考へれば考へる程、解らなくなるのである。暫くして庄兵衞は悚へ切れなくなつて呼掛けた。

「喜助お前何を思つてゐるのか。」

「はい。」といつてあたりを見廻した喜助は、何事をかお役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、ゐずまひを正して庄兵衞の氣色を窺つた。

庄兵衞は、自分が突然問を發した動機を明して、役目を離れた應對を求める言譯をしなくてはならぬやうに感じた。

そこでかういつた。

「いや、別に譯があつて聞いたのではない。實はな、私は先刻から

お前の島へ往く心持が聞いて見たかつたのだ。私はこれまでこの船で大勢の人を島へ送つた。それは隨分色々な身の上の人だつたが、どれもどれも島へ往くのを悲しがつて、見送に來て一緒に船に乘る親類の者と、夜通し泣くにきまつてゐた。それにお前の樣子を見れば、どうも島へ往くのを苦にしてゐないやうだ。一體お前はどう思つてゐるのだい。」

喜助はにつこり笑つた。

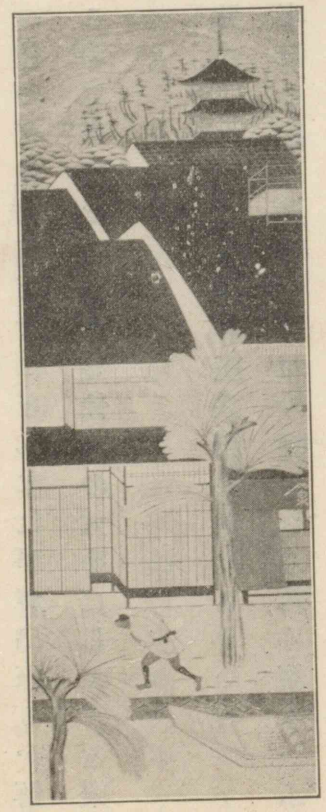
「御親切におつしやつて下すつて、有難うございます。成程、島へ往くといふことは、外の人には、悲しいことでございませう。その心持は、私にも思ひ遣つて見ることが出來ます。しかし、それは世間で樂をしてゐた人だからでございます。京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまで私の致して參つたやうな苦しみは、何處へ參つても無からうと存じます。お上のお慈

悲で、命を助けて島へ遣つて下さいます。島はよしやつらい處でも、鬼の栖む處ではございますまい。私は是まで何處といつて、自分のゐて好い處といふものがございませんでした。今度お上で島にゐろとおつしやつて下さいます。その居ろとおつしやる處に落着いてゐることが出來ますのが、まづ何よりも有難い事でございます。それに私はこんなにか弱い體でございますが、ついぞ病氣を致したことはございませんから、島へ往つてから、どんなつらい仕事をしたつて、體を痛めることはあるまいと存じます。それから今度島へお遣り下さるに就きまして、二百文の鳥目を戴きました。それを此處に持つて居ります。」

かういひかけて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せつけられる者には、鳥目二百文を遣はすといふのは當時の掟であつた。

喜助は語を續けた。

「お恥づかしいことを申上げなくてはなりませんが、私は今日まで二百文といふお足を、斯うして懷に入れて持つてゐた事はございませんでした。何處かで仕事に取りつきたいと思つて、仕事を尋ねて歩きまして、それが見つかり次第、骨を惜しまずに働きました。そして貰つた錢は、何時も右から左へ人手に渡さなくてはなりませんでした。それも現金で物が買つて食べられる時は、私の工面の好い時で、大抵は借りたものを返して、又後を借りたのでございます。それがお牢にはいつてからは、仕事をせずに食べさせて戴きます。私はそればかりでも、お上に對して濟まない事を致してゐるやうでなりま



せぬ。それにお牢を出る時に、この二百文を戴きましたのでございます。かうして相變らずお上の物を食べてゐて見ますれば、この二百文は私が使はずに持つてゐることが出來ます。お足を自分の物にして持つてゐるといふことは、私に取つては、これが初でございます。島へ往つて見ますまでは、どんな仕事が出來るか解りませんが、私はこの二百文を島でする仕事の元手にしようと樂しんで居ります。」

斯ういつて喜助は口をつぐんだ。庄兵衞は「うん、さうかい。」といつたが、聞く事毎に餘り意表に出たので、これも暫く何もいふことが出來ずに考へ込んで默つてゐた。

庄兵衞は彼此初老に手の屆く年になつてゐて、もう女房と子供が四人ある。それに老母があるので、家は七人暮しである。平生人には吝嗇といはれる程の儉約な生活をしてゐて、衣類は自分が

五節句　正月七日（人日）・三月三日（上巳）・五月五日（端午）・七月七日（七夕）・九月九日（重陽）の節日の稱。

七五三の祝　男兒は三歳と五歳、女兒は三歳と七歳とに當る年の十一月十五日に行ふ祝儀。

役目の爲に著るものの外、寢卷しか拵へぬ位にしてゐる。しかし不幸な事には、妻を好い身代の商人の家から迎へた。そこで女房は、夫の貰ふ扶持米で暮しを立てて行かうとする善意は有るが、裕かな家に可愛がられて育つた癖があるので、夫の滿足する程、手元を引締めて暮して行くことが出來ない。動もすれば、月末になつて勘定が足りなくなる。すると女房が內證で里から金を持つて來て、帳尻を合はせる。それは夫が借財といふものを毛蟲のやうに嫌ふからである。さういふ事は、所詮夫に知れずには居ない。庄兵衞は五節句だといつては、里方から物を貰ひ、子供の七五三の祝だといつては、里方から子供に衣類を貰ふのでさへ、心苦しく思つてゐるのだから、暮しの穴を塡めて貰つたのに氣が附いては、好い顏はしない。格別平和を破るやうなことのない羽田の家に、折波風の起るのは、これが原因である。

庄兵衞は今喜助の話を聞いて、喜助の身の上を、我が身の上に引比べて見た。喜助は仕事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡して亡くしてしまふといつた。如何にも哀な、氣の毒な境涯である。しかし一轉して我が身の上を顧みれば、彼と我との間に果してどれ程の差があるか。自分も上から貰ふ扶持米を、右から左へ人手に渡して暮してゐるに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はば十露盤の桁が違つてゐるだけで、喜助の有難がる二百文に相當する貯蓄だに、こつちは無いのである。

偖、桁を違へて考へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。その心持は此方から察して遣ることが出來る。しかし、如何に桁を違へて考へて見ても、不思議なのは、喜助の慾の無い事、足ることを知つてゐることである。

喜助は世間で仕事を見附けるのに苦しんだ。それを見附けさ

へすれば、骨を惜しまずに働いて、やう〳〵口を餬することの出來るだけで滿足した。そこで牢に入つてからは、今まで得難かつた食が、殆ど天から授けられるやうに働かずに得られるのに驚いて、生れてから知らぬ滿足を覺えたのである。

庄兵衞は如何に桁を違へて考へて見ても、こゝに彼と我との間に、大いなる懸隔のあることを知つた。自分の扶持米で立てて行く暮しは、折々足らぬことがあるにしても、大抵出納が合つてゐる。手一杯の生活である。然るに、そこに滿足を覺えたことは殆ど無い。常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。しかし、心の奥には、斯うして暮してゐて、ふいとお役が御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどうしようといふ疑懼が潜んでゐて、折々妻が里方から金を取出して來て穴塡めをしたことなどがわかると、この疑懼が意識の閾の上に頭を擡げて來るのである。

一體この懸隔はどうして生じて來るのだらう。只うはべだけを見て、それは喜助には身に係累が無いのに、こつちには有るからだといつてしまへばそれまでである。しかしそれは謚である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなられさうにない。この根柢はもつと深い處に有るやうだと、庄兵衞は思つた。

庄兵衞は只漠然と人の一生といふやうな事を思つて見た。人は身に病があると、この病が無かつたらと思ふ。その日〳〵の食が無いと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄が無いと、少しでも蓄があつたらと思ふ。蓄があつても、亦その蓄がもつと多かつたらと思ふ。かくの如くに、先から先へと考へて見れば、人は何處まで往つて踏止ることが出來るものやらわからない。それを今目前で踏止つて見せてくれるのが、この喜助だと、庄兵衞

は氣が附いた。

庄兵衞は今更のやうに驚異の目をみはつて喜助を見た。この時庄兵衞は、空を仰いでゐる喜助の頭から後光がさすやうに思つた。

（鷗外全集）

鷗外全集
卷四「高瀬舟」一五一頁―一五八頁。大正十二年一月、鷗外全集刊行會發行。

永井荷風
名は壯吉、明治十二年東京に生る。小說家。

六　觀潮樓

永井荷風

小石川春日町から柳町・指ケ谷町へかけての低地から、本郷の高臺を見る處々には、電車の開通しない以前、即ち東京市の地勢と風景とがまだ今日程に破壞されない頃には、樹や草の生ひ茂つた崖が現れてゐた。根津の低地から彌生ケ岡と千駄木の高地を仰げば、こゝも亦絕壁である。絕壁の頂に沿うて、根津權現の方から團子坂の上へと通ずる一條の路がある。私は東京中の往來の中でこの道ほど興味ある處はないと思つてゐる。片側は樹と竹藪に

蔽はれて晝猶暗く、片側はわが歩む道さへ崩れ落ちはせぬかと危まれるばかり。足下を覗くと、崖の中腹に生えた樹木の梢を透して、谷底のやうな低い處にある人家の屋根が小さく見える。されば向ふは一面に遮るもの無き大空、限もなく廣々として、自由に浮雲の定めない行方をも見極められる。左手には上野・谷中に連なる森黑く、右手には神田・下谷・淺草へかけての市街が一目に見晴され、其處より起る雜然たる巷の物音が距離の爲に和げられて、かの平和なる物のひびきは街より來る……

永井荷風

と云つたやうな心持を起させる。

當代の碩學森鷗外先生の居邸は、この道のほとり、團子坂の頂に

ベルレーヌ

佛國の詩人。（西暦一八四四―一八九六）

Verlaine

出ようとする處にある。二階の欄干に佇むと、市中の屋根を越して遙かに海が見えるとやら。然るが故に先生はこの樓を觀潮樓と名づけられたのだと、聞傳へてゐる。

度々私はこの觀潮樓に親しく先生に見ゆる光榮に接してゐるが、多くは夜になつてからの事なので、惜しいかな一度もまだ潮を觀るの機會がないのである。

その代り、私は忘れられぬ程音色の深い上野の鐘を聽いた事があつた。

ベルレーヌ像

上野の鐘

上野寛永寺の鐘。

日中はまだ殘暑の去りやらぬ初秋の夕暮であつた。先生は大方食事中でもあつたものか、私は取次の人に案内されたまゝ、暫くの間唯一人この觀潮樓の上に取殘された。樓はたしか八疊に六疊の間かと記憶してゐる。一間の床には何か謂れの有るらしい

雷といふ一字を石摺にした大幅が掛けてあつて、その下には古い支那の陶器と想像される大きな六角の花瓶が、花一輪挿してない爲に、却つてこの上もなく嚴格に、又冷靜に見えた。座敷中には、この床の間の軸と花瓶の外は全く何一つ置いてないのである。額も無ければ置物も無い。怖るゝ〳〵四枚立の襖の明放してある次の間を窺ふと、中央に机が一脚置いてあつたが、それさへ云はば臺のやうなもので、一枚の板と四本の脚があるばかり、抽斗もなければ彫刻の飾も何もない机で、その上には硯もインキ壺も紙も筆も置いてはない。併しその後に立てた六枚屏風の裾からは、紐で束ねた西洋の新聞か雜誌のやうなものの片端が見えたので、私はそつと首を延ばして差覗くと、いづれも大部のものと思はれる種々な洋書が、座敷の壁際に高く積重ねてあるらしい樣子であつた。世間には往々讀まざる書物をれい〳〵と人の見る處に飾り立て

柵草紙　明治二十二年發刊。鷗外の主宰したる文學雜誌。

柵草紙表紙　シャバンヌ　フランスの畫家、西暦一八二四―一八九八）

Chavannes

ゼネビエーブ　St. Genevieve　パリーの守護神。

パンテオン　Pantheon　ギリシヤ語。至聖殿の義。この名稱の建物はローマとパ

て置く人さへあるのに、これは又何といふ一風變つた癖であらう。私は柵草紙以來の先生の文學とその性行について何とはなく沈重に考へ始めようとした。恰もその時である。一際高く漂ひ來る木犀の匂と共に、上野の鐘聲は殘暑を拂ふ涼しい夕風に吹送られ、明放した觀潮樓上に唯一人主人を待つ間の私を驚かしたのである。

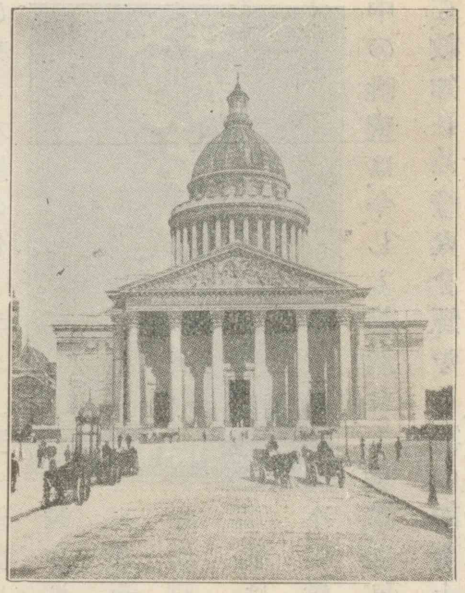
私は音のする方を眺めた。千駄木の崖上から見る彼の廣漠たる市中の眺望は、今しも蒼然たる暮靄に包まれ、一面に烟り渡つた底から、數知れぬ燈火を輝かし、雲の如き上野・谷中の森の上には、淡い黃昏の微光をば夢の樣に殘してゐた。私はシャバンヌの描いた聖女ゼネビエーブが、靜かに巴里の夜景を見下してゐる彼のパンテ

リーとに在り。パリーのはゼネビエーブのために作れる教會なりしが、後名士を葬る處となる。

パンテオン

オンの壁畫の神祕なる灰色の色彩を思ひ出さねばならなかつた。

鐘の音は長い餘韻の後を追掛け〳〵撞出されるのである。その度毎に、その響の湧出る森の影は暗くなり、低い市中の燈火は次第に光を增して來ると、車馬の聲は嵐のやうに却つて高く、軈て鐘の音の最後の餘韻を消して了つた。私は茫然として再びがらんとして何物も置いてない觀潮樓の內部を見廻した。そしてこの何物もない樓上から、この市中の燈火を見下し、この鐘聲とこの車馬の響とをかはるがはる聽澄ましながら、わが鷗外先生は、靜かに書を讀み、又筆を執られるかと思ふと、實にこの



（聖女ゼネビエーブ　ジャパンヌ畫）

（六　觀潮樓）

聖女ゼネビエーブ巴里を見守る圖　巴里パンテオン壁畫

五世紀頃匈奴の王アッチラによりて歐洲の大半席卷され、巴里の市民もその暴虐に逢ひし時女神の如き聖女ゼネビエーブは彼等をアッチラより救ひ出せり。彼女の俤はシャバンヌの筆によつて名壁畫となりパンテオンの壁を飾る。

シャバンヌは十九世紀にあらはれたる佛蘭西初期印象派の畫家。

時ほど私は先生の風貌をば、シャバンヌの壁畫中の人物同樣神祕に感じた事はなかつた。

ところが、「やあ大變お待たせした。失敬失敬。」と云つて先生は書生のやうに、二階の梯子段を上つて來られたのである。金巾の白い襯衣一枚、その下には赤い筋のはいつた軍服のズボンを穿いて居られたので、何の事はない、鷗外先生は日曜貸間の二階か何かにごろごろしてゐる兵隊さんのやうに見えた。

「暑い時はこれに限る。一番涼しい。」と云ひながら、先生は女中の持運ぶ銀の皿を私の方に押出して葉卷をすゝめられた。先生は陸軍省の醫務局長室で私に對談せられる時にも、きまつて葉卷を勸められる。若し先生の生涯に聊かたりとも贅澤らしい事があるとするならば、それはこの葉卷だけであらう。

この夕私は親しくオイケンの哲學に關する先生の感想を伺つて、夜も九時過、再び千駄木の崖道をば根津權現の方へ下り、不忍池の後を廻ると、こゝにも聳え立つ東照宮の裏手一面の崖に、木の間の星を數へながら、軈て廣小路の電車に乘つた。

（明治大正文學全集）

オイケン

オイケン　獨逸の哲學者。西暦一八四六年生。

明治大正文學全集

第三十一卷。「日和下駄」四一六頁―四一八頁。昭和二年七月、春陽堂發行。

吉田兼好

本姓は卜部氏、文學者。正平五年（一三〇一）歿、年六十八。

徒然草

兼好法師の見聞・隨感・評論等を集めしもの。

垂籠めて

たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻もうつろひにけり（古今集、藤原因香）

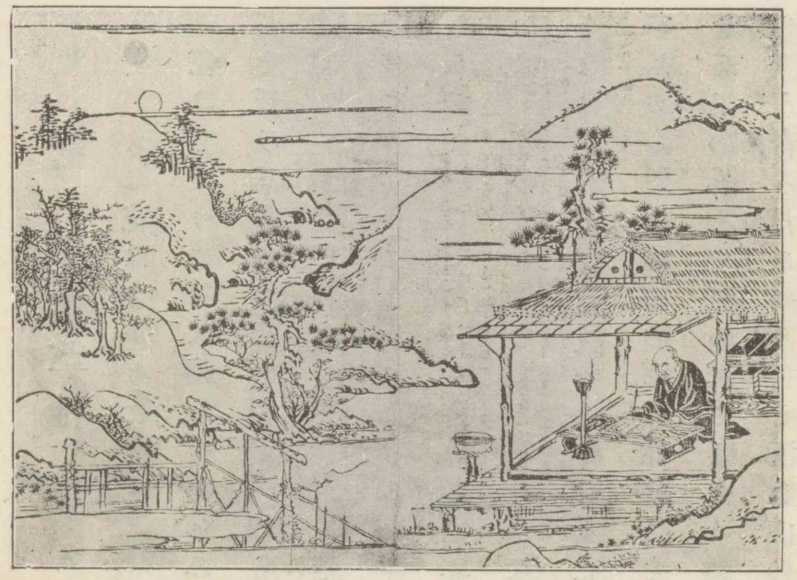
七　徒然草抄

吉田兼好

花はさかりに

花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を戀ひ、垂籠めて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散萎れたる庭などこそ見所おほけれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに早く散過ぎにければ」とも、「障る事ありてまからで」なども書けるは、「花を見て」といへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くを慕ふならひはさる事なれど、殊にかたくなる人ぞ、「この枝かの枝、散りにけり。今は見所なし。」などはいふめる。よろづの事も始終こそをかしけれ。望月のくまなきを千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待出でたるがいと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、

兼好像
徒然草古版所載



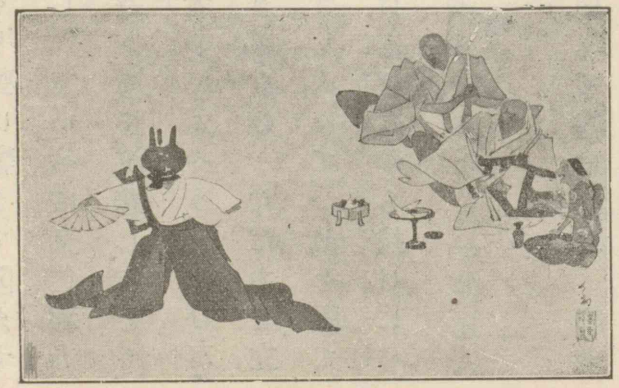
打ちしぐれたるむら雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎柴・白樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて心あらむ友もがなと、都戀しうおぼゆれ。

すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立去らでも、月の夜は閨の内ながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。

鼎かづき

仁和寺の法師、童の法師にならむとするなごりとて、おの〳〵遊ぶことありけるに、酔ひて興に入るあまり、傍なる足鼎を取りて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔をさし入れて舞出でたるに、滿座興に入ること限なし。しばしかなでて後、抜かむとするに、大方ぬかれず。酒宴ことさめて、いかがはせむとまどひけり。とかくすれば、頸のまはりかけて、血垂り、ただ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、うち破らむとすれど、たやすく破れず。響きて堪へがたかりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角の上にかたびらをうちかけて、手を引き、杖をつかせて、京なる醫師のがりゐて行きけるに、道すがら人の怪しみ見る

鼎かづきの圖



こと限なし。醫師のもとにさし入りて、對ひゐたりけむありさま、さこそ異樣なりけめ。ものをいふもくぐもり聲に響きて聞えず。「かゝる事は書にも見えず、傳へたる敎もなし。」といへば、又仁和寺へ歸りて、親しき者、老いたる母など枕上に寄りゐて、泣悲しめども、聞くらむとも覺えず。かゝるほどに、ある者のいふやう、「たとひ耳・鼻こそ切れうすとも、命ばかりはなどか生きざらむ。ただ力を立てて引き給へ。」とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、頸もちぎるゝばかり引きたるに、耳・鼻缺けうげながら拔けにけり。からき命まうけて、久しく病みゐたりけり。

もろ矢

ある人、弓射ることを習ふに、もろ矢を手挿みて的に向ふ。師のいはく、「初心の人二つの矢を持つことなかれ。後の矢をたのみて初の矢になほざりの心あり。毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ。」といふ。僅かに二つの矢、師の前にて一つをおろそかにせむと思はむや。懈怠の心みづから知らずといへども、師これを知る。この戒萬事にわたるべし。

道を學する人、夕には朝あらむことを思ひ、朝には夕あらむことを思ひて、重ねて懇に修せむことを期せり。いはむや一刹那のうちにおいて、懈怠の心あるこことを知らむや。何ぞただ今の一念において、ただちにすることの甚だ難き。

栗栖野

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入ること

徒然草古版挿繪

栗栖野　山城國宇治郡山科村の大字。醍醐寺の邊。

侍りしに、遙かなる苔の細道を踏みわけて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋るゝ筧のしづくならでは、つゆ音なふものなし。閼伽棚に菊・紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよとあはれに見るほどに、かなたの庭に、大きなる柑子の木の枝もたわゝになりたるが、まばらをきびしく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覺えしか。

筧

閼伽棚

栗栖野徒然草古版挿繪

雪のあした

雪のおもしろう降りたりしあした、人のがりいふべきことありて文をやるとて、雪のこと何ともいはざりしかへりごとに、この雪いかが見ると、一筆のたまはせぬ程のひがひがしからん人のおほせらるゝこと、聽きいるべきかは。かへすがへすくちをしき御心なりといひたりしこそ、をかしかりしか。今は亡き人なれば、かばかりのことも忘れがたし。

心

顏回は志、人に勞を施さじとなり。すべて人を苦しめ、物を虐ぐること、賤しき民の志をも奪ふべからず。

又幼き子をすかし、威し、いひ辱しめて興ずることあり。おとなしき人は、誠ならねば事にもあらず思へど、をさなき心には身にしみて怖しく、恥づかしく、あさましき思誠に切なるべし。これを惱

顏回　顏淵ともいふ。亞聖と稱せらる。孔門十哲の一人。

賤しき民の　子曰く、三軍も帥を奪ふべし。匹夫も志を奪ふべからざるなり。（論語、子罕篇）

まして興ずること、慈悲の心にあらず。おとなしき人の喜び、怒り、哀れび、樂しぶも皆虚妄なれども、誰か實有の相に著せざる。身をやぶるよりも、心を傷ましむるは人を害ふことなほ甚し。

病を受くることも多くは心より受く。外より來る病は少し。藥をのみて汗を求むるには效なきことあれども、一旦恥怖るゝこ

とあらば、必ず汗を流すは心のしわざなりといふことを知るべし。

凌雲の額を書きて白頭の人となりし例なきにあらず。

物に爭はず、己を枉げて人に從ひ、我が身を後にして人を先にするには如かず。萬の遊にも勝負を好む人は、勝ちて興あらむ爲なり。己が藝の勝りたることを喜ぶ。されば負けて興なく覺ゆべ

兼好筆蹟

凌雲の額

魏の明帝凌雲觀を立て誤つて先づ榜を釘せり。乃ち籠を以て韋誕を盛り、轆轤して引上げて之に書かしむ。地を去ること二十五丈、既に下れば鬚髯皓然たり。還つて子弟に語り直に此の法を絶てり。（三國志）

きことまた知られたり。我が負けて人を喜ばしめむと思はば、更に遊の興なかるべし。人にほいなく思はせて我が心を慰めむこと德に背けり。

睦じき中に戯るゝも人をはかり欺きて、己が智の勝りたることを興とす。これ亦禮にあらず。されば始めの興宴より起りて永き恨を結ぶ類多し。これ皆爭を好む失なり。

人に勝らむことを思はば、ただ學問して、その智を人に勝らむと思ふべし。道を學ぶとならば、善に誇らず、ともがらに爭ふべからずといふことを知るべき故なり。大いなる職をも辭し、利をも棄つるは只學問の力なり。

貧しきものは財をもて禮とし、老いたる者は力をもて禮とす。己が分を知りて、及ばざるときは速にやむるを智といふべし。許さざらむは人の誤なり。分を知らずして强ひて勵むは己が誤な

り。貧しくて分を知らざれば盗み、力衰へて分を知らざれば病を受く。

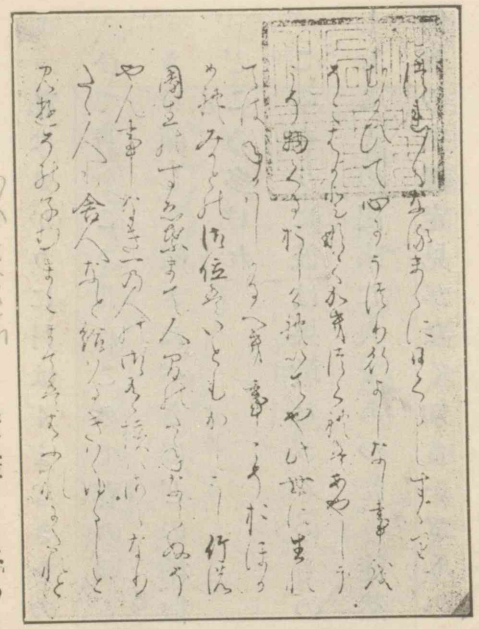
八　兼好法師

相馬御風

名は昌治。新潟縣糸魚川町の人、明治十六年生、早稲田大學文科出身。評論家。

徒然草一卷は、兼好自らが一卷に纏める積で書いたものでもなく、また彼自らの手で斯くの如く纏め編んだものでもなくして、彼が見たり聞いたり感じたりしたことを、草庵生活のつれづれに書きつけて置いたのが、草庵の壁などに貼られて殘つてゐたのを、曾て彼に召仕はれてゐた少年が、形見として所持してゐた草稿などと共に、兼好の歿後に知人が一書に編成したものであるとは、史家がみな一様に云ふところである。

そして或史家は兼好を以て雜駁な人であつたと云ひ、或史家は單なる趣味の人に過ぎないと云ひ、或史家は當時の新思想であつ



た佛教的厭世主義と、舊思想である情緒主義との矛盾を一身に籠めた人であり、そこが彼の性行のおもしろい點であると云ひ、更にまたある史家は、さやうな矛盾の存する如く見えるのは彼の上の皮であつて、根柢はやはり厭世主義を以て一貫してゐると云つてゐるとのことである。

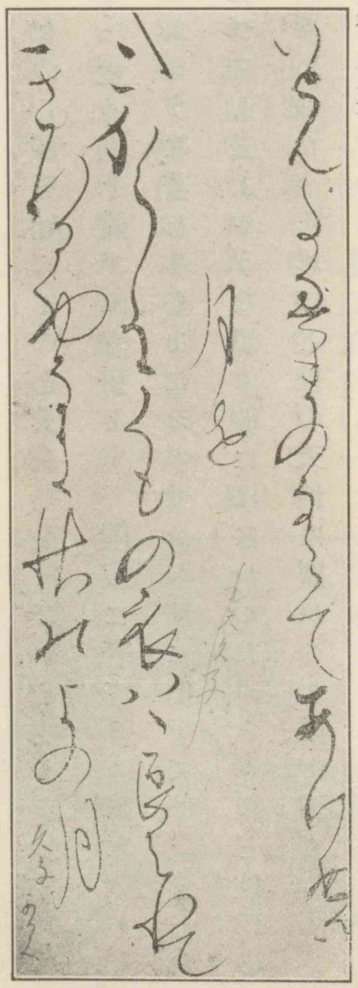
兼好は決してさばく人ではなかつた。「これか。」「あれか。」と云ふ疑問から、彼はもう超越してゐた。その證據には「ある雪のおもしろう降りたる朝」の一段において、それが彼自身の經驗であつたらしいにも拘らず彼は手紙をやつた自分と、返事をよこした先方とのいづれに對し

ても、何等の批判をも加へはしなかつた。そして僅かに、「今は亡き人なればかばかりのことも忘れがたし。」と云ふ一句を以て、兩者の矛盾を矛盾のまゝに純化してゐるに過ぎないのであつた。

花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれにさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。

このやうに彼は果敢なさそのものを樂しみ、矛盾さながらを樂しむことの出來た人であつた。徒然草を通じて見たる彼が、一見何等の主義定見がなく、知るかぎりの事は、神・儒・佛・老・莊の學は勿論、歌でも、有職故實でも、武藝でも、何と云ふことなしに、矛盾をもかまはず、無暗に書散らした散漫雜駁の人のやうに見えるのも、むしろ彼の何ものにもこだはらないで遊び得たほがらかな心の姿を示

すものではなかつたらうか。「文字の法師、暗證の禪師たがひに量りて、おのれに如かずと思へる、ともにあたらず。」と彼自らも說破してゐる如く、彼自らはつひに一處に固定し了する人ではなかつた。彼は要するに觀念に徹した人ではなくして、味に徹した人であつた。



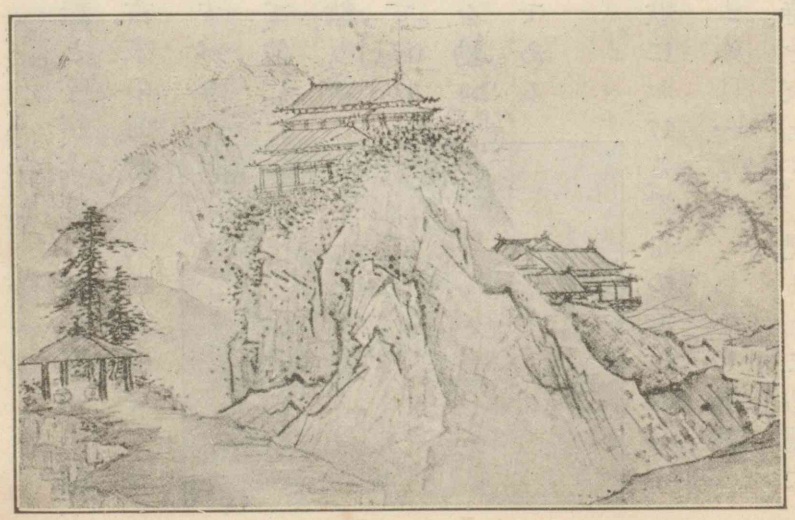
四十二歳にして始めて出家した彼は、佛門の修行においても到底謂ふところの大德の境地に到らうとするやうなことは不可能であることを、自らも十分に知つてゐたであらう。否寧ろさうし

長明法師
鴨長明。和歌・文章に長す。方丈記の著者。建保元年（一八七三）寂、年六十三。

た心の向け方は彼自身の嫌つたところであらう。さうかと云つて、彼はかの長明法師の如く、斷ちがたい浮世の絆を強ひて斷ち、努めて枯木寒巖の境地に辛うじて心の慰安を得ようとするやうな消極的な厭世家でもなかつた。隨つて、長明の「住まずして誰か閑居のたのしびを知らん。」と云ふやうな誇をも彼は持たなかつた代りに、「草の庵を愛するも科とす。閑寂に著するも障なるべし。」といふやうな苦しみも、また「おのづから都に出でては乞食となるを恥づ。」と云ふやうな煩も彼にはなかつた。それほど彼はのびやかであつた。それほど彼の天地は廣かつたのである。

彼はよくさまざまな浮世の味をも解した。しかも彼は決して謂ふところの生臭坊主ではなかつた。何物の味をも味はふことの出來た彼は、しかしながら何ものの味にもとらはれない彼であつた。如何なる境地にあつても、彼の心は常に白雲の如く閑かで

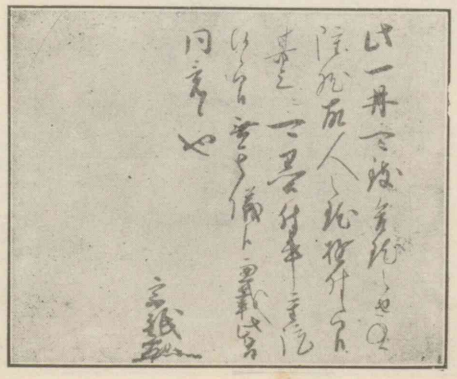
あつた。彼は一面から見れば確に厭世家であつた。しかも他面から見れば彼は正しくすべてのものに遊ぶことの出來る樂天家であつた。要するに、彼は理に徹した人ではなくして、味に生きた人であつた。嚴密な意味での僧ではなくして、人生の味に生きた一個の風雅人であつた。佛門の弟子としての彼を思ひやつて見ても、彼は決して修した人ではなくして、味はつた人であつたやうにしか思はれない。眞俗二諦の間の一種微妙な中道に彼は生き



つづけたのであつた。

誰か兼好を以て名僧と呼び、善知識と呼び、大德に擬し、聖僧と稱するものがあらうぞ。彼は決して古來の名僧の列に加はるべき人ではなかつた。彼と席を同じうすべき人は、斷じてその種の人ではなくして、他に立派な先達がある。雪舟然り、利休然り、芭蕉然り、良寛然り、愚庵然り、――而してそれらの仲間にあつて、彼は正に玄關番を勤め、時には賄の役をも勤むべき最適者であるやうにさへ思はれるのである。

西行の和歌に於ける、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休が茶における、その貫通するものは一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見るところ花に



雪舟
一七頁參照。

宗祇　筆蹟

利休
千宗易。和泉堺の人、茶道の宗匠、豐臣秀吉に仕へしが、その怒に觸れて死す。天正十九年（一五九一）歿、年七十一。

芭蕉
松尾宗房、桃青とも號す。俳諧の名家。元祿七年（一六九四）歿、年五十一。

良寛
第三課參照。

愚庵
俗名天田五郎、磐城國の人、明治二十一年京都林丘寺にて出家す。明治三十六年寂、年五十一。

西行
俗名佐藤義清。鳥羽上皇に仕へしが致仕出家す。建久元年（一一九〇）寂、年七十三。

宗祇
飯尾氏、連歌の名家。文龜二年（一四八二）歿、年八十二。

利休判木地置上大棗
袋
箱書附
八五〇）寂、年

八兼好法師

あらずと云ふことなし。おもふところ月にあらずと云ふことなし。

かう芭蕉が說破した、その風雅の道こそ、同じく兼好の辿り入らうとした道ではなかつたらうか。

山は靜かにして性をやしなひ、水は動いて情をやしなふ。靜動二つの間にして棲を得るものあり。

と芭蕉が仲間の一人を賛した、――その靜動二つの間こそ、同じく兼好の得ようと求めた境地ではなかつたらうか。

よろづの事は賴むべからず。愚なる人は深くものをたのむが故に恨み怒ること

あり。……　身をも人をも賴まざれば、是なる時は喜び非なる時は恨みず。左右廣ければさはらず。前後遠ければふさがらず。せばき時はひしげくだく。心を用ゐること少しきにしてきびしき時は、物に逆ひ爭ひてやぶる。寛くして柔かなる時は一毛をも損せず。

かう彼は云つてゐる。そして更に、

人は天地の靈なり。天地はかぎるところなし。人の性何ぞ異ならん。寛大にして窮らざる時は、喜怒これに障らずして物のためにわづらはされず。

とまで說きすゝめてゐる。

この何ものをも賴まずして、しかも何ものをも樂しむことの出來る寛く柔かな心、天地の如く寛大にして窮らざる心、それが彼の求めた最後の心境であつたらう。よろづのものを「よそながら見

ること」の出來ぬ人を憐んだ彼は、又何につけても、物をのみ見んとする「人をも憐み、何事につけても「わりなく見んとする」人、即ち無理やりに見ようとする人をも憐んだ。そこにもおぼろげながら彼の人生觀照の態度を窺ふことが出來る。

彼は恐らく極めて寛かな柔かな心と纖細な官能との持主であつたであらう。しかも何事にもこだはることのなかつた彼は恐らく如何なる人の友ともなり、如何なる人をも友とすることの出來た人であらう。往々彼を以てすね者と見、皮肉屋と見るやうな人のあるのは、私たちにはどうしてもわからない。少くとも徒然草を通して想像した彼には、寸毫の皮肉も、意地惡さも見出すことは出

良寛自書賛

來ない。彼は斷じて白眼にして世を睨むやうな人ではなかつたと信ずる。

ただ私たちの彼に惜むところは、氣品の高さを缺いて居た點である。又寛かさ柔かさはありながら、靜けさと潤ひとにおいて缺くるところのある點である。彼はよく人生の味に徹した。しかし、その底に横たはる靜けさを味はふことが出來なかつた。閑を味はうて寂に徹しなかつた。彼は又何ものをもよく味はふ事が出來た。しかし、同時に何ものをもしみじみ味はふことが出來なかつた。そこがどうしても私たちをして頭を下げさす事の出來ない彼の弱點であるやうに思はれてならない。そしてそこが西行・芭蕉・良寛などと彼との異なるところでもある。

（雜草花）

雜草花　大正十三年九月、高陽社發行。

附　ゆく秋

相馬御風

ゆく秋の朝のしづけさ
夜あらしの惱のはてに
天地はいまやすらけく
息たゆる翁のごとし。

大空は濃青に澄めど
底にみつ光はあらず

遠山にかゝる白雲
行方なきさまにただよふ。

黄色なる朝日の光
枯草の上をてらせば
霜の色とけて流れて
かすかなる光にきゆる。

深山鳥黒きが一羽
いづかたの空より來しか
葉なき樹のうれにとまりて
あらたなる行方にまよふ。

（御風詩集）

御風詩集
明治四十一年六月、新潮社發行。

和辻哲郎
明治二十二年兵庫縣に生る。東京帝國大學哲學科出身、評論家。

和辻哲郎

九　心と言葉

和辻哲郎

一

心と心とを觸合はせるには言葉だけに賴ることは出來ぬ。言葉は不完全なものである。二つの心の緊張が高まつて、その間にそこばくの隔たりが感ぜられる樣な場合には、特にこの不完全が目立つて來る。思ふことを單純に言現したつもりでも、相手がまるで違つた方向に刺激を受けることは珍しくない。觸合はうとする心はいつまでも言葉の奥にちぢこまつてゐて、中心を離れた枝葉の問題の上にいら立たしい神經と我執とを衝突させるのである。興奮の度が強まれば強まるほど、言葉の不完全が

產出すこの葛藤は烈しくなるやうに思はれる。しかしこの不完全な言葉を使つても、心が何のこだはりもなく、素直に向ふへ通ずることもある。時にはその言葉の必要さへもない。それが言葉の上の詳しい說明や了解を必要とする筈の場合に於てもさうなのである。だから言葉によつて心を通ずることは出來ぬと言切るわけには行かない。しかしまた、言葉で說明しさへすれば、心は通ずるものだと言切ることも出來ぬ。

二

心が通ずるのは心の論理がとほつてゐるからである。頭の論理がいかに正確に言葉の內に現れてゐても、心の論理がとほつてゐなければ人の心を承服させるわけには行かない。

例へば、或人の行爲に對して非難の心持を經驗するとする。その行爲の正しくないことを指摘して、それを改めさせるのは確に

いゝことである。しかし、その行爲の正しくない所以を、いかに明白に說明して聞かせても、それが頭の論理で押しつめられて行く間は、相手は決して承服するものでない。こちらの立場から、相手の行爲を不正と判斷しても、相手は相手の立場で、何かしら辯解を持つてゐる。その辯解を悉く說破つたところで、相手の心は反撥の力を强めるばかりである。純粹に理論の問題を討議するやうな具合には決して行くものでない。

それは人間の行爲が、その人の性格や氣質に根ざしてゐるからである。當人にも頭の論理だけで自分の行爲を支配することは出來ない。彼が道德的反省によつて、自分の行爲を制御しようとする場合には、著しく自分の心の論理に賴つてゐる。（もしこのことがなければ、古來の論理學は物理學と同じ運命を享受し得たであらう。）それ故に、他から頭の理論で押しつめられても、それによ

つて行爲を改める情熱が湧いて來る筈はないのである。むしろ彼の性格や氣質に對して十分同感してくれない相手の心情や、論理的に自分の立場を覆さうとして來る相手の征服慾などが、問題の焦點たる不正の指摘よりも、遙かに强い刺激を彼に與へるのである。

たとひ忠告者の心に、正義に對する情熱が燃えてゐるとしても、又その忠告が非常に正しいことであるとしても、相手がその忠告の內に同情を感ぜずして、ただ征服慾を感ずるのみであるならば、忠告者の心は遂に相手の心に觸れることが出來ないであらう。忠告者が相手を良くしようとしてゐる親切な心も、かういふ場合には現れる場所がない。いかに言葉でそれを說明しても、相手の心には響かない。言葉は畢竟空である。

三

或心の狀態を現す言葉は複雜な組織を土臺として現れて來る。だから同一の言葉もそれを使ふ人の人格の異なるに從つてそれぞれに異つた色合や陪音を伴ふ。言葉を通して、その背後にある人格が滲出し響き出すのである。

心を現す言葉の妙味はこゝにある。それは單なる知識の集積によつては些も深められるものではない。ただ正直に、その人の築き上げた生活を暴露する。何の假託をも、虛飾をも許さない。同じ言葉を使つて、同じやうな心生活を表現しようとするのは、各人の自由であるが、それによつて眞實に表現せられる心生活は言葉が同一であるやうに、輙くは同一であることが出來ない。その人が獲得した生活の高さは、いかなる場合にもその人の言葉の內容に或限界を與へる。貴いのは言葉ではなくて、言葉の奧にひそむ心である。

四

我々は自分の云はうとする所を頭の論理によつて是認しなければ口へは出さない。しかしその言葉は、自分の心を右の論理の筋道の通りに相手に傳へるとは限らない。そこで我々は、いかなる程度に自分の心が相手に傳はるかによつて、逆に自分の心の狀態を知ることが出來る。言葉が心を傳へない時には、ともすれば、心が既に相反いてゐるものである。相手の不理解を責める心は、既に相手に對する侮辱や非難によつて充たされて居り、相手の不理解に失望する心は、既に相手に對する愛を弱められてゐる。他の心との接觸に躓いた時は、先づ自らを省みるべきである。

眞實を云へば、相手の不理解や缺點は自分の行爲の辯解とはならない。自分はただ自分の力の不足を責めればいゝ。さうして自分の内の不純なものを燒きほろぼして行けばいゝ。（偶像再興）

偶像再興「心と言葉」二二七頁―二三六頁。大正十年十月、岩波書店發行。

藤村作　福岡縣の人、東京帝國大學文科出身、文學博士。東京帝國大學教授。

芳賀矢一　福井市の人、東京帝國大學文科出身、國學者、文學博士。昭和二年歿、年六十一。

芳賀矢一と筆蹟

一〇　芳賀先生を悼みて　藤村作

謹みて故芳賀矢一先生の尊靈の御前に申上げます。

昭和二年二月六日、曉の風寒き午前四時四十分、先生は天壽盡き、溘焉として現實を御去りになりました。恩師と仰ぎ、慈父と慕ひ奉る私共も、もはや再び先生の優しき御顏を拜し、溫き御言葉に接し、親しく厚き御教訓と、懇なる御指導と、深き御暗示とを仰ぐことは出來ません。淋しい諒闇の天はいとど淋しくなりました、冷たき二月の心は一入冷たくなりました。今にして先生が私共の靈の力であり、光であらせられたことを痛感させら

一〇　芳賀先生を悼みて

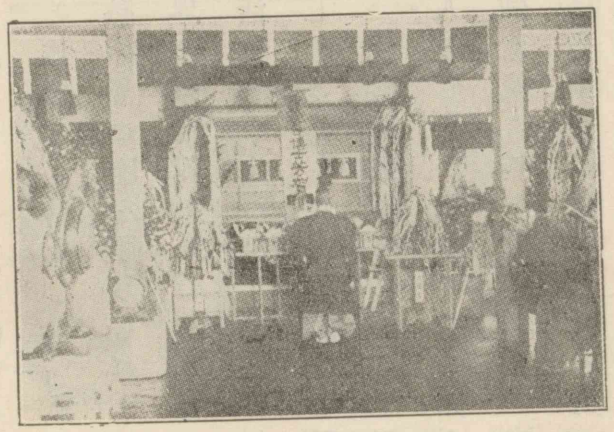
れます。

先生が我が國文學界にお出になりましたことは、實に我が國文學界に限なき惠でありました。獨り過去に於ける惠であつたばかりでなく、先生を失つた現在に於ても、將來においても亦同じく惠であるに相違ありません。國文學の研究に西洋科學の方法を取入れて、國文學の特質を闡明し、我が傳統の精神に科學の精神を調和し、これを統一して、新なる國學を建設することになされました先生畢生の御努力は、實に我が國民の永久に忘却すべからざる偉大なる御功績を殘されました。嘗て先生の御教を仰ぎ、先生の御唱道を聞き、先生の御指導を受けた私共は、各その趨ふ所に就いて先生の御業を紹ぎ、先生の御志を成さうと奮勵致してをります。先生の築かれました基礎の上に、國學の新建設と國文學の新研究とは著々として、その成果を見つゝあるのであります。今や國文

芳賀博士葬儀場

學の價値は汎く社會の認むる所となり、專攻學者は年を逐うて多數に上り、斯學空前の盛觀を呈するに至りましたのは、これ全く先生の御開拓の賜ものであります。先生は明治以來の國文學界の先輩であらせられたばかりでなく、なほ永遠に消ゆることなき國文學界の光であらせられると固く信ずるのであります。

同時に、先生は我が國語教育界にも、亦不滅の偉業を遺されました。小學國語讀本は實に先生の御力に由つて、眞の我が國語讀本になつたと申しても、誰もこれを否定することは出來ません。その他御著述に御講演によつて、直接間接になされました御指導の功は、我が國民

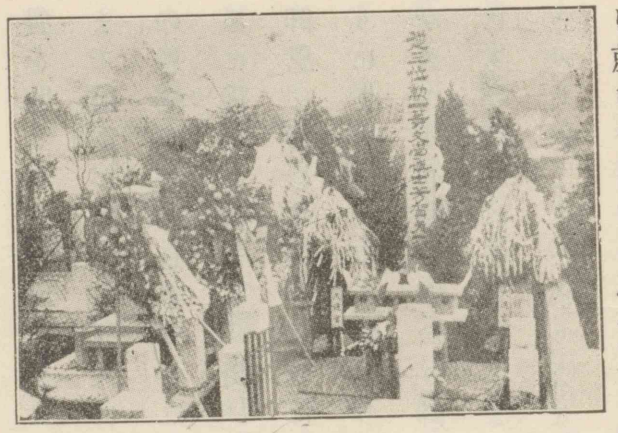


一〇　芳賀先生を悼みて

の銘記する所であります。

先生は御生前、よく、「自分はもう學問に、教育に、成し得べきすべてを成しつくしたものであるから、もう長く生きてゐる要はない。」と述懐せられました。私共はこの御言葉に接する毎に、限なき悲愁の思に胸を閉ぢられました。私共の先生に期待することは、學界に教育界にまだ多々ありますのに、不幸にして宿痾は先生の御活動を中途に封じてしまひました。先生御胸中の御遺憾は御察し申上ぐるだに實に涙の種であります。

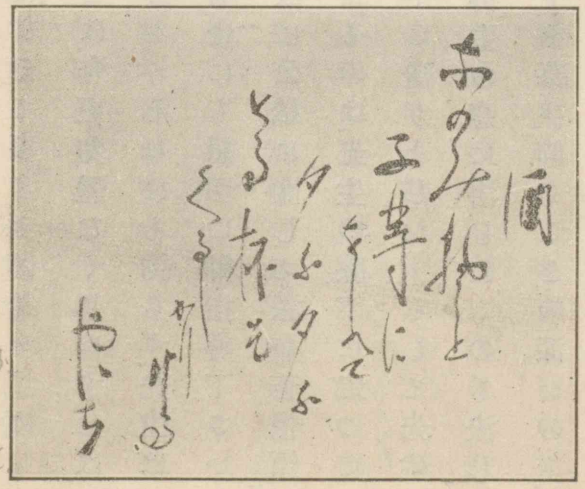
私共は公人としての不朽なる御功績を仰ぎ稱へると共に、又私人としての先生の玉の如き御人格に無限の愛慕と、世の常ならぬ御恩義に無上の感謝とを捧げるものであります。寛容と溫情とは先生の御性格の最も美はしい一面でありました。嘗て大學に於ける先生の御講筵に列し、先生の御薫陶に浴した私共は、一身上



に就いてまでも、一方ならぬ御愛顧御指導を受けたことを忘れることが出來ません。かゝる事にまで、先生の溫情に甘えて、事多き御身を煩はし奉つたことは、今更勿體なく思はずには居られません。それにも拘らず、先生は如何なる場合にも懇切に御指導下さいました。故に公、私に關して深い苦惱煩悶を抱いたものは、先生の膝下に走つて先生の御手に縋りました。そして先生の溫情に再生の惠に浴したものも決して一二には止りません。私共の先生を慕ひ仰ぐことの深いのも、寔に故あることであります。思掛なき先生の訃報を得て、驚と悲しみとで、私共は唯茫然として、親に別れたやうであました。直

芳賀矢一筆蹟

に先生の門に走り、先生の御亡骸の前にひれ伏しましたが、もとのまゝなる平和な御顔にも、もはや溫い血の色を拜することは出來ません。柔しき御口にも、もはや御聲を聞くことは出來ません。これまで濫りに先生の寛大に甘え、先生の恩情を勞ばし奉つたことがそぞろに後悔されます。受けた海山の御恩に對して報い奉つたものの餘りに少かつたことが愧ぢられます。せめては心ゆくばかり御詫申さうにも、今はそれすら叶ひません。何と悲しいことでありませう。先生の廣い御心はこれをしも御恕し下さいませうか。



さりながら先生、先生の偉大なる御精神は深く私共の精神に染込んでをります。先生の君國に對する忠愛の熱火は常に私共の魂を燃し立ててをります。先生の健實なる學風は強く私共の愛慕する所であります。私共はこの精神、この情熱、この學風をもつて、先生の御遺志を紹ぎ、先生の御遺業を成す事に全力を竭くすをもつて、報恩第一の道と致す事を御許し下さいませ。又御遺しになりました令息令孃方は皆俊秀にいらせられ、御家門のこと、外から介意することは更にありませんが、若し萬々一私共の微力を捧ぐる機會がありますならば、せめてそれを鴻恩に報い奉る一つの道と致したいと存じます。この無禮な微意をもどうか御許し下さいませ。

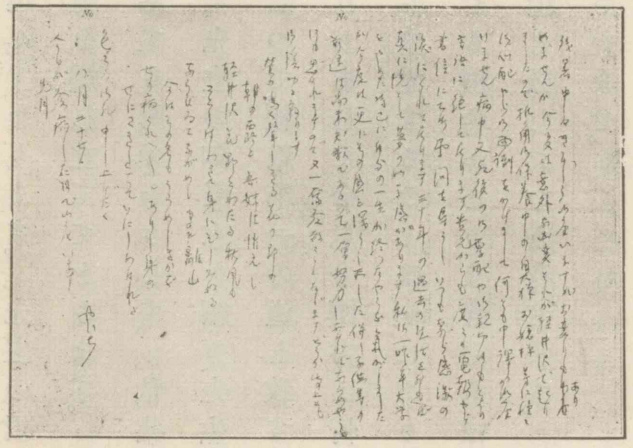
先生、現實では斯うして御別れ致します。併しながら先生、先生は何時までも私共の精神の力であつて下さいませ。生命の光で

あつて下さいませ。　さうして永久に御別れすることのない師弟であつて下さいませ。

（雜誌「國語と國文學」）

鳥居博士
名は龍藏、史學家。文學博士。

芳賀矢一手紙



附　鳥居博士に

御令息様御病死、しかも遠方にて容死の由、何といふ悲報か眞に消魂の至で御座います。　前途有望の御身御本人は申すに及ばず、御兩親に於ても、又知ると知らざるとに於ても、將來に多大の期待をもつて居りましたのに、誠に殘念の事を致しました。　わけて御兩親様の御歎、眞に御察し申上げます。私の九人の子供碌なものは一人も御座いませんが、それでも家内が無くなつてからは一入不憫におもつて、幸に無事を喜んで居りますが、承ればあなた方の御一粒種、これからといふ處での御不幸、人事とは思はれません。昨夜も炬燵を圍んで夕刊をとりどりに、子供等と御子供様たちの御噂に耽りました。何卒この上はよく〳〵御折哀、御氣を御丈夫にお持ち遊ばすやう、くれぐれも御願ひ申上げます。

小生持病引籠中、書中失禮いたします。

昭和二年二月三日　　やいち

鳥居博士殿

奥　様

島崎藤村
名は春樹。明治五年長野縣筑摩郡神坂村に生る。詩人、小説家。

一一　三人の訪問者

『冬』が訪ねて來た。

寒林

島崎藤村

私が待受けて居たのは正直に言ふと、もつと光澤のない、單調で眠さうな貧しさうに震へた、醜く皺がれた老姿であつた。私は自分の側に來た者の顏をつくづくと眺めて、まるで自分の先入主となつたものの考へ方や、自分の豫想してゐたものとは反對であるのに驚かされた。

私は尋ねて見た。

「お前が『冬』か。」

さう言ふお前は一體私を誰だと思ふのだ。そんなにお前は私を見そこなつてゐたのか。」

と『冬』が答へた。

『冬』は私にいろ〳〵な樹木を指して見せた。「あの滿天星（ごうだん）を御覽。」

と言はれて見ると舊い霜葉はもう疾くに落盡くして了つたが茶色を帶びた細く若い枝の一つ一つには既に新生の芽が見られて、そのみづみづしい光澤のある若枝にも、勢ひこんで出て來たやうな新芽にも、冬の焰が流れて來て居た。滿天星ばかりでない、梅の素生（スバエ）は濃い綠色に延びて、はや一尺に及ぶのもある。ちいさくなつて蹲踞（うづくま）んで居るのは躑躅だが、でもがつがつ震へるやうな樣子はすこしも見えない。「あの椿の樹を御覽。」と『冬』が私に言つた。日をうけて光る冬の綠葉には、言ふに言はれぬ輝きがあつて、密集した葉と葉との間からは、大きな蕾が顏を出して居た。何かの深い微笑の

シャバンヌ筆
冬

ボードレール
フランスの詩人。（西暦一八二一―一八六一）
Baudelaire

やうに咲くあの椿の花の中には、霜の來る前に早や開落したのさへあつた。

『冬』は私に八つ手の樹を指して見せた。そこにはまた白に近い淡綠の色彩の新しさがあつて、その力のある花の形は周圍の單調を破つて居た。

三年の間、私は異鄕の客舍の方で暗い冬を送つて來た。寒い雨でも來て障子の暗い日なぞにはよくあのパリの冬を思ひ出す。そこでは一年のうちの最も日の短いといふ冬至前後になると、朝の九時頃に漸く夜が明けて午後の三時半には既に日が暮れて了つた。あのボードレールの詩の中にあるやうな、赤熱の色に燃えてしかも凍り

マロニエ
街路樹の一種。

シャバンヌ
第五課參照。

果てるといふ太陽は、必ずしも北極の果を想像しない迄もパリの町を歩いて居てよく見られるものであつた。枯々としたマロニエの並木の間に冬が來ても、青々として枯れずに居る草地の眺ばかりは、特別な冬景色ではあつたけれども、あの灰色な深い靜寂なシャバンヌの『冬』の色調こそ、かの地の自然にはふさはしいものであつた。

久しぶりで東京の郊外に冬籠した。冬の日の光が屋内まで輝き滿ちるやうなことは、三年の旅の間なかつたことだ。この季節に底青く開けた空を望み得るといふことも珍らしい。私の側へ來て囁いて居たのは、確に『武藏野』の『冬』だつた。

『冬』はそれから毎年のやうに訪ねて來たが、麻布の方で冬籠するやうになつてからは、一層この訪問者を見直すやうになつた。

『冬』で思ひ出す。かつて信濃で逢つた『冬』は、私に取つて一番親

淺間　信濃・上野兩國に跨る活火山。

しみは深い。毎年五ケ月の長い間も、私は『冬』と一緒に暮した。けれどもあの山の上では一切のものは皆潜み隠れて了つて、ついぞ私は『冬』の笑顔といふものを見たこともなかつた。十一月の上旬といへばはや山々は初雪が來た。そして暗く寂しい雪空に、日のめを仰ぐことも稀な頃になると、淺間の煙も隠れて見えなかつた。千曲川の流ですら氷に閉ざされた。私の周圍には、降積る深い溶けない一面の雪があるばかりであつた。その雪は私の舊い住居の庭をも埋めた。どうかすると北向の縁側よりも庭の雪の方が高かつた。軒に垂れる劒のやうな氷柱の長さは二尺にも三尺にも及んだ。長い寒い夜なぞは凍み裂ける部屋の柱の音を聞きながら唯もう穴に隠れる蟲のやうにちひさくなつて居た。

この『冬』が私の先入主となつて了つた。私はあの山の上で七度も冬を迎へた。私の眼に映る『冬』は唯灰色のものだつた。パ

リの方で逢つた『冬』はそれほど雪深いものではなかつたが、でも灰色な色調に於ては信濃の山の上に劣らなかつた。私は遠い旅から歸つて、久し振で自分のところへ訪ねて來てくれたものの顔を見た時、それが『冬』だとはどうしても信じられないぐらゐに思つた。

遠い旅から歸つて三度目の『冬』を迎へた年程、私も常磐樹の若葉をしみじみとよく見たためしはなかつた。今まで私は黄落する霜葉の方に氣を取られて、冬の初に見られる常磐樹の新葉にはそれ程の注意も拂はずにゐた。あの初冬の若葉は、一年を通して樹木の世界に見る最も麗はしいものの一つだ。『冬』はその年も、槇の緑葉だの、紅い實を垂れた萬兩なぞを私に指して見せた。萬兩の實には白もある。あゝいふ濃い珠のやうな光澤は冬季でなければ見られない。「あの槇の樹を御覽。」と云つて『冬』がまた私に指

ゴシック　Gothic　西歐にて十二世紀より十五世紀に亘り流行せし尖端アーチ形の建築樣式。

してくれたのを見ると、黑ずんでしつかりとした幹や、細くても强健な姿を失はないあの枝は、まるでゴシック風の建築物に見る感じだ。おまけに、冬の日を受けた槲の若葉には言ふに言はれぬ深い輝きがあつた。

『冬』は私に言つた

「お前はこれまでそんなに私を見そこなつてゐたのか。今年はお前の小さな娘のところへ土產まで持つて來た。あの兒の赤い頰邊もこの私の志だ。」と。

『貧』が訪ねて來た。

子供の時分からの馴染のやうな顏つきをしたこの訪問者が、復狃々しく私の側へ來た。正直に言ふとこの足繁く訪ねて來る客の顏を見る度に、私は『冬』以上の醜さを感じてゐた。「お前とは舊い

シャバンヌ筆　貧しき漁夫

馴染だ。」とでも言ひたげなこの客に對してばかりでも、私の頭は下つてしまつた。とても私には長くこの客を眺めてはゐられなかつた。その私が、自分の側へ來たものの顏をよく見てゐるうちに、今まで思もよらなかつたやうなやさしい微笑をすら見つけた。私は以前に『冬』に言つたと同じ調子で、この客に尋ねて見ずにはゐられなかつた。

「お前が『貧』か。」

「さういふお前は私を誰だと思ふ。そんなに長くお前は私を知らずにゐたのか。」

一一　三人の訪問者

と『貧』が答へた。

「珍らしいことだ。今迄私はお前の、笑顔といふものを見たことがない。お前にそんな笑顔があらうとは、思つて見たことすらない。私はお前が笑はないものだとばかり思つてゐた。稀にお前に笑はれると、私は身が縮むやうに厭な氣がしたものだ。唯私はお前に狃れたかして、お前が側にゐてくれると、一番安心する。」かう私が言ふと、『貧』は笑つて、

「私に狃れてはいけない。もつと私を尊敬してほしい。よく私に清いといふ言葉をつけて、『清貧』と私を呼んでくれる人もあるが、本當の私はそんな冷かなものではない。私は自分の歩いた足跡に花を咲かせることも出來る。私は自分の住居を宮殿に變へることも出來る。私は一種の幻術者だ。かう見えても私は世に所謂『富』なぞの考へるよりは、もつと遠い夢を見てゐる。」

ロダン作
老婆（彫刻）

『老』が訪ねて來た。

これこそ私が『貧』以上醜く考へてゐたものだ。不思議にも『老』までが私に微笑んで見せた。

私はまた『貧』に尋ねて見た

と同じ調子で、

「お前が『老』か。」

と言はずにゐられなかつた。

私の側へ來たものの顔をよく見ると、今まで私が胸に描いてゐたものは眞實の『老』ではなくて、『萎縮』であつたことがわかつて來た。

自分の側へ來たものは、もつと光つたものだ。もつと有難味の

あるものだ。併しこの訪問者が私のところへ來るやうになつてから、まだ日が淺い。私はもつとよく話して見なければ、本當にこの客のことは分らない。唯私には『老』の微笑といふことが分つて來ただけだ。どうかして私はこの客をよく知りたい。そして自分も本當に年を取りたいものだと思つてゐる。

まだ誰か訪ねて來たやうな氣がする。それが私の家の戸口に佇んでゐるやうな氣がする。私はそれが『死』であることを感知する。恐らく私が以上三人の訪問者から、自分の先入主となつたものの考へ方の間違つてゐたことを教へられたやうに、『死』もまた思もよらないことを教へるかも知れない……

（飯倉だより）

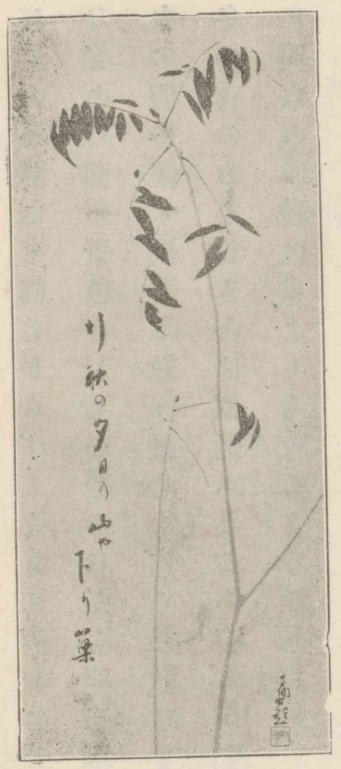
飯倉だより
「三人の訪問者」一頁―九頁。大正十一年九月・アルス發行。

一二　秋夜四錄

幸田露伴

幸田露伴
名は成行。江戸に生る・文學博士、文學者、小說家。

秋の夜を心悲しきものには古へより云ひならはしたり。げに春の夜の月おぼろに風和ぎて鐘の音なんども思ひ做しにや長閑に緩く渡るやう聞ゆる頃の樣子には似るべくもあらず。また月無く空暗くて小雨しめやかに降る夜も、春は檐の玉水の音さへ憎からで、燈火の光取散らしたる机のまはり、茶碗・小土瓶・灰皿なんともやさしく浮きて、身を寄する柱の吾が背にあたる加減にすらいひがたき春なつかしさあり。



大谷句佛筆
秋

秋は甚だしくこれに異なり。晝の暑さの夕風にやゝ去りて、露降

る星の夜のいさぎよきに小庭の闇を賞しつゝ、縁先の端居を樂しむ夏の風情にも同じからず。　まして窓打つ時雨の音或は雪の聲などに外面の景色をおもひやりながら、座布團の溫みに泥みて埋火の假の情も振棄て難う、雄心も無く果敢なき草子などに讀入る冬の夜のおもむきとは、似通ふところ有るが如くにして實は大いに異なり。　秋は晝よりも夜こそをかしけれ。

されどその夜のおもむき、春の夜のやはらかみ有りといふにも無く、夏の夜のいさぎよさありといふにもなく、また冬の夜のさびあるにもあらず、ただ秋の夜はおのづからこれ秋の夜にして、必ずしも心悲しとのみにはあらざれど、強ひて云はむには猶然云はんよりほかに辭も無かるべきにや。

○

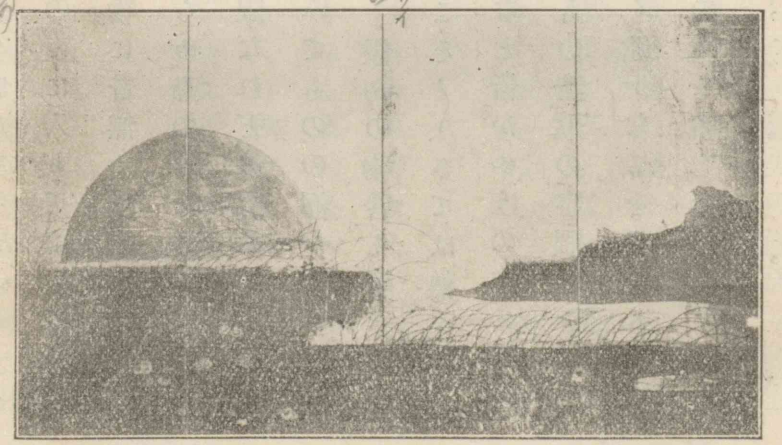
夕汐に風收まりて、青く澄みたる大空に、白き雲の絹綿を薄く引

きたる如くなるが立ちたるまゝ入日の光少時の華やかさを見せて、忽ち手元暗くなれる靜かなる秋の暮の夜に入りては、大抵星高く空深くして、芋の葉の露、菽の葉の露、萬物に音無く、唯露の墜つるなり。　かゝる夜をこそ我が世とは思ふらめ、蟲の聲々きほひ立つて鳴くは、聞く耳にも清々しく爽かなる限なれど、憂有る人の寐られぬなんどいふも、ひたすらに氣のみ澄みてものの靜かなる、かく晴れて而も穩かなる時の事なるべくや。　假初の物音も響き渡りて、隣家の庖厨のこと〳〵、吾が屋の鼠のこそ〳〵、さては熟みきつておのづと落ちたる柿のけたゝましきなど、皆かやうの夜の景物にて、燈も瞬かぬ午前二時頃、たま〳〵古人の詩歌の、字眼光を放ちて蠹餘の紙上に起ちて舞ふ姿の、今猶若く健かなるを見なんどすることあれば、それよりその人いたく秋の夜を執しおもふに至るとかや。

俵屋宗達筆
武藏野の月

○

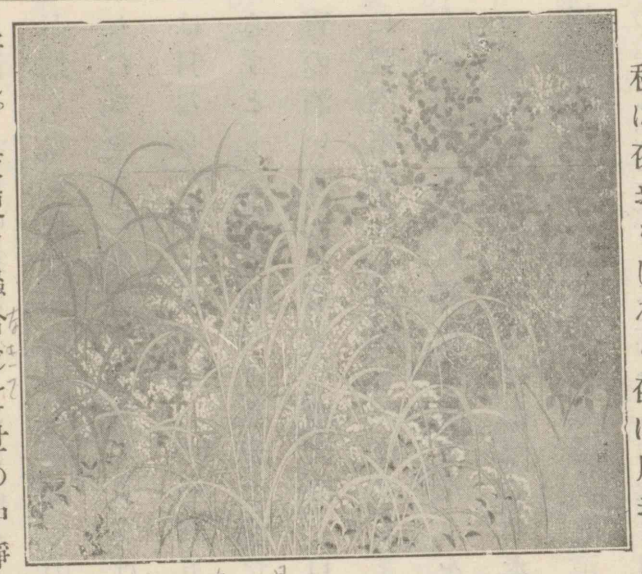
月の夜は秋こそ勝れたれ。春の月の光は、美しき女の童の髪の如し、めでたきことは誠にめでたし、なつかしきことも誠になつかし。されど猶聊か物足らぬ心地す。冬の月は、水晶もて作れるものを見るがごとし、清らさは餘りありて味無きに近し。夏の夜の月の團々と大いなるが、海原の果より、松の樹の間より、または市中の甍の浪間より出でたる、いづれも目覺ましく心ゆくものにて、夜の景色も快くをかしけれど、ただ我が魂の世に浮かるゝをこそ覺ゆれ、天地の靈氣の身に浸入るやうなるを覺



夕月

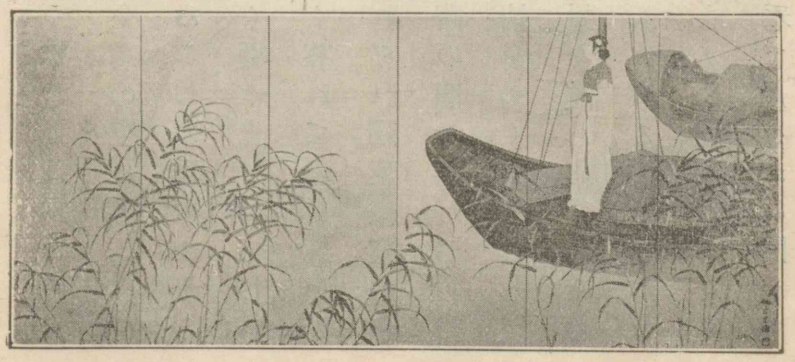
ゆることなし。

秋は夜おもしろく、夜は月おもしろし。中の秋の五日六日の月の、ふと見る夕暮の空に出居りて、雜木の梢、もろこしの垂葉なんどに風かすけく囁く先づおもしろし。遠山黑く暮れて、素月輝を揚げ、庭樹のそれぞれ潤葉・纖葉の葉表の照り、葉蔭の闇、おのがじし畫り趣をなし詩情をつくりて、合して爽涼清澄の景を釀し出すさま、何處にもありふれたることながら好し。夜更け蟲吟じて世の中靜かなる時、たま〳〵燈前に書をさし置きて起つて廊を歩む因に、窓櫺の白きを看て、戸をおし開きて



夜聽歌者

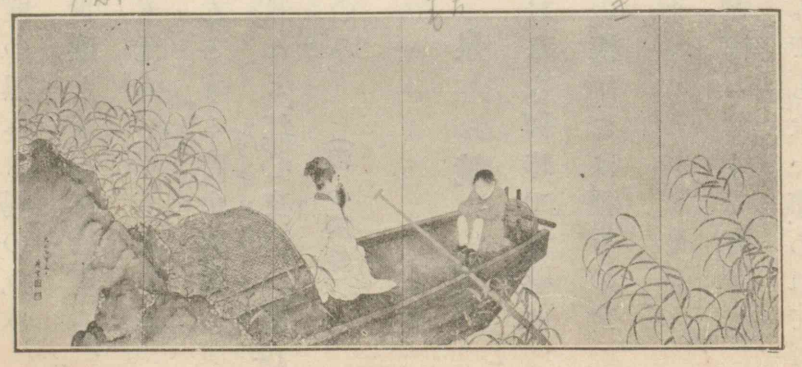
出づれば、月天心を過ぎて光華六合に漲り、霜に澄める夜の氣は水まさに凍らんと欲するが如くなる、身心頓にこの世のものならずなりたるやうにおぼえて、秋ならでは、夜ならでは、月ならではと思はる。二十四五日までならずとも二十日過の月を曉に觀たる亦好し。宵の酒いさゝか過ぎて、曉天夙く目覺めたるに、腔内猶熱して口渴をおぼゆるまゝ、これも人の子なれば奴婢を煩はさんもをかしからぬ心地して、ひとり外に出で、井の本に立寄る折柄、朝霧淺々と罩めて、星弱々と消殘れる天のかなたに、秋とは云へど力無き月を見たる、中々におもしろし。いさゝかの竹むら草むらの根方なんどは猶やゝ闇きに、すがれの蟲の音かしがましからず、淺黄に明行く空吹く風の冷かに領に落つる、たとへん方なく胸涼しくおぼえて、酒に黃金の漣を興じ、膾に銀絲の美しさを賞せし昨夜の筵も、ただ糟臭く腥臭くして、浮世の垢を嘗めしには過ぎざりけるをと、少しは我から我を疎み心になるも、秋の與ふる智慧といふものなるべきにや。

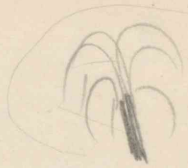


右　同

○

秋よし夜よし月よし、舟にして之を味はふ最もよきやうなり。大江露に更けて、天地月に白む時、孤蓬に身を埋めて隱洲の洲垂に泊れば、流水微しく河岸に激して船底に玉琴の





洗心廣錄　一四七頁―一五一頁。大正十五年六月、至誠堂書店發行。

泉鏡花　名は鏡太郎。明治六年金澤市に生る。小說家。

鳴るを聞くが如く、兩岸夢より淡くして渚の葭の黑みも楊の丸みもただ一樣に一刷毛の墨と薄く暈み、人語と世塵とすべて皆至らず、詩情と茶趣とただ双び在る、をかしさ何とも云ふべくもあらず。寂として心頭の狀と眼前の景と共に融合せんとする時、余吾驚のふはりと下りて羽づくろひして艫に寢たるなんど、江心夜泊の實を味はひたる人にして後その趣を知るべきのみ。（洗心廣錄）

一三　くさびら

泉鏡花

御馳走には季節がまだ早いが、ただ見るだけなら何時でも構はない。食料になるならないは別として、今頃の梅雨には、種々の茸がによき〳〵と野山に生える。

野山ににによき〳〵と言つて、あの形を思ふと、何となくおどけてきこえて、大分安直に扱ふやうだけれども、とんでもない事、あれで

麹町　東京市麹町區。

なか〳〵凄味がある。

先年、麹町の土手三番町の堀端寄に住んだ借家は、ひどい濕氣で、遁出すやうに引越した事がある。一體三間ばかりの棟割長屋に、八疊も、京間で廣々として、柱に唐草彫の釘かくしなどがあらうと言ふ、書院づくりの一座敷を、無理にくつ着けて、屋賃をお邸なみにしたのであるから、天井は高いが、床は低い。――大掃除の時に、床板を剝がすと、下は水溜になつて居て、溢れたのがちよろ〳〵と蜘蛛手に走つたのだからおそろしい。

この邸……いやこの座敷へ茸が出た。生えた……などと尋常な事は言ふまい。「出た」とおばけらしく話したい。五月雨のしと〳〵とする時分、家内が朝の間、掃除をする時、縁のあかりで氣がつくと、疊のへりを横縱にすつと一列に並んで、小さい雨垂に足の生えたやうなものの群り出たのを徵にしては寸法が長し、と横

に透かすと、まあ、怪しからない、悉く茸であつた。細い針ほどな侏儒が、一つ一つと歩き出しさうな氣勢がある。びつくりして、煮湯で雑巾を絞つて、よく拭つて、先づ退治た。が、暮方の掃除に視ると同じやうにずらりと並んで揃つて出てゐた。これが茸なればこそ、目もまはさずに、じつとこらへて、私には話さずに祕してゐた。私が臆病だからである。

何しろ梅雨あけ早々にその家は引越した。が、……私はあとで聞いて身ぶるひした。むかしは加州山中のとある溫泉宿の大圍爐裏に、灰の中から、笠のかこみ一尺ばかりの眞黑な茸が三本づつ、續けて五日も生えた、といふのが、手近な古書に出てゐる。家族は一統加持よ、祈禱よ、と青くなつて騷いだが、私に似ないその主人、膽が据わつて聊かも騷がない、「茸だから生える。」と言つて、むしつては捨て、むしつては捨てたので、やがて妖はやんで、一家に何事の

障もなかつた。——鐵心銷怪。偉い！……とその編者は賞めてゐる。私は笑はれても仕方がない。成程、その八疊にうたゝねをすると、とろりとすると下腹がちくりと疼んだ。針のやうな茸が洒落に突いたのであらうと思つて、もう一度身ぶるひすると同時に、どうやらその茸が、一つづつ芥子ほどの目を剝いて、ぺろりと舌を出して、店賃の安いのを嘲つてゐたやうで、少々癪だが、しかしをかしい。をかしいが氣味が惡い。

能の狂言に「茸」がある。——山家あたりに住むものが、邸中、座敷まで大きな茸が幾つともなく出て祟るのに困じて、大峰・葛城を渡つた知音の山伏を賴んで來ると、「それ、山伏と言つぱ山伏なり、何と殊勝なか。」と先づ威張つて、兜巾を傾け、いらたかの數珠を揉みに揉んで、祈るほどに、祈るほどに、祈ればこれ思ひなしか、目鼻手足のやうなものの見えるのがおびただしく

大峰　大和の高山、山伏修行の道場、兜巾

葛城　大和國西界の峻嶺。その高峰を金剛山とす。

出て、したゝか仇をなし、引着いて惱ませる。「いで、この上は、茄子の印を結んで掛け、いろはにほへとと祈るならば、などか奇特のなかるべき、などか、ちりぬるをわかんなれ。」と祈る時、傘を半びらきにした、中にも毒々しい魔形なのが、二の松へ這つて出る。これにぎよつとしながら、いま一祈り祈りがけると、その茸、傘を開いてすつくと立ち、躍りかゝつて、「ゆるせ。」とにげ廻る山伏を、「取つて嚙まう、取つて嚙まう。」と脅かすのである。――彼等を輕んずる人間に對して茸のために氣を吐いたものである。臆病な癖に私はすきだ。

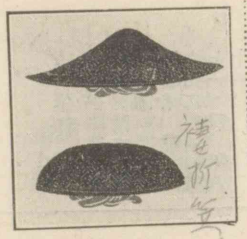
そこで茸の扮裝は、縞の着附・括袴・腰帶・脚絆で、見德・嘯吹・上髯の面

二の松
能舞臺と樂屋とを通ずる橋掛の側にある松、三本の中、中央の松。

狂言
くさびらの圖

武惡（狂言面）

笠



七寶の柱
八六頁―八九頁、大正十三年三月、新潮社發行。

を被る。その傘の逸もつが、鬼頭巾で武惡の面ださうである。岩茸・灰茸・鳶茸・坊主茸の類であらう。いづれも塗笠・檜笠・菅笠・坊主笠を被つて出ると言ふ。……この狂言はまだ見ないが古寺の廣室の雨、孤つ屋の霧のたそがれを舞臺にして、ずらりとこの形で並んだら、並んだだけで、おもしろからう。……中に紅絹の切に、白い顏の目ばかり出して褄折笠の姿がある。紅茸らしい。あの露を帶びた色は幽かに光をさへ放つて、たとへば妖女の艶がある。庭に植ゑたいくらゐに思ふ。食べるのぢやあないから――茸よ、取つて嚙むなよ、取つて嚙むなよ。……

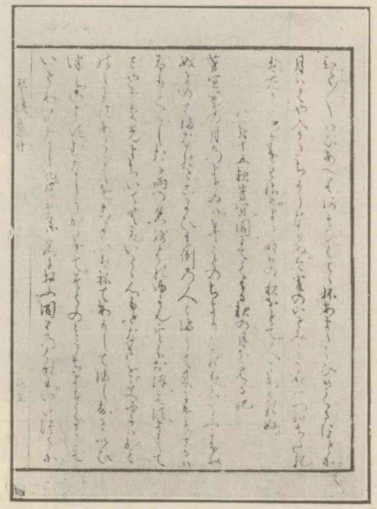
（七寶の柱）

一四　小品三章

八月十五夜芳宜園にて曇る夜の月を見る

村田春海

芳宜園の月のまとゐは年ごとのちぎりなれば、こてふにも似ぬ夜のさまなれど、今宵も例の人々まうで來にけり。　さるは降りくらしたる雨の名殘霽れゆかむ空もおぼえず、ましてさやけき光待ちいでむは、いと心もとなきを、更けゆかばかくのみにはあらじを、今宵は寢で明してましなどいひつゝ、伊豫簾むなしうかゝげて、空のみうちまもらるゝもいとわりなしや。　今宵は名に負ふ園生の



村田春海　通稱平四郎、琴後翁と號す。賀茂眞淵の門人、國學者、歌人。文化八年（一二四七一）歿、年六十六。

こてふにも似ぬ　月夜よし夜よしと人に告げやらばこてふに似たり待たずしもあらず（古今集）

琴後集原本

琴後集　十五卷、春海の著。著者の歌文を集めしもの。

清水濱臣　江戸の人、泊洒舍と號す。春海の門人。文政七年（一二四八四）歿、年四十九。

濱臣筆蹟

花もいたづらに夜の錦にて淺茅がもとの松蟲のみ、やう〳〵聲そはりゆくも猶あかぬわざながら、さすがにあはれは添へつべし。

晴間なき月をいかにといひ〳〵て
そらながめにや今宵あかさむ

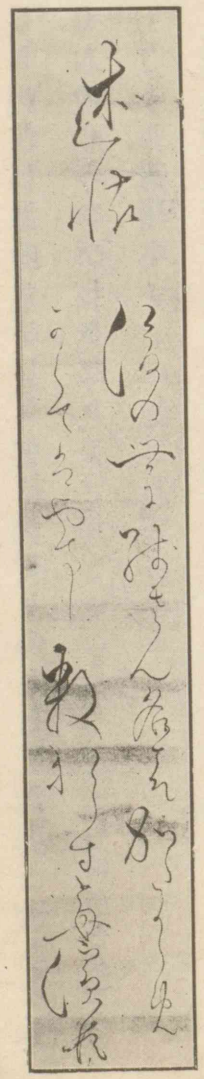
かきくらす雲間のかげはうとくとも
月まつむしよせめて語らへ

（琴後集）

砧を聞く

清水濱臣

近しと聞けば遠し、遠しと聞けば近し。　しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる。　雁がねの聲の砧をさそふにやあらん、砧の音の雁



がねに通ふにやあらむ。あなあやし、あなあやし。そもこの音の悲しきか、住む里のさびしきか、打つをりのうきゆゑか。皆あらず、聞く人の心のさびしきなり。

（泊酒舍集）

泊酒舍集　八卷、濱臣の著。著者の文集。

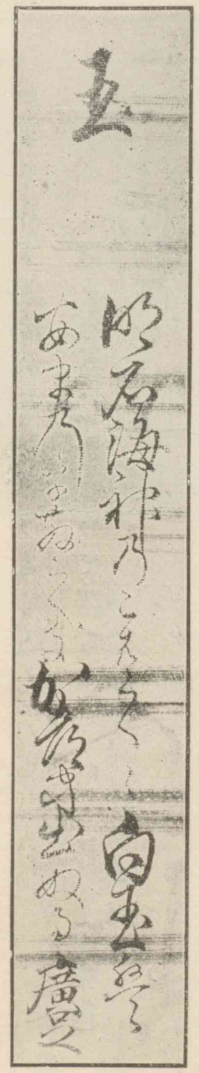
中島廣足　檀園と號す。肥後の人、本居大平の門人。元治元年（一五二四）歿、年五十一。

廣足筆蹟

夜學

中島廣足

寺々の初夜の鐘のひびきもをさまりて、皆人も寢たるに、いとうれしう、燈火あかくなして文机に打向ひたるいみじう心すみて晝見たりしあたりの、何ごころなくて過ぎにしも思ひ知られて、深き心ばへあるくだりくだりも、おのづから解きえらるかし。かゝげつくしてもなほねぶたさも知らず、油さし添へつゝ見もてゆくに、



遠き世の人もたださしむかひ語らふ心地す。さうしつくりて、をかしきふしぶし、あるはふと思ひ得たることなどをば、墨おしすりつゝ書きつけなどするもをかし。とりのこゑは夜深きにやと思ふに、いととく明けはなれたる、しばしとて打ちねぶる夢のうちも、あだしごとならむやは。

（檀園文集）

檀園文集　廣足の著、著者の文集。

横井也有　名は時敏。尾張侯の重臣。俳諧を嗜み、半掃庵・蘿隱など號す。天明三年（一七四三）歿、年八十二。

莊周が夢　莊子、齊物論に、莊周夢に胡蝶となりたる話あり。

一五　百蟲譜

横井也有

蝶の花に飛びかひたる、やさしき物のかぎりなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢もこの物には託しけめ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風靜まりて遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺したれば、このものの事、更にも謗り難し。

やがて死ぬ……

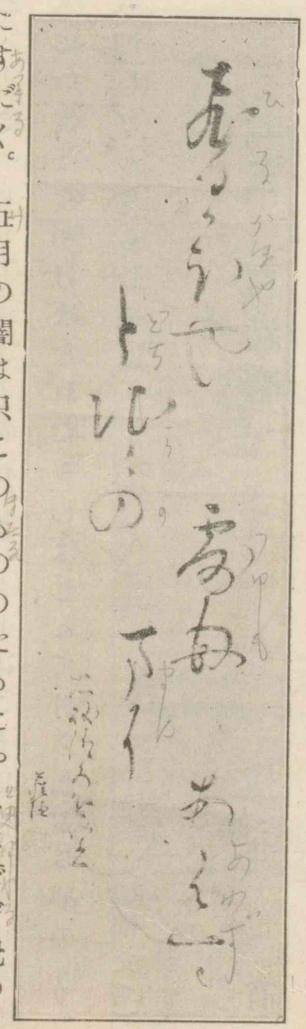
やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲（芭蕉）

横井也有筆

貧の學者

車胤幼にして恭勤博覽、貧にして油を得ず。夏、囊に數十の螢火を盛り、書を讀む。（晉書）

蟬はただ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やゝ日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふ事をきかず、このものばかり初蟬といはるゝこそ大きなる手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず。」と、このものの上は、翁の一句に盡きたりといふべし。螢は比ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ草にすだく。五月の闇は只このもののためにやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者にとられて、油火の代りにせられたるはこのものの本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、殊の外の



待つ暮の歌

わがせこが來べき宵なりさゝがにくものふるまひかねてしるしも（古今集）

不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃ならむ。つくゝぼふしといふ蟬は、筑紫戀ひしともいふなり。筑紫の人の旅に死して、このものになりたりと、世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蜘蛛はたくみに網を結んで、ひそまつて物を害せむとす。待つ暮の歌によまれ、又は退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていとにくし。古代朝敵の初として、賴光をさへおびやかしたる、いとおそろし。さはいへ廢宅の荒れたる軒に、蟬の羽などかけ捨てたるは、いさゝかあはれ添ふ折もあらむか。彼はかひがひしく巢作りてこそあれ、東海道にちりぼひたる宿なし者をば、くもとはいかでいふやらむ。

蠶の生涯は世の爲に終り、火とり蟲は誰がために身をこがすや。

蜉蝣ははかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は不物ずきの謗となれり。おなじ寶の名によばれて、玉蟲はやさしく、こがね蟲はいやし。

蟻は明暮にいそがしく、世の營に隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事を得む。さるもたよりあしきかたに穴を營みて、千丈の堤を崩すべからず。

槐安の都

大槐安國南柯郡は古槐樹の南枝に迺ずる蟻穴なり。淳于棼、夢にその郡守となれり。

横井也有像

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。狗の齒に嚙まるる蚤はたま〳〵にして、猿の手にさかるべし。

歐陽氏

名は修。支那宋代の文人。憎蒼蠅賦あり。

長嘯子

木下勝俊。若狹小濱の城主。後封を失ひ隱棲、和歌をよくす。慶安三年歿、年八十一。

ぐらるゝ虱は逃るゝこと難かるべし。

蝸牛は只水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらむ。家もちたれども、行く先々をおひ歩くは水雲の安きにも似ず。蛇・蚯蚓の

をさむし

筬蟲、やすで、あまひこともいふ。

原・吉原

共に駿河の地名。

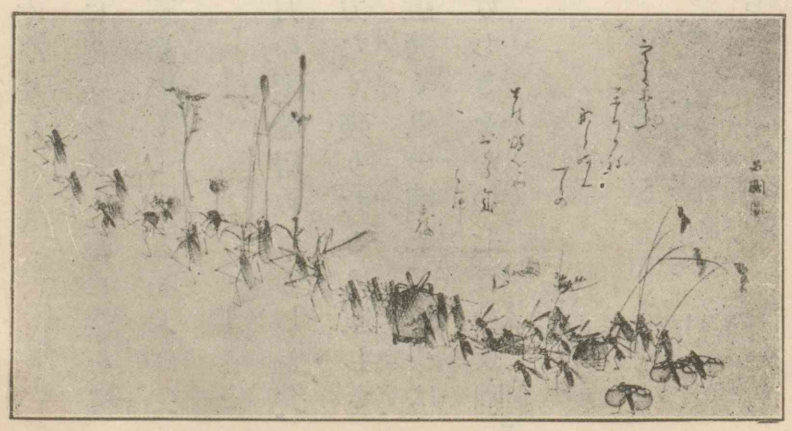
蟲の行列

足なくてもあるくべくば、蜈蚣をさむしの數多きは不用の事なり。

螳螂の痩せたるも、斧を持ちたる誇よりその心いかつなり。人の上にもこのたぐひはあるべし。

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。ただ原・吉原を駕にのりて富士を眺めゆく人には似たり。

促織・鈴蟲・轡蟲はその音の似たるを以て名によべり。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附けたるならむ。毛生ひむくつけき蟲にもおなじ名ありて、松を枯し、人にうとまる。一在處に二人の八兵衛ありて、ひとりは後生をねがひ、



ひとりは殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

きりぎりすのつづりさせとは、人の爲に夜寒を敎へ、藻に棲む蟲は、われからとただ身の上を歎くらむを、蓑蟲のちゝよと呼ぶは父のみ戀ひてなどかは母を慕はざるらむ。

蚊は憎むべきかぎりながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕、始めて仄かに聞きたらむ、又は長月の頃、力なく殘りたるは、寂しきかたもあり。蚊屋釣りたる家のさま、蚊遣焚く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙なかりけむ。

（鶉衣）

七賢　竹林の七賢のこと。嵇康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎をいふ。

鶉衣　十五卷。也有の俳文を集めたるもの。

齋藤茂吉　山形縣の人、明治十五年生。東京帝國大學醫科出身、醫學博士、歌人。

實朝　源實朝、賴朝の次子、鎌倉三代將軍。承久元年（一八七九、歿、年二十八。

一六　實朝の歌

齋藤茂吉

ふく風の涼しくもあるかおのづから
山の蟬鳴きて秋は來にけり

實朝

苦しくも……　萬葉集卷三、長忌寸奥麻呂の歌。

萬葉　萬葉集の略、二十卷。奈良朝に成りし日本最古の歌集。

源實朝像

「寒蟬鳴く」といふ題がある。「涼しくもあるか」は「涼しくあるかな」の意。「苦しくも降來る雨か三輪が崎佐野のあたりに家もあらなくに」など參考になる。ただ萬葉のこの歌には苦痛に堪へがたい響があるが、實朝のこの歌の場合はもつとゆつたりしてゐる。これは「苦しくも」と「涼しくも」との意味及び音調の差異によることが勿論であるが、一方は「降來る雨か」といつて「か」といふ強き詠歎の助辭をすぐ雨に續けて居る。一方は「あるか」と續けて居る。差點は此處にも存すると思ふ。一首として味はふべきは無論であるが、又分解的に微細な點を吟味するのは、短歌研究者には缺くべからざることのやうに思はれる。「おのづから」は自然にの意味であるが、莊重の響きある言葉であつて、日本語として特殊の味を

持つ言葉と思ふ。この歌の場合にあつては遺憾なくその特色を發揮したものであつて、古今獨歩であると思ふ。「山の蟬」は山にゐる寒蟬で、里よりも山では遲く鳴くから斯樣に言つたものであるが、簡單で力あり新味のある言葉である。一首中にあつて、この語は輕々に看過される傾きがあると思ふが、この語を見逃す樣では、未だしき鑑賞家である。又研究者としては、吾等はかういふ言葉の價値に向つて、飽くまで味はゝねばならぬ。一首の調べの莊重にして、かゝる光景の表現に適當せる、而して主としてそれと融化した作者の心持のしみじみと味はゝれるこの歌は、尊い歌といふべきである。

側から見て、他人の作の句を踏襲した樣な形跡があり〳〵と見えて居ながら、なほ創作として力を失はない所以は、彼はそれ等の句を意識せずに、知らず識らず用ひたものであらうし、また實際に

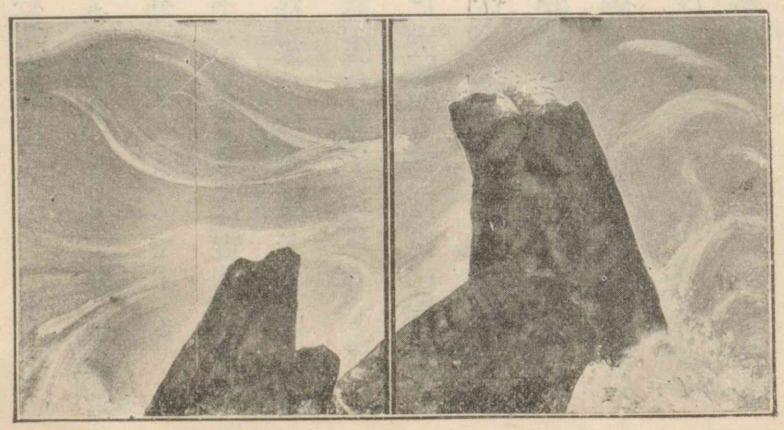
ふれ、眞實に感じて作歌したからであらう。この點に就いて、後世の吾等は餘程注意して研究する價値があると思ふ。歌を透して見る實朝は、餘程敏感な人の樣に思はれる。この歌でも「大海の」の歌でも餘程敏感である。自然に融化することの出來た彼は、抒情詩人として偉大なる所以であつた。

荒磯に波のよるを見てよめる

大海の磯もとどろに寄する波
われて碎けてさけて散るかも

實朝

所謂敍景歌は天然顯象が作歌衝動に働き掛けるのであるが、天然顯象の空間



的開展並びに時間的流動と吾人の內的節奏が相共鳴し相抱化融合する時に、茲に詩は生れんとするのである。つまり天然の無常相が吾等內心のシンボルたる時に、茲に詩は生れるのである。強烈な主觀は、この意味に於て作歌に大切である。予は實朝のこの歌を讀んで、常々かう思ふのであつた。從來の修辭學者或は短歌批評家は、この歌を、擬聲法の最も巧な歌、寫生の最も巧な歌と稱してゐる。けれども、單にそれだけでは、眞に天然の無常相に觀入したこの歌の如きを、解明する事が出來ない。達者な腕前、練達した技巧、單にそれだけでは決してこの樣な歌は作れないのである。直に天然を學べといひ、親しめといひ、歸命せよと云ひ、虛心なれと云ふも、如上の事柄に關聯してゐるのではあるまいか。

かくして始めて所謂敍景歌に生命があり、かくして始めて天然の本質に接觸する事が出來るのである。想化と云ひ、純化と云ひ

雲居より
榮花物語所載、皇后宮權大夫經信の歌。

印象的といふのも、皆この態度に他ならぬのである。それにも拘らず、吾等は天然顯象に對していはゆる敍景歌を詠む時、いろ〳〵な邪路に陷り易い。(イ)眞の自己の言葉でない表面的な流行的句法に左右せられる事がある。「雲居より轟き落つる瀧つ瀨はただ白絲の絕えぬなりけり。」この樣な歌は白絲瀧といふ概念に拘束されて、少しも天然に接觸しては居ない。眞に感じない、同化しないからである。(ロ)「胸とどろく」とか「生けるが如し」とか、何か强さうな事を言はなければ、力なく、詩人でない樣に思ふ輩がある。かゝるともがらは、その實、天然と抱化してゐるのでは無く、作歌の動因たる天然などは、そつち除けで、上の空で、强がつて居るのである。この樣な事も予等は注意せねばならぬ。

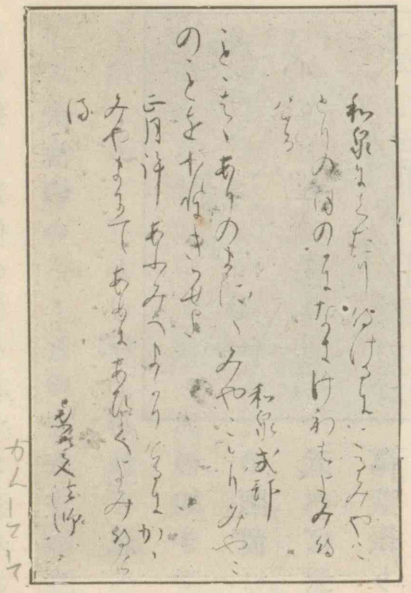
さうして嚴肅な表現にうつるのであるが、實朝は比較的表現法の無造作な歌人であつた。平氣で(表現法が作つて居る作が多い

けれども、この作の如きは骨折つて表して居る。それはおのづから然るのである。この歌は自然顯象が內包的に、單純に、さながらに表現され、それと同化し高潮に達した作者內心の動搖が、彷彿として表れてゐる點に於て、偉大な力を有して居るのである。

一首の調が初句から起つて、段々强烈になつてゆき、終に「かも」で止めて居る。一首を通ずる事勿論であるが、この「かも」に於て作者內心の運動が表れ終るのである。この場合、如何なる言葉を以てもこの「かも」に代用する事は出來ない。それが必然にして緊密であるからである。今の進歩した歌壇に於ても、「かも」は死語なり用ふべからずなどいふ淺薄概見に住する者があるのであるからたまらない。一本に第三句の「寄する波」は「寄る波の」となつて居る。いづれもよいが「とどろに」から連續するのであるから、「寄する波」の方が自然である。「寄る波の」と言へば「とどろに」との聯關が不緊密

正岡先生　正岡子規のこと。子規、名は常規、伊豫の人。俳人。明治三十五年歿、年三十六。

になり調子が弱く、弛緩する。「寄する波」といへば、第三句で切れるからわるいといふ論者があるが、實は第三句で切れないで、連續句なので、「の」又は「が」「は」が省略されて居る我が國の一つの語法である。かゝる論者は、連續と切れるといふ事を、よく研究して居ないのだ。「われ」よりも「くだけ」は强く「さけ」はなほ强い。これは全く音の配列によるので、日本語を有効に適所に用ひるといふのは、かゝる事をいふのであるが、此處は技巧の力といふよりも、深い同化力に待たなければならぬ。「て」といふ助辭が三つ續いて、「かも」で止めたあたり、予が常に感歎して、止まぬ處である。

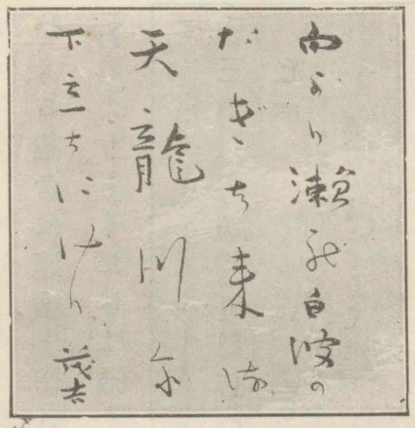


正岡先生は、この歌を評して、實朝獨自の句法で萬葉集にもない

といふ樣な意味の事を云はれたと覺ゆるが、例によつて、萬葉には
この歌と類似の句を有する歌がある。例へば

大海のいそもとゆすり立つ波の
よらむ（よせむ）と思へる濱のさやけく

の如きである。當時も流行した本歌取の陋習に幾分墮して居る氣味があると云へば云はれるが、當時只一人ぽつりと萬葉振りの歌を詠んで居るのであるから、彼の性情がおのづから萬葉の歌人と相契合して類似の歌を生んだのだと解するのが正當であらう。



大海の
萬葉集卷七、雜歌。

茂吉筆蹟

この歌初句が阿行麻行奈行の音から始まり、左行多行良行の音が加はり、結句に從つて加行多行左行の音が多くなつて

金槐集私鈔
大正十五年四月、春陽堂發行。

西田幾多郎
石川縣の人。明治元年生。哲學者、文學博士、京都帝國大學教授。

東圃
藤岡作太郎。金澤の人、國文學者、文學博士、東京帝國大學助教授。明治四十三年歿、年四十一。

居る。天然顯象と我が生命と相融合するといふ事は無論個人によつて場合が違ふ。又同一人でも時と場合によつて差がある。だから天然顯象に單純な意味を附して、「かういふ感じしか無い。」など極めてしまふのは不用意である。

（金槐集私鈔）

一七　愛兒の死

西田幾多郎

三十七年の夏、東圃君が、家族を携へて歸鄉せられた時――君には光子といふ女兒があつた。愛らしい生々とした子であつたが、昨年の夏、君が小田原の寓居の中に、意外にもこの子を失はれたので、余は前年旅順に於て戰死せる弟の事など思ひ浮べて、力を盡くして君を慰めた。然るに何ぞ圖らん、今年の一月余は漸く六つばかりになりたる己が次女を死なせて、却つて君より慰められる身となるとは。

愛兒の死

西田幾多郎

文學史
國文學史講話。

今年の春は、十年餘も帝都を見たことのない余が、思ひがけなくも或用事の爲に東京に出るやうになつた。着くや否や東圖君の宅に投じた。君と余とは中學時代以來の親友である。殊に今度は同じ悲しみを抱きながら、久し振りに相見たのである。單にいつもの舊友に逢ふといふ心情のみではなかつた。然るに手紙では互に相慰め、慰められて居ながら、面と相向うては何の語も出ず、唯輕く弔辭を交換したまでであつた。逗留七日、積る話はそれからそれと盡きなかつたが、遂に一言も亡兒の事に及ばなかつた。唯余の出立の朝、君は篋底を探つて一束の草稿を持來り、亡兒の終焉記なればとて余に示された。かつ今度出版すべき文學史をば亡兒の記念としたいとのこと、及び余にも何か書添へてくれよといふことをも話された。

君と余と相逢うて亡兒の事を話さなかつたのは、互にその事を忘れて居たのではない、又堪へ難き悲哀を更に思ひ起して、苦悶を新にするに忍びなかつたのでもない。誠といふものは言語に表し得べきものでない。言語に表し得べきものはすべて淺薄である。虛僞である。至誠は相見て相言ふ能はざる所に存するのである。我等の相對して相言ふ能はざりし所に言語はおろか、涙にも現すことの出來ない深い同情の流が、心の底から底へと通うてゐたのである。

余も我が子を亡くした時に深い悲哀の念に堪へなかつた。特にこの悲しみが年と共に消えゆくかと思へばいかにもあさましく、せめて後の思出にもと、死んだ子の面影を書殘した。さうして直にこれを東圖君に送つて一言を求めた。當時直に余の心を知

つてくれる人は、君の外にないと思うたのである。然るに君は余よりも前に、同じ境遇に遭うて、同じ事を企てられたのである。余は別れに臨んで君の送られたその終焉記を行李の底に收めて歸つた。一夜眠られぬまゝに取出してこまかに讀んだ。讀終つて、人心の誠はかくまでも同じきものかとつくづく感じた。

回顧すれば余が十四歳の頃であつた。余は幼時最も親しかつた姉を失うたことがある。余はその時生來始めて死別のいかに悲しきかを知つた。余は亡姉を思ふ情に堪へず、また母の悲哀を見るに忍びず、人無き處に到つて思ふ儘に泣いた。稚心に若し余が姉に代つて死に得るものならばと、心から思うたことを今も記憶して居る。近くは三十七年の夏、悲慘なる旅順の戰に、唯一人の弟は敵壘深く屍を委して、遺骨をも收め得なかつた有樣。こゝに再び舊時の悲哀を繰返して、斷腸の思が未だ全く消失せないのに、

又己が愛兒の一人を失ふやうになつた。骨肉の情いづれ疎なるはないけれども、特に親子の情は格別である。余は此の度生來未だ曾て知らなかつた沈痛な經驗を得たのである。余はこの心より推して、一々君の心を讀むことが出來ると思ふ。

藤岡作太郎亡兒光子

君の亡くされたのは君の初子であつた。初子は親の愛を專にするのが世の常である。特に幼き女の子はたまらぬ位に可愛いとのことである。情濃やかなる君にしてこの子を失はれた時の感情はいかがであつたであらう。亡き我が兒の可愛いといふのは何の理由もない、唯わけもなく可愛いのである。甘いものは甘い、辛いものは辛いといふの外にない。「これまでに

して亡くしたのを惜しからう。」といつて悔んでくれる人もある。併しかういふ意味で惜しいといふのではない。「女の子でよかつた。」とか、「外に子供もあるから。」などいつて、慰めてくれる人もある。併し、かういふことで慰められやうもない。ドストエフスキーが愛兒を失つた時、「又出來るだらう。」といつて慰めた人があつた。氏はこれに答へて「どうして外の子供が愛されよう。私の欲しいのはソーニヤだ。」と言つたといふ事である。

ドストエフスキー
Dostoyevsky
ロシヤの小説家。（西暦一八二一―一八八一）

ドストエフスキー

親の愛は實に純粹である。その間一毫も利害得失の念を挾む餘地はない。ただ亡兒の俤を思ひ出づるにつけて、無限に懷しく可愛さうで、どうかして生きて居てくれゝばよかつたと思ふのみ

である。若きも老いたるも死ぬるは人生の常である。死んだのは我が子ばかりではないと思へば、理に於ては少しも悲しむべきところはない。しかし人生の常事であつても、悲しいことは悲しい。飢渴は人間の自然であつても、飢渴は飢渴である。人は死んだものはいかに言つても還らぬから、諦めよ、忘れよといふ。併しこれが親に取つては堪へ難き苦痛である。時はすべての傷を癒すといふのは自然の惠であつて、一方より見れば大切なことかも知らぬが、一方より見れば人間の不人情である。何とかして忘れたくない、何か記念を殘してやりたい、せめて我が一生だけは思ひ出してやりたいといふのが親の誠である。昔君と机を並べてアービングのスケッチブックを讀んだ時、他の心の疵や、苦しみは之を忘れ、之を治

アービング
米國の文學者。（西暦一七八三―一八五九）
Washington Irving

せんことを欲するが、獨り死別といふ心の疵は、人目をさけても之を溫め、之を抱かんことを欲すといふやうな語があつた。今まことにこの語が思ひ合はされるのである。折にふれ、物に感じて思ひ出すのが、せめてもの慰藉である。

死者に對しての心づくしである。この悲しみは苦痛といへば誠に苦痛であらう。併し親はこの苦痛の去ることを欲せぬのである。

「死にし子顏よかりき」「をんな子の爲には親幼くなりぬべし」など古人も言つたやうに、親の愛はまことに愚痴である。冷靜に外より見たならば、たわいない愚痴と思はれるであらう。しかし余は今度この人間の愚痴といふものの中に、人情の味はひのあることを悟つた。カントが言つた如く、物に

カント……死にし子　我が國の古諺。紀貫之の土佐日記に引けり。

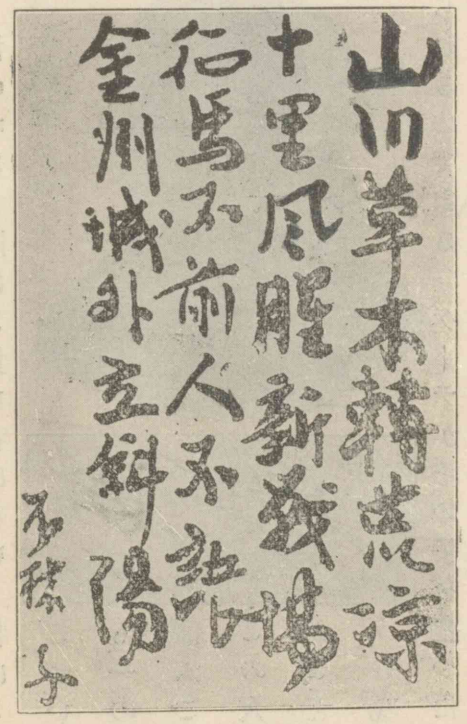
をんな子　土佐日記にある文句。

カント　Immanuel Kant　獨逸の哲學者。（西暦一七二四―二八〇四）

は皆値段がある、獨り人間は値段以上である、目的その物である。いかに貴重なる物でも、そは唯人間の手段として貴いのである。世の中に人間ほど貴い者はない。物はこれを償ふことが出來るが、いかにつまらぬ人間でも、一の靈魂は他の物を以ても償ふことは出來ぬ。而してこの人間の絶對的價値といふことが、己が子を失うたやうな場合に、最も痛切に感ぜられるのである。ゲーテがその子を喪つた時、死者以上と言つて仕事を續けたといふが、ゲーテにしてこの語をなした心の中には、固より仰ぐべき偉大なものがあつたでもあらう。しかし人間の仕事は人情といふことを離れて外に目的があるのではない、學問

ゲーテ　Goethe　獨逸の詩人、戲曲家、小說家。（西暦一七四九―一八三二）

も事業も究竟の目的は人情の爲にするのである。而して人情と言へば、たとへ小なりとはいへ、親が子を思ふより痛切なるものはなからう。徒らに高く構へて人情自然の美を忘れる者は、却つて



征馬不前
山川草木轉た荒涼、十里風腥し新戰場。征馬前まず人語らず、金州城外斜陽に立つ。
乃木將軍筆蹟

この性情の卑しきを示すに過ぎない。「征馬不前人不語、金州城外立斜陽」の一詩あつて愈、乃木將軍の人格が仰がれるのである。

とにかく余は今度我が子の果敢なき死といふことに因つて多大の教訓を得た。名利を思うて煩悶絶間なき心の上に、一杓の冷水を浴せかけられたは皆値段がある、獨り人間は値段以上である、目的その物である。

様な清く温き光が照らして、すべての人の上に純潔な愛を感ずることが出來た。特に深く我が心を動かしたのは、今まで愛らしく話したり、歌つたり、遊んだりしてゐた者が、忽ち消えて壺中の白骨となるといふ事實であつた。若し人生はこれまでのものであるといふならば、人生ほどつまらぬものはない。此處には深き意味がなくてはならぬ。人間の靈的生命はかくも無意義のものではない。死の問題を解決するといふのが人生の一大事である。死の事實の前には生は泡沫の如くである。死の問題を解決し得て、始めて眞に生の意義を悟ることが出來る。

物窮すれば轉ずる。親が子の死を悲しむといふやるせなき悲哀悔恨は、自ら人心を轉じて、何等かの慰安の途を求めしめるのである。夏草の上に置ける朝露よりも哀果敢なき一生を送つた我が子の身の上を思へば、いかにも斷腸の思がする。しかし翻つて

考へて見ると、子の死を悲しむ余も遠からずおなじ運命に服從せねばならぬ。悲しむものも悲しまれるものもおなじ青山の土塊と化して、ただ松風蟲鳴のあるあり。いづれを先いづれを後とも見分けがたいのが人生の常である。永久なる時の上から考へて見れば何だか滑稽にも見える。生れて何等の發展もなさず、何等の記憶も殘さず、死んだとて悲しんでくれる人だにないと思へばまことに哀である。しかしいかなる英雄も赤子も死に對しては何等の意味ももたない。神の前にはすべて同一の靈塊である。イタリヤの古畫に、死の神が老若男女あらゆる種類の人を捕へ來つて、帝王も乞食もみな一堆の上に積重ねてゐるのがある。榮辱得失もこゝに至つては一場の夢に過ぎない。又世の中の幸福といふ點より見ても、生延びたのが幸であつたらうか、死んだのが幸であつたらうか。生きてゐたならば幸であつたらうといふのは

聖母　フランス名畫

（一七　愛兒の死）

親の欲望である。運命の祕密は我々にはわからない。特に高潔なる精神的要求より離れて、單に幸福といふ事から考へて見たならば、すべて人生はさほど慕ふべきものかどうかも疑問である。

一方より見れば、生れて何等の人生の罪惡にも汚れず、何等の人世の悲哀をも知らず、唯日々嬉戯して、最後に父母の膝を枕として死んで行つたと思へば、非常に美しい感じがする。花束を散したやうな詩的な一生であつたとも思はれる。たとへ多くの人に記せられ、惜しまれずとも、懷しい親が心に刻める深き記念骨にも徹する痛切なる悲哀は、寂しい死をも慰め得て餘あるとも思ふ。

いかなる人も我が子の死といふことに對しては種々の迷を起さぬものはなからう。あれをしたらばよかつた、これをしたらばよかつたなど思うて返らぬ事ながら、徒らなる後悔の念に心を惱ますのである。併し何事も運命と諦めるより外はない。運命は

外から働くばかりでなく、内からも働く。我々の過失の背後には不可思議の力が支配してゐるやうである。後悔の念の起るのは自己の力を信じ過ぎるからである。我々はかゝる場合に於て、深く自己の無力なるを知り、己を棄てて絶大の力に歸依する時、後悔の念は轉じて懺悔の念となり、心は重荷を卸した如く、自ら救ひ、又死者に詫びることが出來る。歎異鈔に「念佛はまことに淨土に生るゝ種にてやはんべるらん、また地獄に墮つべき業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。」といへる尊き信念の面影をも窺ふを得て、無限の新生命に接することが出來る。（國文學史講話）

歎異鈔
親鸞の信仰錄。撰者は如信或は唯圓と稱せらる。

國文學史講話
序文、三頁―一二頁。明治四十一年三月、大阪開成館發行。

一八　落花の雪

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕られて、鎌倉迄下り給ひしかども、樣々に陳じ申されし趣げにもとて赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに、專ら陰謀の企彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に、又六波羅へ召捕られて、關東へ送られ給ふ。再犯赦さざるは法令の定むる所なれば、何と陳ずとも許されじ。路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をばはるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば

俊基
右中辨藤原俊基。後醍醐天皇の意を體し、日野資朝と北條氏討伐を圖り、事露れて捕へられ、辯疏して解くを得しが、後再び捕へられて斬らる。

七月十一日
元弘元年。（一九九一）

離れじと思ひ設けてぞ出でられける。

落花の雪に踏迷ふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦を着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明す程だにも、旅寢となれば物憂きに、恩愛の契淺からぬ、我が古里の妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住

交野の春
落花の雪
又や見ん交野の御の櫻狩花の雪散る春の曙（新古今集、藤原俊成）

交野
河内國。

紅葉の錦
朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦着ぬ人ぞなき（拾遺集、藤原公任）

關の清水
逢坂の關の清水にかげ見えて今やひくらん望月の駒（拾遺集、紀貫之）

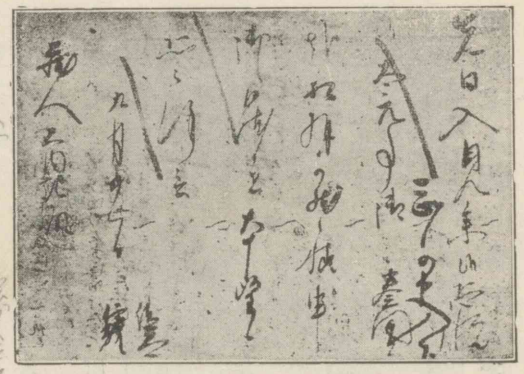
駒もとどろ
貢物たえずそなふる東路の勢多の長橋音もとどろに（風雅集、平兼盛）

うねの野
近江より朝立ち來ればうねの野にたづぞなくなる（拾遺集、紀貫之）

俊基朝臣筆蹟
るあけぬこの夜は（古今集、讀人知らず）

時雨も
白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らず色づきにけり（古今集、紀貫之）

不破の關屋
人住まぬ不破の關屋の板廂荒れにし後はただ秋の風（新古今集、藤原良經）



剛れし、九重の帝都をば、今を限と顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞ哀なる。憂きをば止めぬ逢坂の、關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱、沖をはるかに見わたせば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の浮沈み、駒もとどろと踏鳴らす、勢多の長橋打渡り、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかと哀なり。時雨もいたくもり山の、木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見え分かず。物を思へば夜のまにも、老蘇の森の下草に、駒を駐めて顧みる、故郷を雲や隔つらん。

番場・醒が井・柏原・不破の關屋は荒果てて、なほ漏るものは秋の雨、

なるみ潟
千鳥聲こそ近くなるみ潟傾く月に汐やみつらん（新古今集、藤原秀能）

元暦元年（一八四四年）

重衡
平清盛の子。壽永四年（一八四五）斬らる。年二十九。

西行法師
第七課參照。

命なりけり
年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山（新古今集）

いつか我が身のをはりなる、熱田の八劔伏拜み、潮干に今やなるみ潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくとほたふみ、濱名の橋の夕汐に、引く人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にしあれば、誰か哀と夕暮の、晩鐘鳴れば今はとて、池田の宿に着き給ふ。

元暦元年の頃かとよ、重衡中將の東夷のために囚はれて、この宿に着き給ひしに、「東路の埴生の小屋のいぶせきに故郷いかに戀しかるらん」と、宿の主人が詠みたりし、その古への哀までも、思ひ殘さぬ涙なり。

旅館の燈かすかにして鷄鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍川を打渡り、小夜の中山越行けば、白雲道を埋み來て、其處とも知らぬ夕暮に、家鄕の天を望みても昔西行法師が「命なりけり。」と詠じつつ、再び越えし跡までも、羨しくぞ思はれける。

隙行く駒の足早み、日既に亭午に上れば、乾飯進らする程とて輿

承久の合戰　承久三年（一八八一）後鳥羽上皇、北條氏を滅さんとし給ひ、事露はれし時の戰。

宗　行　中御門中納言藤原宗行。承久三年（一八八一）歿、年四十八。

南陽縣菊水　南陽郡縣に甘谷あり。谷中の水甘美にして上に大菊あり。水に落ち山に從ひ流れ下る。其の滋液を得、谷中の人家此の水を飲む。上壽は百二三十、其の中は百餘歳、七八十なるは夭と爲す。（風俗通）

龜山殿　山城國葛野郡嵯峨なる龜山離宮、今の天龍寺。

を庭前に昇止む。轅を敲きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし咎によりて、宗行卿關東へ召下されしが、この宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水、汲下流而延齡。
今東海道菊川、宿西岸而終命。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、哀やいとどまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしをきく川の
おなじ流に身をやしづめん

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花盛、龍頭鷁首の舟に乘り、詩歌・管絃の宴に侍りしことも、今は再び見ぬ夜の夢となりぬと思ひ續け給ふ。島田・藤枝にかゝり

岡べの眞葛　歸り來るほどはなけれど朝露の岡部の眞葛うら枯れにけり（藤原爲家）

宗行卿菊川の宿にやどる圖（東海道名所圖會所載）

夢にも人に
駿河なるうつの山べのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり（伊勢物語）

清見潟

清見潟浦風寒き夜なゝゝは夢もゆるさぬ浪の關守（新後撰集、院大納言典侍）

て、岡べの眞葛うら枯れて、物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越行けば、蔦かへでいと繁りて道もなし。昔業平の中將の、すみかを求むとて、東の方へ下るとて、「夢にも人に逢はぬなりけり」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。

清見潟を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守にいとゞ涙を催され、向ひはいづこ三保が崎、興津・蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中

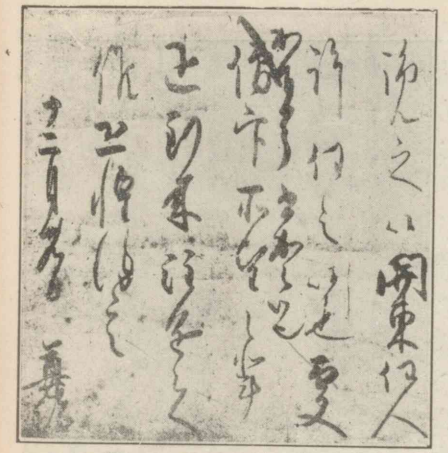
より立つ煙、上なき思に較べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を、過行けば、汐干や淺き舟浮きて、下り立つ田子のみづからも、憂世をめぐる車返し、竹の下道行惱む、足柄山の峠より、大磯・小磯見下して、袖にも波はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれども、日數積れば七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着き給ひけれ。

（太平記）

上なき思。
富士の嶺の煙はなほぞ立ちのぼる上なきものは思なりけり（新古今集、藤原家隆）

こゆるぎ
こよろぎのいそたちならし磯菜つむめざしぬらすな沖に居れ波（古今集）

太平記
四十卷。花園天皇の文保二年より後村上天皇の正平二十二年まで約五十年間の戰亂を記述せしもの。



附　南風遺響

身にかへて思ふとだにも知らせばや
民の心の治め難さを

後醍醐天皇

みやこだに淋しかりしを雲はれぬ
吉野のおくの五月雨のころ

後村上天皇

曇らじと思ふ心よおなじくは
はや日のもとの光ともなれ

後醍醐天皇
第九十六代、御名は尊治、延元四年（一九九九）崩御、寶算五十二。

後村上天皇
第九十七代御名は義良。正平二十三年（二〇二八）崩御、寶算四十一。

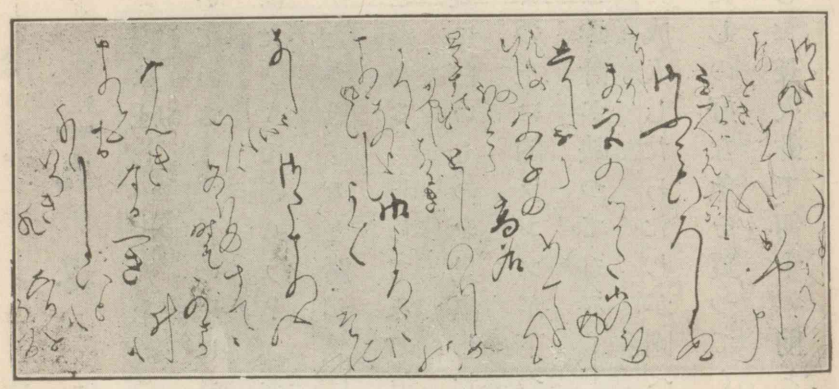
尊良親王
後醍醐天皇第一皇子。延元二年（一九九七）戰死し給ふ。

後村上天皇宸筆

宗良親王
後醍醐天皇の皇子。出家して尊澄と號し給ふ。

後村上天皇宸筆

新葉集
二十卷。宗良親王の撰。



たかみくらとばりかゝげて橿原の
宮のむかしもしるき春かな

尊良親王

住みなれぬいたやの軒のひまもりて
霜夜の月の影ぞさむけき

めぐりあひておなじ雲井に眺めばや
あかでわかれし九重の月

宗良親王

憂きほどはさのみ汨のあらばこそ
わが袖ぬらせよそのむら雨

道しらぬは山しげ山さはるとも
なほあらましの末はとほさむ

（新葉集）

室生犀星
名は照道。明治二十三年金澤市に生る。詩人。

一九　母

室生犀星

母は乏しい炭火をおこしながら、その炭火とすれ〳〵に火を吹いてゐる。――竹の串にさゝれたのは鰤のきり身かあぶらの多いはた〳〵であらう？　火に焦げながらおいしい香をさせてゐるが、ときとすると膏が焦げるので煙つてよく母の顔が見えないことがある。　そしてその魚の燒けるのを待つてゐる目さきに、母の髪に白いものを見出したのは何時頃だつたらうか？　私のあたまの上に釣ランプが下つてゐる。　その玻璃の油壺に六角の古型な時計が映つてゐる――。

成人したわたしが國へ行くと、母は市場へ行つて母親らしくわたしの好な魚を買つてくるのである。　そして何十年もつかひ古した長火鉢で、何十年前と同じいやうに、とぼしい火を吹いて魚を

炙いてくれるのである。　が、母の髪はその黑いのがかぞへられなくなつて、白い束になつてゐる。――長火鉢の灰も固まつたばかりでなく、その黑柿のへりには夥しく窪んだ烟管のあとが殘つてゐた。

「お前ははた〳〵が好だと思つてね。」

が、そのはた〳〵は何時の間にかわたしの口に適はなくなつてゐたといふよりも、そのぞんざいな燒方がこの雪國の香味ある魚の味をころしてゐた。　しかしわたしに母がかうして燒いてくれるこゝろもちは、はた〳〵にも增して心うれしく甘

い氣もちがした。

「魚といふものは年々人間が捕るので數少くなるせいか、ことしはあまり賣りに來ぬよ。」

母は箸をとりながら膳の向ひに坐つて、子供の時と異なつた性質になつてゐる我が子に、何となく氣の引ける物言ひをしてゐた。何を言つても心から喜びさうもない、孰らかといへば氣難しい子息をさし覗くやうにするのである。

「魚もさういへば、だんだんすくなくなるかも知れませんね。」

母は食事の中途に立つて、好ならもつと燒いてあげようかと言つた。子息のためなら、氷つた勝手へ行つて手を濡らせることを少しも厭うてゐないらしい――わたしは頭を振つて見せた。

間もなく釣洋燈が點されるのである。

（高麗の花）

高麗の花　一八七頁―一九〇頁。大正十三年九月、新潮社發行。

賴山陽　名は襄、通稱久太郎、安藝國の人。賴春水の子。天保三年（一二四九二）歿、年五十三。

母　賴春水夫人、名は梅颯。

賴山陽像

辰藏　山陽の二男、文政八年歿、六歳。

三穂　山陽の妹、文政九年歿、年三十八。

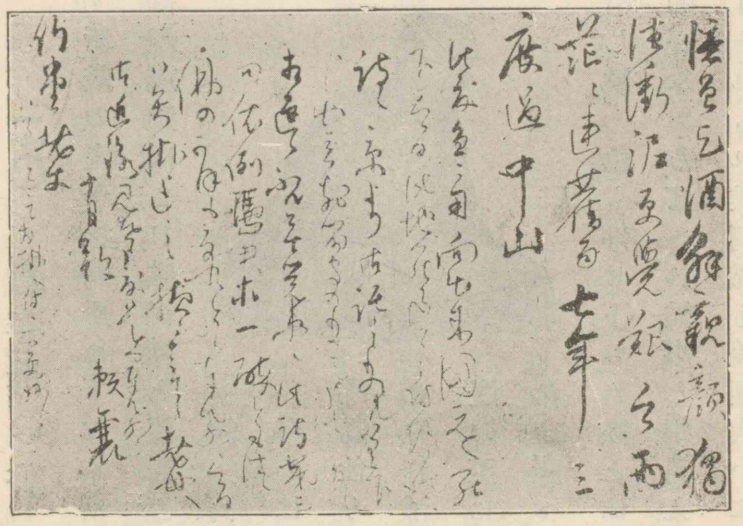
二〇　新春母の許へ

賴山陽

新歳の慶千里同風、めでたく申納め候。先づ以て益、御機嫌よく御超歳遊ばされ候御儀と遙想、恭祝仕り候。私方長幼無異加齢仕り候。萬々御安意遊ばされ下さるべく候。

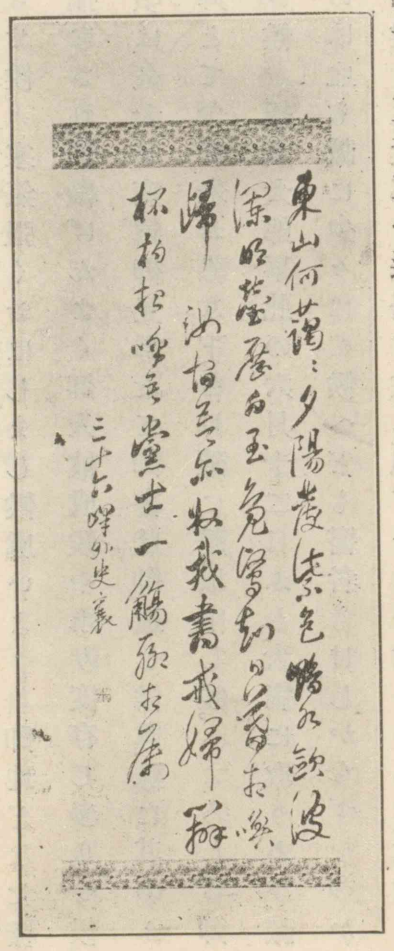
冬年は尊書久々にて相達し、ありがたく拜誦仕り候。その節寒氣の御障りもあらせられず、御氣丈御世話あそばされ候旨、恐慶の至に存じ候。その節は思召しよせられ、辰藏へ春服御贈りくだされ、頂戴致させ申し候。色も仰せ下され候とは違ひ、甚だ似合ひ申し候。模樣も御好みあそばされ候事と相見え、大いに男らしく御座候。三穂よりくれられ候羽織も、縞柄大いに辰藏に似合ひ申し候。

山陽の書簡



當春は昨年とはちがひ、元日・二日など大いに寒きこと、雪も降り申し候。三日はすこぶる長閑に御座候ゆゑ、昨年祇園へ參り候こと存じ出で、小池八幡宮へ、私・門人兩人、かはるがはる抱き候うて、參詣致させ申し候。その節、かの拜領の綿入に、三穗よりもらひ候羽織着せ、連れまゐり申し候。おば樣にもらうたのぢやと、たびたび申し聞かせ候ゆゑ、おばおばと申すことおぼえ言ひ申し候。よく歩き申し候。少しの間も目放しなり申さず候。さても子を持つ

て親の恩を知るとは、よく申し候ものと存じ候ことに御座候。この度例年の如く、鏡餅一重、砂糖一曲差上げ申し候。めでたく御祝ひ遊ばされ下さるべく候。舊臘あげ申し候三輪酒は、相屆き申し候や。三千三へ遣したしと申す一品、御慰みにも相成るべく



と、畫本四册上げ申し候。御覽後、南の子供に遣はされ下さるべく候。梨影より何かと中上ぐべく候これを略し候。猶永春の時を期し候。頓首

（有朋堂文庫）

三千三　山陽の甥、字は君擧、達堂と號す。

山陽筆蹟

梨影　山陽の夫人、安政二年歿、年五十九。

有朋堂文庫　新撰書翰集「頼山陽より母へ」三五三頁―三五五頁、大正十年十一月、有朋堂發行。

賴山陽妻　小石氏、名は梨影。山陽卅六歳の時十九歳にて嫁す。此の手紙は山陽歿後下の關の人廣江吉郎夫婦へ宛てたるもの。

久太郎　山陽の通稱、名は襄、字は子成といふ。

二　夫の訃を報ずる文

賴山陽妻

一筆申上げ參らせ候。先々其の後は打絶え〳〵御不禮に打過ぎ參らせ候。寒氣强くおはしまし候處いよ〳〵御地どなた樣にも御揃なされ、御機げんよく御入被成候や承り度存じ參らせ候。扨先頃は久太郎病氣御見舞とて御書狀御遣し候處、殊に其のふし御見舞とて金壹朱おくり下され、確に受取申し候。よろしく御禮申上げ候。扨久太郎事此の六月十二日ふと大病に取りあひ、誠にはじめは血も誠に少々にて候へども醫者もけしからずむつかしく申し候。久太郎も覺悟を致し、私どもにも常々申して、遺言も其の節より申しおかれたるやうな事に候。しかし何分と申し、藥をすゝめ、先々天道次第と自身も申し居られ候。六月十三日より、かねて一兩年心がけの著述ども、いまだ草稿のまゝにて、それを塾中

關五郎　山陽門人。

日本政記　神武天皇より後陽成天皇に至る間の漢文の歴史。

の關五郎一人に任せ候うて書かせ、又自身直し候うて寫させなど致し候。日本政記と申す物に候。其の間に詩文又題跋みな〳〵版になり候樣に、さつぱりとしらべ申し候。右政記も九月二十三日には跋文迄出來上り候。二十三日夕七つ前迄、五郎子かゝり寫し候。それを又見申し候うて安心いたし、半時たゝぬ內に伏し申され候處私胸をさすり居り候、うしろにゐるは五郎かと申し、もはやそれきりにて候。暮六つ時に候。誠に〳〵たしかなる事にてとんと苦痛はなく候へども、だんだんとの弱りに御座候。氣分は初より確にて、食事もおいしく候故、私ども大病とは存じ候へども、此方主人事、人なみの人とは違ひ候故、滅多な事はあるまじと存じ候。しかしながら、廿三日八つ頃に何かとあと〳〵の所もよくよくし、此方亡くなり候うても、何も〳〵かはり候事はなく、とんと此の儘にて、此所は地所借り、家は此方のもの故、ほそぼそに取りつき、

二人の子ども京にて賴家二軒立てさせ、それを樂しみにいたすべしと申し、又二郎・三木三郎内に置き候へば役に立たずになり候故、飯料出し候うても外へ遣し候やうに申し置き候。子ども學問いたし候間は、私は陽と申し候三才の娘育て候うて、老女つかひ候うて、三本木にほそぼそと取りつづき申し候。此方はかねて三本木にて暮し候へども、子供らの代になり候へば町にて家借り、町へ參り候うて店出し候やう申し置き候。誠に〳〵殘りおほき事も限なく、日々と何かと思ひ出し、せめてと存じ、誠に大切に百個日まで中陰中同樣につとめ申し候。日々好物の品供へ申し候。猶更此の節は主人好な水仙の花ども咲き、一入思ひ出し候うて、幾度か幾度か悲しみ候。子供ら頑是なく候故、猶更私は胸迫り候。此の上はどうぞどうぞ二人の子どもよき人になり候うて、かなりのあとになり候やうと、誠に是のみ祈り居り候。なんでも私が氣を張り

又二郎　復二郎とも書く。字は士剛、支峰と號す。
三木三郎　三樹三郎とも書く。字は子春、鴨厓と號す。
三本木　京都丸太町東三本木。山紫水明處と稱して山陽の住したる處。

候うて、五十日の間は墓參二人づれにて喪服にて參り候。まづまづ主人事いた〳〵しきこと限なく、あとの所かなりに致し置きくれられ候故、此のまゝにしてしまつ致せば、暮し候事出來申し候故、誠に〳〵有りがたく、もつたいなき事と子どもらに申しきかせ候。つねづね心がけよろしく候故と存じ候。有りがたき事にて、此の義は御安心可被下候。國元に餘一と申し候主人一番子にて、是も一昨年より江戸詰にて來春は上京にて、是も子どもらの現在の兄にて、一向人柄よろしく候。猶更安心にて、書狀參り私を大事に申し參り候間力强く存じ候。國元母も力落しに候へどもまだまだあきらめよろしく候故私にたしかに申し參り安心致し候。來春餘一が下り候節、子ども一人は國元にて世話いたし度と申し參り候。私が三人は誠にたいぎにて、國元にて一人世話になり候へば、大いにたやすく候。何分來春餘一見えられ候事主人と存じ待入

國元　安藝廣島。
餘一　賴元協。通稱、承緒、聿菴と號す。山陽の長子。
國元母　山陽母名は梅颸。

り候。誠に誠に此の節も遠方へ行かれ留守中と存じ候うて、日々つとめ申し候。此の頃胸ふさがり遣瀬なき内にも主人が亡くなり候ひて後、生前恩になり候人ども、大いに料見が變り、云ふに云はれぬいろ〳〵の心配、嘆の中にて致し居り候。誠に先頃は御悔み御狀、殊に金壹朱おくり下され忝く早速に神主へ供へ申し候。此の度印を印譜に致し候うて、一本宛くばり申し候。御覽可被下候。何かと私心御察し可被下候。私も十九年が間側に居り候。誠にふつゝか、無調法に候へども、あとの所遺言、何も〳〵私に致し置きくれられ、私におきまして誠に〳〵有りがたく、十九年の間に候へども、あの位な人を夫に持ち、その所存なか〳〵出來ぬ事と有りがたく存じ候。此の上に子どもらの所よき人に育て度く、是のみ樂しみ存じ候。誠に儉約いたし暮しまゐらせ候。久太郎供物と國元母と二人は大事に仕へ、珍しき物進じ申し候。是には惜しまれ

申さずと存じ候。誠にかやうに致しおきくれられ涙流し候。まづまづ其の内に三歳女子、むづかしき疱瘡よほど危き事に、やうやうととりとめ申し候。かやうのことにて、御返事もいたし申さず候。御ついでに長崎水野へちよと御知らせ可被下候。

早々かしこ

閏月廿五日　　賴又二郎母より

廣江吉郎樣
御をもじ樣

（隨筆賴山陽）

二二　赤壁の賦

蘇東坡

壬戌の秋、七月既望、蘇子、客と舟を泛べて赤壁の下に遊ぶ。清風徐ろに來つて水波興らず。酒を擧げて客に屬し、明月の詩を誦し、

隨筆賴山陽　市島春城著。二九頁―四四頁。大正十四年六月、早稲田大學出版部發行。

蘇東坡　名は軾。宋時代の詩人文章家。年六十六にて卒す。

赤壁　湖北省に在る山。黄州府城外の景勝。

窈窕の章を歌ふ。

少焉あつて、月東山の上に出で、斗牛の間に徘徊す。白露江に横たはりて水光天に接す。一葦の如く所を縱にして、萬頃の茫然たるを凌ぐ。浩々乎として、虛に馮り風に御してその止まる所を知らざるが如く、飄々乎として世を遺れて獨り立ち羽化して登仙するが如し。

是に於て、酒を飲んで樂しむこと甚だし。舷を扣いて之を歌ふ。歌に曰く、「桂の棹蘭の槳、空明を擊つて流光に泝る。渺々として予が懷、美人を天の一方に望む。」と。客に洞簫を吹く者あり。歌に倚つて之に和す。その聲嗚々然として、怨むが如く、慕ふが如く、泣くが如く、訴ふるが如く、餘音嫋

江上之清風与山間之明月耳得之而為聲目遇之而成色取之無禁用之不竭是造物者之無盡藏也而吾与子之所共食客喜

蘇東坡筆蹟

嫋として絶えざること縷の如し。幽壑の潛蛟を舞はせ、孤舟の嫠婦を泣かしむ。

蘇子愀然として、襟を正し危坐して客に問うて曰く、「何すれぞそれ然るや。」と、客曰く、『月明らかに星稀にして、烏鵲南に飛ぶ。』とは、これ曹孟德の詩にあらずや。西、夏口を望み、東武昌を望めば、山川相繆うて鬱乎として蒼々たり。これ孟德が周郎に困しめられしものにあらずや。その荊州を破り江陵を下り、流に順うて東するに方つてや、舳艫千里、旌旗空を蔽ふ。酒を釃みて江に臨み、槊を横たへて詩を賦す。固に一世の雄なり。而るに今安にか在る。況や、吾と子と、江渚の上に漁樵し、魚鰕を侶

曹孟德　姓は曹、名は操。孟德は字。支那三國時代の魏主。

蘇夏口　軾　湖北省漢口の別稱。

武昌　湖北省東部の都會。漢口と相對す。

周郎　周瑜のこと支那三國時代吳の名將。

荊州・江陵　今の湖北省に屬す。現時は荊州は府、江陵は同府下の縣名。

赤壁の圖

とし、麋鹿を友とし、一葉の扁舟に駕して、匏樽を擧げて以て相屬し、蜉蝣を天地に寄す。渺たる滄海の一粟なり。わが生の須臾なるを哀しみ、長江の窮まり無きを羨む。飛仙を挾んで以て遨遊し、明月を抱いて長へに終らんこと、驟かに得べからざるを知り、遺響を悲風に託す。」と。

蘇子曰く、「客も亦夫の水と月とを知るか。逝くものはかくの如くにして、而も未だ嘗て往かざるなり。盈虛するものは彼が如くにして、而も卒に消長することなきなり。蓋し、將その變ずる者よりして之を觀れば、則ち天地も曾て以て一瞬なること能はず。その變ぜざる者よりして之を觀れば、物と我と、皆盡くることなきな

文章軌範
宋の謝枋得撰。支那の漢・晉・唐・宋の名文六十九篇を集む。

諸葛孔明
名は亮。支那三國時代の人。昭烈帝に仕へ丞相と爲り、武鄉侯に封ぜられ、年五十四にて卒す。

益州
今の四川省方面の地。

り。而るを又何ぞ羨まんや。且それ天地の間、物各主あり。苟も吾の有する所に非ずんば、一毫と雖も取ること莫けん。惟江上の清風と、山間の明月とは、耳之を得て聲を爲し、目之に遇うて色を成す。之を取つて禁ずるなく、之を用ひて竭きず。これ造物者の無盡藏なり。而して吾と子との共に適とする所なり。」と。

客喜んで笑ひ、盞を洗うて更に酌む。肴核既に盡き、杯盤狼藉たり。相與に舟中に枕藉して、東方の既に白みたるを知らず。

（文章軌範による。原文漢文）

二三　出師の表

諸葛孔明

臣亮言す。先帝創業未だ半ばならずして、中道にて崩殂したまへり。今天下三分して、益州疲弊せり。これ誠に危急存亡の秋なり。然れども、侍衞の臣内に懈らず、忠志の士身を外に忘るゝもの

先帝
蜀主劉備。

孔明の像

は、蓋し、先帝の殊遇を追うて之を陛下に報い奉らんと欲すればなり。誠に宜しく聖聽を開張し以て先帝の遺德を光かし、志士の氣を恢弘したまふべし。宜しく、妄りに自ら菲薄にして、喩を引き義を失ひ、以て忠諫の路を塞ぎたまふべからざるなり。

宮中・府中は倶に一體たり。臧否を陟罰するに、宜しく異同あるべからず。若し奸を作し科を犯し、及び忠善を爲す者あらば、宜しく有司に付してその刑賞を論ぜしめ、以て陛下平明の治を昭らかにしたまふべし。宜しく偏私して內外法を異にせしむべからざるなり。

侍中・侍郎の郭攸之・費禕・董允等は、これ皆良實にして、志慮忠純なり。是を以て先帝簡拔して以て陛下に遺したまへり。愚以爲へらく、宮中の事は事大小となく、悉く以て之に咨り、然る後施行したまはば、必ず能く闕漏を裨補して廣く益する所有らん。

將軍向寵は、性行淑均にして軍事に曉暢し、昔日に試用せられ、先帝これを稱して能ありと曰へり。是を以て、衆議、寵を擧げて督となしぬ。愚以爲へらく、營中の事は事大小となく、悉く以て之に諮りたまはば、必ず能く行陣をして和穆せしめ、優劣所を得しめん。

賢臣を親しみ小人を遠ざけしは、これ先漢の興隆せし所以なり。小人を親しみ賢臣を遠ざけしは、これ後漢の傾頽せし所以なり。先帝在しし時、毎に臣とこの事を論じて、未だ嘗て桓靈に嘆息痛恨したまはずんばあらざりしなり。侍中尚書・長史參軍、これ悉く貞亮にして節に死するの臣なり。願はくは陛下之を親しみ之を信じたまへ。則ち漢室の隆んならんこと日を計へて待つべきなり。

臣もと布衣。躬ら南陽に耕して、苟も性命を亂世に全うし、聞達

を諸侯に求めざりき。先帝臣が卑鄙なるを以てせず、猥りに自ら枉屈して、三たび臣を草廬の中に顧み、臣に諮るに當世の事を以てしたまへり。是に由つて感激して、遂に先帝に許すに驅馳を以てし奉りぬ。後傾覆に値ひ、任を敗軍の際に受け、命を危難の間に奉じき。爾來二十有一年なり。先帝、臣が謹愼なるを知しめせり、故に崩ずるに臨んで臣に寄するに大事を以てしたまひき。

命を受けしより以來、夙夜に憂慮して、付託の效あらずして以て先帝の明を傷つけんことを恐れたり。故に、五月瀘を渡り、深く不毛に入りぬ。今、南方已に定まり、甲兵已に足る。當に三軍を奬帥して北の方中原を定むべし。庶くは、駑鈍を竭くし、奸凶を攘除し、漢室を興復して舊都に還さんことを。これ臣が、先帝に報じて陛下に忠なる所以の職分なり。損益を斟酌し進んで忠言を盡くすに至りては、則ち攸之・禕・允の任なり。

願はくは陛下、臣に託するに討賊興復の效を以てせられ、效あらずんば則ち臣が罪を治め以て先帝の靈に告げさせたまへ。若し、德を興すの言なくんば、則ち攸之・禕・允等の咎を責め、以てその慢を彰したまへ。陛下も亦、宜しく自ら謀りて以て善道を諮諏し、雅言を察納して、深く先帝の遺詔を追ひたまふべし。

臣、恩を受けて感激に勝へず。今遠く離るゝに當り、表に臨みて、涕泣して云はん所を知らず。

（文章軌範による。原文漢文）

文章軌範　前課參照。

土井晩翠　明治四年仙臺市に生る。東京帝國大學英文科出身、詩人。

祁山　甘肅省に在り。魏の根據地、諸葛亮の屢攻めたる所。

五丈原

二四　星落秋風五丈原

土井晩翠

祁山悲秋の風更けて
陣雲暗し五丈原、
零露の文は繁くして
草枯れ馬は肥ゆれども、
蜀軍の旗光無く
鼓角の音も今しづか。
丞相病あつかりき。

陝西省に在り。魏を伐つ爲に亮の根據地とした る所。

蜀軍　蜀漢の軍勢。この時既に劉備死し、後主を奉じて亮は猶魏と戰爭中。

丞相　諸葛亮の事。蜀漢の先主劉備（昭烈皇帝）亮を丞相と爲す。三回目に自ら軍を率ゐて渭水の南に於て魏軍と對峙中病篤く遂に軍中に卒す。年五十四。

清渭　清き渭水。渭水は甘肅・陝西兩省に通ずる大河。

いまはのみこと　昭烈終に臨み、亮に謂つて曰く、君は才曹丞に十倍す。必ず能く國家を安んじ、終に大事を定めん。嗣子輔くべくんば之を輔けよ。若し不可ならば君自ら取るべしと。亮涕泣して曰く、臣以て股肱の力を竭し、忠貞の節を效し、之に繼ぐに死を以てせざらんやと。（十八史略）

清渭の流水やせて
夜は關山の風泣いて
令風霜の威もすごく
帳中眠かすかにて
こゝにも見ゆる秋の色、
見よや侍衛の面かげに
風塵遠し三尺の
秋に傷めば松柏の
漢騎十萬今さらに
夢寐に忘れぬ君王の
むせぶ非情の秋の聲、
暗に迷ふかかりがねは
守る諸營の垣の外。
短檠光薄ければ
銀甲堅くよろへども
無限の愁溢るゝを。
劒は光曇らねど、
色もおのづとうつろふを
見るや故郷の夢いかに。
いまはのみこと畏みて

丞相病あつかりき。
丞相病あつかりき。
丞相病あつかりき。

心を焦がし身をつくす
今落葉の雨の音
漢室の運はたいかに。
四海の波瀾收まらで
いつかは見なん太平の
群雄立つてことごとく
たれか王者の師を學ぶ。
あゝ五丈原秋の夜半、
銀漢清く星高く、
天地微かに光るとき、
「無限の淵」に立てる見よ。
暴露のつとめ幾とせか。
大樹ひとたび倒れなば、
民は苦しみ天は泣き
心のどけき春の夢。
中原鹿を爭ふも
あらしは叫び露は泣き、
神祕の色につゝまれて、
無量の思齋して
功名いづれ夢のあと、

消えざるものはただ誠、
成否を天に委ねては
高き尊きたぐひなき
千仞翔る鳳の影、
四海に出でて龍と飛ぶ、
名はかんばしき諸葛亮。

心を盡くし身を致し、
魂遠く離れゆく
「非運」を君よ天に謝せ。
草廬にありて龍と臥し
千載の末今も尙、

（現代日本文學全集）

鳳の影　備士を司馬徽に訪ふ。徽曰く、時務を識る者は俊傑に在り。此の間自ら伏龍鳳雛あり、諸葛孔明・龐士元なり。徐庶亦備に謂つて曰く、諸葛孔明は臥龍なりと。（十八史略）

現代日本文學全集　「現代日本詩集」一三七頁―一四三頁。昭和四年四月、改造社發行。

坪内逍遙　名は雄藏。安政六年（一八五九）愛知縣に生る。文學者、劇作家、文學博士、早稲田大學名譽教授。

二五　長柄堤の訣別

坪内逍遙

晨雞再び鳴いて殘月薄く、征馬連りに嘶いて行人出づ。はやく、横雲や、殘んの星を一つづつ、鐘が消しゆくいなのめの、長柄堤に秋たけて、一むら蘆に風黑く、ありあけすごき大川水、行きて歸らぬ涙の音、狹霧にむせび白けゆく、千草が蔭の蟲の聲、哀

はいとどまさるらん。片桐市正且元は、居城茨木へ立退かんと、從ふ郎黨一百餘人、深更に邸を立つて、大阪城をあとになし、列を正してしづしづと長柄堤にさしかゝる。

後には何か一思案、寂然として駒たつる、長柄堤の有明がた、塒に囀る小鳥の聲、川霧やう〳〵晴れゆけば、遠樹模糊として幹を分ち、ほの見え渡る賤が屋に、一筋のぼる朝煙、くだかけの聲勇ましく、生氣溢るゝ東の、空には似ぬや、入るかたの、月すさまじき柳蔭、枯葉枝まばらにして風飄々、見る目も昏し遠方に、おぼろおぼろとあらはるゝ、名におほ阪の四衢・八街、悄然として寂しげに、一棟高く聳えしは、

市「おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後迄もと、築かせられし大阪城、故殿下かくれさせ給ひて後、ま

長柄川の堤。長柄川は中津川とも云ひ、淀川の一支流なり。

片桐且元　秀吉の臣。攝津茨木二萬五千石を領す。元和元年（一六一五）歿、年六十。

南山不落　南山の壽の如く、蹇けず、崩れず。（詩經）

故殿下　豐臣秀吉。

だ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離ればなれ、取分け加藤肥州逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者才略乏しく、阿附黨同して相鬩げば、太政所の御方さへ、當家を餘所に見そなはし、浮世はなれし御ありさま、唇齒已に亡ぶ。今にもあれ、事起らば、金城・湯池もその甲斐なく、いひかけて聲くもらせ、市「須彌より重き御遺命、夢いさゝかも忘れざれど、御運の末か情なや。この旦元がすること爲すこと、いすかの嘴とくひちがひ、兩家を繫ぐ絆にもと、迎へ奉りし千姫君は、東西不和の導火となり、毘盧舍那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか。お家とこしなへに康かれと、祝ひし文字が元となり、降つて沸いたる難題は、只前門の虎にして、後へに不慮の豺狼あり。かゝる仕宜となつたること、御運の末といひながら、

加藤肥州　清正。

大政所　秀吉の室。

千姫君　德川秀忠の長女、慶長八年七月、豐臣秀頼に嫁す。

難題　京都大佛殿の鐘の銘に「國家安康」の文字あり、家康これによつて難題を起せるを言ふ。

こらへず馬より飛下り、かなたに向ひ平伏なし市「これしかしながら不肖旦元、愚昧にして先見無く、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の罠にかゝり、仰せつけられし御遺命に背き奉るけふの仕合はせ。不忠とも言ふ甲斐なしとも思召さん。それを思へば、旦元が、この腸はちぎるゝばかり。償ひがたき不臣の罪は、あの世で御わび仕らん。お許しなされて下さりませ。

大阪陣の圖

在すが如く兩手をつき、人目なければ稍しばし、不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心づき、

市「あゝ我ながら不覺の至。わが大罪の御わびよりも、さしかゝるお家の安危、長門守には如何にせし。心元なきことどもぢやなあ。

すかし眺むる折こそあれ。遙かに聞ゆる蹄の音。程もあらせず只一騎、殘霧つんざき一散に、汗馬に宙を走り來る、木村長門守重成、

木「市正殿に候な。

市「長門殿、待ちかねしぞ。

片桐且元像

朝承り大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、

云ふ間に駈寄るくつわづら、右手におりたち顔見合はせ、言葉はなくてそぞろにも、まづ袖ぬるゝ朝露や、風飄々たる枯柳の枝、入りかたの月がゆらめきて、老いゆく秋の寂しさを、長柄堤にとどむらん。

木「もはや豐臣の御社稷も、愈〻末となつたるか。棟梁と頼む足下まで、佞人讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。某圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮のそのあひだに、想ひがけぬ珍變あり。續いて足下に御討手と昨

（劇）長柄堤訣別

御母公　秀頼の生母淀君。

織田入道殿日ごろに似氣なく、激論の末、席を蹴立て、只今退座ありしとばかり。後は亂脈無法の評定。御母公の威を笠に被る大野・渡邊等が我意暴慢。この上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かつ切らんと、二度まで刀の柄に手は掛けしが、貴殿が日ごろの教訓を思ひ出して、無念を忍び、寃と知つて忠臣を救ひ得さりしいふ甲斐なさ。

織田入道殿　織田信雄常良入道。信長の次子。
大野　大野治長。
渡邊　渡邊尙。

秀吉筆蹟

悔むを且元押宥め、市「いしくも堪忍せられしぞや。かねても屢申せし如く、お家の大仇は彼等にあらず。鼠輩の爲に命を落すは大忠臣の所爲にあらじ。某とてもこの度の一條、遺恨骨髓に徹すと雖も、今更繰返すは愚癡の至。大切なるはお家の後事。それがし退去のこと關東に聞えなば、破綻生ぜん事必定なるに、きのふまでは去就を定めざりし織田殿已に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた。大亂破裂せんは目前なり。この上は只ひとへに籠城の計畫こそ肝要なれ。

木村重成

木「して、籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。

市「されば、今御城に兵糧・金銀は乏しからず。まつた猛卒・勇士にも事かゝねど、得難きは智謀の將なり。それがしこれを慮り、萬一の

九度山
紀伊國高野山の北谷。

備をなし置きたり。

木「してその智謀の將とは、

市「今九度山にかくれ忍ぶ信州上田前の城主眞田安房守が二男左衞門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師。關が原の一戰以來、關東の跋扈を怒り、蟄して世の態を窺ひ居るを、先年お身方となし置いたり。事起らば、上使を以て急ぎ彼を招かるべし。合戰の進退は、一切彼の人に任せられよ。その他關が原の一亂以來、浪々なせし長曾我部盛親、まつた黑田家の浪人後藤又兵衞基次、いづれも得易からぬ良將なるが、かねてちなみはつけ置きたり。御使を以て招かせられなば、心を傾け馳參ぜん。これ第一の手配なり。

木「して又、籠城となつたる曉、敵を防がん手配は、

市「その儀もかねて地の利を考へ、出丸なくてはかなふまじと、前年紀州の山々より、材木あまた伐出させ、商業の爲と僞り、紀州川の川上より、浪速津に押流させ、御船入に積置いたり。まつた港口の御庫には、年ごろ努めて購ひ置きたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に亙るとも、なほ支ふるに餘りあるべし。

木「それに加へて、故殿下が貯へおかれし數萬の金銀、近年御出費嵩むと雖も、なほ若干の餘財あり。

市「甲冑・兵具も乏しからず。

木「城は名に負ふ南山不落。

市「眞田・後藤の智勇をもて、この堅城に立籠り、忠臣悉く心を一にし、ひとへに君家を守護するときんば、

木「たとひ關東の老奸雄、利をくらはせ、諸大名をなつけ、六十餘州の兵を盡くし、四方・八面より攻寄すとも、

市「なか〳〵三年・四年がほどには、攻落さんこと難かるべし。

老奸雄
德川家康をさす。

速水　速水守久。
御宿　御宿正倫。
和久　和久宗是。
淀君

木「まつた若年には候へども、いよ〳〵軍はじまりなば、われまた一方を承り、速水・御宿・和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の、吹飜さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結。君臣・將士心を一にし、千變萬化の手を盡くさば、金石も亦透りぬべし。利欲に集まる關東勢、なに退くるに難かるべきや。この上は仰に從ひ、この事君に言上なし、直に軍の手配せん。御心安かれ、市正殿。

市「ほゝ、頼もしく〳〵。唯大切なるは上下の一致。必ず忠勤勵まれよ。とはいひながら往時に照らし、成行く末を鑑みれば、

大御所　徳川家康。

木「淀の御方の御氣質、社鼠にひとしき大野・渡邊。

市「上、御發明にわたらせらるれど、

木「讒佞これを蔽ふがゆゑ、

市「地の利はあれども人の和なく、

木「故太閤が御威武に、をのゝき震ひ打伏しし、六十餘州の民草も、

市「天の時にや大御所のおのづからなる德風に、いつしか靡く世の有樣。

木「如何なればかくまでに、御運傾く西天の、

市「有明の影うすれつゝ、

木「東天紅と八面に、かしましく鳴くくだかけは、

市「新日東天に昇るといふ、

木「世の成行の、

二人「影なるか。
是非もなき世の有樣と、入るかたの月詠め入り。しばしは愚癡にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲夜はほのぼのと明けにけり。

（逍遙選集）

坪内消遙選集
「桐一葉」一七〇頁―一七六頁。大正十五年九月、春陽堂發行、

鬼界が島
薩摩國の南方の諸島の總名ならんといふ。

入道相國
平清盛。忠盛の子。保元の亂以後累進して太政大臣となる。養和元年（一八四一）歿、年六十四。

二六　足ずりの事

さる程に鬼界が島の流人どもの、召還さるべき事定まりしかば、入道相國の赦文書いてぞたうでける。御使既に都を立つ。宰相あまりのうれしさに、御使に私の使を添へて下されける。夜を晝にし急ぎ下れとありしかども、心に任せぬ海路なれば、波風を凌いで行く程に、都をば七月下旬に出でたれども、長月二十日頃にぞ鬼界が島には著きにける。

御使は丹左衞門の尉基康といふ者なり。急ぎ船より上り、「これ

平康頼
俊寛等と共に平氏討滅を謀り、事露れて鬼界ヶ島に流さる。

丹波の少將
名は成經、藤原成親の子、建仁二年（一八六二）歿。

俊寛
法勝寺の執行。鬼界ヶ島に流され、同島に死す。治水二年（一八三八）歿、年三十七。

中宮
高倉天皇の中宮徳子を指す。清盛の女。

に都より流され給ひたりし平判官康頼入道・丹波の少將殿やおはす。」と、聲々にぞ尋ねける。

二人の人々は、例の熊野詣してなかりけり。俊寛一人ありけるが、これを聞いて、「餘りに思へば夢やらん、また天魔波旬の、わが心をたぶらかさんとていふやらん。うつゝとも更に覺えぬものかな。」とて、あわてふためき、走るともなく、たふるともなく、急ぎ御使の前に行向つて、「これこそ流されたる俊寛よ。」と名乘り給へば、雜色が頸にかけさせたる布袋より、入道相國の赦文取出でて奉る。これをあけて見給ふに、「重科は遠流に免ず。早く歸洛の思をなすべし。今度中宮御産の御祈によつて非常の赦行はる。然る間鬼界が島の流人少將成經・康頼法師赦免。」とばかり書かれて、俊寛といふ文字はなし。禮紙にぞあるらんとて、禮紙を見るにも見えず。奥より端へ讀み、端より奥へ讀みけれども二人とばかり書かれて、三人

とは書かれず。さる程に、少將や、康賴法師も出で來り、少將の取つて見るにも、康賴法師が讀みけるにも、二人とばかり書かれて、三人とは書かれざりけり。夢にこそかゝる事はあれ。夢かと思ひなさんとすれば現なり。うつゝかと思へばまた夢の如し。その上二人の人々のもとへは、都よりことづてたる文ども、いくらもありけれども、俊寛僧都のもとへは、こと問ふ文一つもなし。さればわがゆかりの者どもは、みな都の内に跡を止めずなりにけるよと、思ひやるだにおぼつかなし。

「そもゝ〳〵われら三人は同じ罪、配所も同じ所なり。いかなれば赦免の時、二人は召還されて、一人こゝに殘すべき。平家の思ひ忘れかや、執筆の誤か、こはいかにしつることどもぞや。」と、天を仰ぎ地に伏して、泣悲しめどもかひぞなき。僧都、少將の袂に縋り、「俊寛がかやうになるといふも、御邊の父故大納言殿のよしなき謀叛の

故なり。さればよその事と思ひ給ふべからず。許されなければ、都までこそ叶はずとも、せめてはこの船に乘せて、九國の地まで著けてたべ。各のこれにおはしつる程こそ、春は燕、秋は田の面の雁のおとづるゝやうに、おのづから故郷の事をも傳へ聞きつれ、今より後は何としてか聞くべき。」とて、悶えこがれ給ひけり。

少將、「まことにさこそはおぼしめされ候ふらめ。われらが召還にゆくべき空も覺え候はず。この船にうち乘せ奉つて、上りたうさるゝ嬉しさも、さることにては候へども、御有樣を見奉るに、さら

は候へども、都の御使いかにもかなふまじき由を頻りに申す。そのうへ許されもなきに、三人ながら島の内を出でたりなど聞え候はば、なか〳〵あしう候ひなんず。成經まづまかりのぼつて、人々にもよく〳〵申しあはせ、入道相國の氣色をも伺ひ迎に人を奉らん。その程は日頃おはしつるやうこ思ひなして待ち給へ。命はいかにも大切の事なれば、たとひこの瀨にこそ洩れさせ給ふとも、遂にはなどか赦免なくて候ふべき。」と、やう〳〵に慰め宣へども、僧都堪忍ぶべうも見え給はず。

さる程に船出さんとしければ、僧都船に乘つては下りつ、下りては乘りつ、あらましことをぞし給ひける。少將のかたみには夜の衾、康頼入道がかたみには、一部の法華經をぞ止めける。既に纜解いて船おし出せば、僧都綱に取りつき、腰になり、脇になり、丈の立つまでは引かれて出づ。丈も及ばずなりければ、僧都船に取りつき、

法華經　妙法蓮華經の略、一部二十八品より成る。

「さていかに各、俊寛をば遂に捨てはて給ふか。日頃のなさけも今は何ならず。許されなければ都までこそ叶はずとも、せめてはこの船に乘せて九國の地まで。」と、くどかれけれども、都の御使、「いかにもかなひ候ふまじ。」とて、取りつき給ひつる手を引きのけて、船をば遂に漕出す。

僧都せんかたなさに渚に上り、倒れ伏し、をさなき者の乳母や母などを慕ふやうに、足ずりをして、「これ乘せて行け、具して行け。」とのたまひて、をめき叫び給へども、漕ぎゆく船のならひにて、跡は白波ばかりなり。未だ遠からぬ船なれども、涙にくれて見えざりければ、僧都高き所に走り上り、沖の方をぞ招きける。かの松浦小夜姫が唐船を慕ひつゝ領巾ふりけんも、これには過ぎじとぞ見えし。さる程に船も漕隱れ、日も暮るれども、僧都あやしのふしどへも歸らず、波に足うち洗はせ、露に萎れて、その夜はそこにぞあかしける。

漕ぎゆく船のならひにて　世の中を何にたとへむ朝ぼらけこぎゆく船の跡の白浪（拾遺集、沙彌滿誓）

松浦小夜姫　欽明天皇の朝、大伴狹手彦高麗を討伐に赴ける時、其妻別れを惜しみ、松浦山に登り領巾を振

さりとも少將はなさけ深き人なれば、よきやうに申す事もやとたのみをかけて、その瀬に身を投げざりし、心の中こそはかなけれ。昔早離・速離が海巖山へ放たれたりけん悲しみも、今こそ思ひ知られけれ。

（平家物語）

れりといふ故事。

早離速離　印度にて早離速離の兄弟織母に憎まれ海巖山に放たれたりといふ佛教の傳說。

平家物語　十二卷。平氏の繁昌より沒落に至るまでの事を記せるもの。本課の文は卷第三「足摺」より採る。

二七　紅葉の事

高倉の院御在位の御時、人の從ひつき奉ることは、おそらくは、延喜・天曆の帝と申すとも、これにはいかでかまさらせ給ふべきとぞ人申しける。大方賢王の名をあげ、仁德の行を施させおはしますことも、君御成人の後、清濁を分たせ給ひての上のことにてこそあるに、むげにこの君はいまだ幼主の御時より、性を柔和に受けさせおはします。

さんぬる承安のころほひは、御年十歲ばかりにやならせおはし

高倉院　高倉天皇。第八十代。御諱憲仁。養和元年（一八四一）崩、寶算二十一。

延喜の帝　醍醐天皇。

天曆の帝　村上天皇。

紅葉の圖　山口雪溪畫

山口雪溪

京都の人、雪舟及び牧溪を學び自ら雪溪と稱す。當時の諸家皆古意を失せる中に一人古格を守りて一家をなせり。寛文九年(一六六九)歿、年五十八。本圖は京都醍醐三寶院の藏にして、金地に滿面紅葉を描き、碧潭を配したる極彩色の豪壯華麗なるものにして、而も構圖・描法共纖弱の風なく當代名作の一なり。

北の陣

縫殿の陣。

ましけむ、あまりに紅葉を愛でさせ給ひて、北の陣に小山を築かせ櫨・楓のまことに色うつくしうもみぢたるを植ゑさせ、紅葉の山と名づけて、ひねもすに叡覽あるに、なほ飽きたらせ給はず。しかるを、ある夜野分はしたなう吹いて、紅葉みな吹きちらし、落葉すこぶる狼藉なり。殿守の伴の造、朝ぎよめすとて、これを悉く掃き捨てけり。殘れる枝、散れる木の葉をばかき集めて、風すさまじかりける朝なれば、縫殿の陣にて、酒暖めてたべける薪木にこそしてけれ。奉行の藏人、行幸より先にと、急ぎ往いて見るに、あとかたもなし。いかにと問へば、しかじかと答ふ。「あなあさまし、さしも君の執しおぼしめされつる紅葉をかやうにしつることよ。知らず、汝等、禁獄流罪にも及び、わが身も、いかなる逆鱗にかあづからむずらむ。」と、思はじ事なう案じつづけてゐたりける所に、主上いとどしく、夜のおとどを出でさせもあへず、かしこへ行幸なりて、紅葉を叡

覽あるに、なかりければ、いかにと、御たづねありけり。藏人、奏すべき旨もなし、ありのまゝに奏聞す。天機ことに御心よげにうち笑ませ給ひて、「林間に酒を暖めて、紅葉を燒くといふ詩のこゝろをば、されば、それらには、誰が敎へけるぞや。やさしうも仕りたるもの哉。」とて、却つて叡感にあづかりし上は、あへて勅勘なかりけり。

また、安元のころほひ、御方たがへの行幸ありしに、さらでだに、鷄人曉を唱ふる聲、明王の眠を驚かすほどにもなりしかば、いつも御寐ざめがちにて、つゝ御寢もならざりけり。いはむや、さゆる霧夜のはげしきには、延喜の聖代、國土の民どもが、いかに寒からむとて、夜の殿にして、

「林間に酒を暖めて云々」
林間に酒を煖めて紅葉を燒き、石上に詩を題して綠苔を掃ふ。（和漢朗詠集）

女の童

御衣をぬがせ給ひけることなどまでも、おぼしめし出でて、わが帝德のいたらぬことをぞ御なげきありける。

やゝ深更に及んで、ほど遠く人の叫ぶ聲しけり。供奉の人々は聞きもつけられず。主上はきこしめして、「ただ今叫ぶは何者ぞ、あれ見て參れ。」と仰せければ、上臥したる殿上人、上日のものに仰せて、尋ぬれば、ある辻にあやしの女童の長持の蓋さげたるが、泣くにてぞありける。「いかに」と問へば、「主の女房の、院の御所にさぶらはせ給ふが、このほど、やうやうにして仕立てられたりつる衣を、持つて參るほどに、ただ今、男の二三人まうで來て、奪ひ取つてまかりぬるぞや。今は御裝束があればこそ、御所にもさぶらはせ給はめ。また、はかばかしう立ち宿らせ給ふべき親しき御方もましまさず。これを思ひつづくるに、泣くなり。」とぞいひける。さてかの女童を具してまゐり、このよし奏聞したりければ、主上きこしめして、「あ

なむざん、何者のしわざにてかあるらむ。」とて、龍顏より御涙を流させ給ふぞ、かたじけなき。

「堯の代の民は、堯の心のすなほなるを以て心とするゆゑに、みなすなほなり。今の代の民は朕が心を以て心とする故に、かたましきもの、朝にあつて罪を犯す。是朕が恥にあらずや。」とぞ仰せける。「さるにても、取られつらむ衣は、何色ぞ。」と仰せければ、しかじかの色と奏す。建禮門院、その時は、未だ中宮にて渡らせ給ふ時なり。その御方へ、さやうの色したる御衣や候。」と御たづねありければ、さきのより、はるかに色美しきが參りたるを、件の女童にぞたまはせける。「未だ夜深し、また、さる目にもぞあふ。」とて、上日のものをあまたつけて、主の女房の局まで、送らせましましけるぞかたじけなき。されば、あやしの賤の男、賤の女にいたるまで、ただ、この君千秋萬歲の寶算をぞ祈りたてまつる。

（平家物語）

堯の代の民

禹曰く、堯舜の人は皆堯舜の心を以て心とせり。今寡人君となるや百姓各目其の心を以て心と爲すと。

平家物語　卷六「紅葉」

女子國文大綱　卷八

日本文學年表

平林治德編　女子國文大綱附錄

時代	天皇	年號	紀元	作品	作家	作家生歿年	參考史實	西洋紀元	外國史實
上古 大和時代	1 神武		元—	〔歌謠〕〔祝詞〕〔壽詞〕〔宣命〕			神武天皇即位	前六六〇	釋迦生
							漢學傳來	前五五四—	孔子生
							佛教傳來	前五一—	キリスト生
								前四—	隋—唐
上古 奈良時代	43 元明	和銅三	一三七〇						
		和銅五	一三七三	古事記					
	44 元正	養老四	一三八〇	日本書紀	太安萬侶				
					〔舍人親王〕〔太安萬侶等〕	一三三六—一三九五			
	46 孝謙	天平勝寶三	一四一一	萬葉集			奈良奠都	七一〇	李白・杜甫
				懷風藻			遣唐使		
							天平時代		
中古 平安時代	50 桓武	延曆一三	一四五四						
	60 醍醐	延喜五	一四五五	〔神樂歌・催馬樂〕				九〇七—	唐滅亡
				古今和歌集	紀貫之等撰			九六〇—	宋建國
				竹取物語					
				伊勢物語					
				土佐日記	紀貫之				
				落窪物語					
				宇津保物語					
				大和物語	藤原公任撰	一六二六—一七〇一		九六二—	オットー一世神聖ローマ皇帝と號す
				和漢朗詠集					
				枕草紙	清少納言				
				源氏物語	紫式部				
				和泉式部日記	和泉式部				
				蜻蛉日記	右大將道綱の母				
				榮花物語					
				大鏡					
				今昔物語					
				更科日記	菅原孝標の女				
				山家集	西行法師	一七八一—一八五〇			朱熹
				〔今樣〕					
				千載和歌集	藤原俊成撰	一七四一—一八六四	平安奠都		歐陽修・程顥・程頤・司馬光・蘇軾・蘇轍
							假名の發明		
							天台宗傳來（一四六五）		
							眞言宗傳來（一四六六）		
							菅原道眞左遷（一五六一）		
	82 後鳥羽						保元の亂（一八一六）		
							平治の亂（一八一九）		
							平氏亡ぶ（一八四五）		源頼朝征夷大將軍と

古代（右端の続き）

一八四六

- 天皇: 81 安德
- 作品: 蜻蛉日記 / 榮花物語 / 大鏡 / 今昔物語 / 更科日記 / 山家集 / （今樣）
- 作者: 右大將道綱の母（蜻蛉日記）/ 菅原孝標の女（更科日記）/ 西行法師（山家集）一七七八—一八五〇
- 事項: 保元の亂（一八一六）/ 平治の亂（一八一九）/ 平氏亡ぶ（一八四五）
- 世界: 朱熹

近古

鎌倉時代（一八四六—一九九四）

天皇	年號	皇紀
82 後鳥羽		
83 土御門	元久 二	一八六五
84 順德		
87 四條	仁治 三	一九〇二
89 後深草	建長 四	一九一二
	建長 六	一九一四
91 後宇多	弘安 三	一九四〇

作品	作者	生没
千載和歌集	藤原俊成撰	一七七四—一八六四
新古今和歌集	藤原定家等撰	一八二三—一九〇一
方丈記	鴨長明	一八一一—一八七三
金槐和歌集	源實朝	一八五二—一八七九
東關紀行		
保元物語		
平治物語		
平家物語		
源平盛衰記		
宇治拾遺物語		
十訓抄		
古今著聞集	橘成季	
十六夜日記	阿佛尼	

- 事項: 源頼朝征夷大將軍となる（一八五二）/ 承久の亂（一八八一）/ 貞永式目（一八九二）/ 淨土宗・眞宗・日蓮宗・禪宗 / 繪卷物 / 元入寇（一九三四）
- 世界: 一二〇四— ラテン帝國建設 / 一二七九— 宋亡ぶ / 一三二一— ダンテ歿

室町時代（一九九四—二二六三）

天皇	年號	皇紀
96 後醍醐	建武 元	一九九四—
97 後村上	延元 四	一九九九
98 長慶		
99 後龜山	弘和 元	二〇四一
106 正親町		二二三三

作品	作者	生没
神皇正統記	北畠親房	—二〇一四
徒然草	兼好法師	一九四三—二〇一〇
吉野拾遺		
增鏡		
太平記		
曾我物語		
義經記		
新葉和歌集	宗良親王撰	
（謠曲）	觀阿彌・世阿彌等	
（狂言）		
（お伽草子）		
（連歌）	宗祇等	

- 事項: 建武中興 / 五山文學 / 能樂 / 古今傳授 / 應仁の亂（二一二七）/ 足利氏亡ぶ
- 世界: 一三三四 / 一三三九 百年戰爭起る / 一三六八— 明建國 / 一三七四— ペトラルカ歿 / 一三七五— ボッカチオ歿 / 一三九二— 李成桂朝鮮建國 / 文藝復興 / 一五一七— ルーテル宗教改革 / 一五一九— ビンチ歿 / 一五二〇— ラファエル歿 / 一五二九— 王陽明歿 / 一五六四— ミケランゼロ歿

近世

江戸時代（二二六三—二五二八）

天皇	年號	皇紀
107 後陽成	慶長 八	二二六三
112 靈元	延寶 元	二三三三
113 東山	元祿 二	二三四九
	元祿 一四	二三六一
114 中御門	寶永 七	二三七〇
	正德 五	二三七五
	正德 六	二三七六
	享保 一七	二三九二
115 櫻町	元文 四	二三九九
117 後櫻町	明和 五	二四二八
119 光格	天明 二	二四四二
	天明 四	二四四四
	天明 四	二四四四
	寛政 元	二四四九
	寛政 三	二四五一
	享和 二	二四六二
	文化 七	二四七〇
	文化 六	二四六九
	文化 八	二四七一
120 仁孝	文政 一一	二四八八
121 孝明	文久 三	二五二三
	元治 元	二五二四

作品	作者	生没
源氏物語湖月抄	北村季吟	二二八四—二三六五
萬葉代匠記	釋契沖	二三〇〇—二三六一
（浮世草紙）	井原西鶴等	二三〇二—二三五三
奥の細道	松尾芭蕉	二三〇四—二三五四
（七部集）	松尾芭蕉等	
藩翰譜	新井白石	二三一七—二三八五
樂訓	貝原益軒	二二九〇—二三七四
國姓爺合戰	近松門左衞門	二三一三—二三八四
折たく柴の記	新井白石	
駿臺雜話	室鳩巣	二三一八—二三九四
常山紀談	湯淺常山	二三六八—二四四一
萬葉考	賀茂眞淵	二三五七—二四二九
雲萍雜志	柳澤淇園	二三六六—二四一八
雨月物語	上田秋成	二三九三—二四七〇
西遊記・東遊記	橘南谿	二四一四—二四六六
蕪村句集	谷口蕪村	二三七六—二四四三
（川柳）	柄井川柳	二三七八—二四五〇
鶉衣	横井也有	二三六二—二四四三
梅園叢書	三浦梅園	二三八三—二四四九
萬葉集略解	加藤千蔭	二三九四—二四六八
古事記傳・玉勝間	本居宣長	二三九〇—二四六一
群書類從	塙保己一	二四〇六—二四八一
（狂歌）	蜀山人等	二四〇九—二四八三
東海道中膝栗毛	十返舍一九	二四三五—二四九一
琴後集	村田春海	二四〇六—二四七一
浮世風呂・浮世床	式亭三馬	二四三五—二四八二
椿說弓張月・南總里見八犬傳	瀧澤馬琴	二四二七—二五〇八
おらが春	小林一茶	二四二三—二四八七
（脚本）	鶴屋南北等	二四一五—二四八九
桂園一枝	香川景樹	二四二八—二五〇三
草徑集	大隈言道	二四五八—二五二八
櫃園文集	中島廣足	二四七二—二五二四
志濃夫廼舍歌集	橘曙覽	二四七二—二五二八

- 事項: 徳川家康征夷大將軍となる（二二六三）/ 中江藤樹 / 切支丹禁制 / 歌舞伎・淨瑠璃 / 熊澤蕃山・木下順庵 / 赤穗義士復讐（二三六二）/ 伊藤仁齋 / 大日本史命名（二三七五）/ 荻生徂徠 / 國學 / 露人國後島に來る（二四三八）/ 柴野栗山・尾藤二洲・古賀精里 / 高山彦九郎・林子平歿（二四五三）/ 伊能忠敬蝦夷地測量（二四六〇）/ 蒲生君平歿（二四七三）/ 蘭學 / 渡邊華山歿（二四九九）/ 日本外史出づ / ペリー來る（二五一三）/ 吉田松陰歿（二五一九）/ 櫻田の變（二五二〇）/ 大政奉還（二五二七）
- 世界: 一六一六— シェクスピア歿 / 一六七四— ミルトン歿 / 一六七七— スピノザ歿 / 一七七六— 北米合衆國獨立宣言 / 一七七八— ルソー・ボルテール歿 / 一七八九— フランス革命起る / 一八〇四— カント・シルレル歿 / 一八二二— セレー歿 / 一八二四— バイロン歿 / 一八二七— ベートーベン歿 / 一八三二— ゲーテ歿 / 一八五〇— ウォーズウォース歿 / 一八五六— ハイネ歿 / 一八六〇— 『ショペンハウエル歿

明治（二五二八—）

天皇	年號	皇紀
122 明治	元	二五二八
	二	二五二九
	三	二五三〇
	七	二五三四
	一五	二五四二
	一六	二五四三

作品	作者	生没
西洋事情	福澤諭吉	二四九四—二五六一
西洋道中膝栗毛	假名垣魯文	二四九〇—二五五四
（默阿彌脚本）	河竹默阿彌	二四七六—二五五三
柳橋新誌	成島柳北	二五〇七—二五四四
新體詩鈔	外山正一等	二五〇八—二五六〇
經國美談	矢野龍溪	二五一〇—

- 事項: 東京奠都（二五二八）/ 學制頒布・東京日日新聞（二五三二）/ 橫濱毎日新聞（二五三〇）/ 西南の役（二五三七）
- 世界: 一八六八— / 一八八〇— フローベル歿 / 一八八一— ドストエフスキー歿 / 一八八一— カーライル歿 / 一八八二— エマーソン歿 / 一八八二— ダーウィン歿 / 一八八三— ツルゲーネフ歿

世 (近世)	現代
江戸時代	明治時代

天皇: 119 光格 / 120 仁孝 / 121 孝明 / 122 明治

年号・皇紀

年号	皇紀
天明二	二四四[illegible]
天明四	二四四四
天明四	二四四四
寛政元	二四四九
寛政三	二四五一
享和二	二四六二
文化七	二四七〇
文化六	二四六九
文化八	二四七一
文政一一	二四八八
文久三	二五二三
元治元	二五二四
明治元	二五二八
二	二五二九
三	二五三〇
七	二五三四
一五	二五四二
一六	二五四三
一八	二五四五
一九	二五四六
二〇	二五四七
二一	二五四八
二四	二五五一
二五	二五五二
二六	二五五三
二七	二五五四
二八	二五五五
三〇	二五五七
三二	二五五九
三三	二五六〇
三四	二五六一
三五	二五六二
三八	二五六五
三九	二五六六
四〇	二五六七
四一	二五六八
四二	二五六九
四三	二五七〇

作品・作者

作品	作者	生没
西遊記・東遊記	橘南谿	二四一四—二四六六
蕪村句集	谷口蕪村	二三七六—二四四三
〔川柳〕	柄井川柳	二三七八—二四五〇
鶉衣	横井也有	二三六二—二四四三
梅園叢書	三浦梅園	二三八三—二四四九
萬葉集略解	加藤千蔭	二三九四—二四六八
古事記傳・玉勝間	本居宣長	二三九〇—二四六一
群書類従	塙保己一	二四〇六—二四八一
〔狂歌〕	蜀山人等	二四〇九—二四八三
東海道中膝栗毛	十返舎一九	二四三五—二四九一
琴後集	村田春海	二四〇六—二四七一
浮世風呂・浮世床	式亭三馬	二四三五—二四八二
椿説弓張月・南總里見八犬傳	瀧澤馬琴	二四二七—二五〇八
おらが春	小林一茶	二四二三—二四八七
〔脚本〕	鶴屋南北等	二四一五—二四八九
桂園一枝	香川景樹	二四二八—二五〇三
草徑集	大隈言道	二四五八—二五二八
橿園文集	中島廣足	二四七二—二五二四
志濃夫廼舍歌集	橘曙覽	二四七二—二五二八
西洋事情	福澤諭吉	二四九四—二五六一
西洋道中膝栗毛	假名垣魯文	二四九〇—二五五四
〔默阿彌脚本〕	河竹默阿彌	二四七六—二五五三
柳橋新誌	成島柳北	二五〇七—二五四四
新體詩鈔	外山正一等	二五〇八—二五六〇
經國美談	矢野龍溪	二五一〇—
小説神髓・書生氣質	坪内逍遙	二五一九—
七本松	落合直文	二五二一—二五六三
雪中梅	末廣鐵腸	二五〇八—二五五六
風琴調一節	山田美妙	二五二八—二五七〇
浮雲	長谷川二葉亭	二五二四—二五六九
佳人の奇遇	柴東海散士	二五一八—
多情多恨	尾崎紅葉	二五二八—二五六三
油地獄	齋藤緑雨	二五二七—二五六四
五重塔	幸田露伴	二五二七—
富嶽の詩神を思ふ	北村透谷	二五二八—二五五四
獺祭書屋俳話	正岡子規	二五二七—二五六二
春日局	福地櫻痴	二五〇一—二五六五
桐一葉	坪内逍遙	
たけくらべ	樋口一葉	二五三二—二五五六
黒蜥蜴	廣津柳浪	二五二一—
暗潮	川上眉山	二五二九—二五六八
若菜集	島崎藤村	二五三二—
天地有情	土井晩翠	二五三一—
暮笛集	薄田泣菫	二五三七—
不如歸	德富蘆花	二五二八—二五八七
己が罪	菊池幽芳	二五三〇—
高野聖	泉鏡花	二五三三—
武藏野	國木田獨歩	二五三一—二五六八
亂れ髮	與謝野晶子	二五三八—
無弦弓	河井醉茗	二五三四—
美的生活論	高山樗牛	二五三一—二五六七
地獄の花	永井荷風	二五三九—
即興詩人	森鷗外	二五二二—二五八二
吾輩は猫である	夏目漱石	二五二七—二五七六
病間録	綱島梁川	二五三三—二五六七
海潮音	上田敏	二五三四—二五七六
破戒	島崎藤村	
蒲團	田山花袋	二五三一—
南小泉村	眞山青果	二五三八—
少年行	中村星湖	二五四四—
何處へ	正宗白鳥	二五三九—
俳諧師	高濱虚子	二五三四—
近代文藝之研究	島村抱月	二五三一—二五七八
足迹	德田秋聲	二五三一—
放浪	岩野泡鳴	二五三三—二五八〇
土	長塚節	二五三九—二五七五
一握の砂	石川啄木	二五四六—二五七二

國內事項

- 柴野栗山・尾藤二洲・古賀精里
- 高山彦九郎・林子平殁(二四五三)
- 伊能忠敬蝦夷地測量(二四六〇)
- 蒲生君平殁(二四七三)
- 蘭學
- 渡邊華山殁(二四九九)
- 日本外史出づ
- ペリー來る(二五一三)
- 吉田松陰殁(二五一九、
- 櫻田の變(二五二〇)
- 大政奉還(二五二七)
- 東京奠都(二五二八)
- 學制頒布・東京日日新聞(二五三二)
- 横濱毎日新聞(二五三〇)
- 西南の役(二五三七)
- 大阪朝日新聞(二五三九)
- 國會開設の詔(二五四一)
- 硯友社(二五四五)
- 大阪毎日新聞(二五四八)
- 憲法發布(二五四九)
- 教育勅語(二五五〇)
- 早稻田文學(二五五一)
- 文學界(二五五三)
- 日清戰役(二五五四)
- 帝國文學・太陽(二五五五)
- ほとゝぎす(二五五八)
- 中央公論(二五五九)
- 明星(二五六〇)
- 日英同盟(二五六二)
- 日露戰役(二五六四)
- ポーツマス條約(二五六五)
- 文章世界(二五六六)
- 戊申詔書(二五六八)
- 自由詩社(二五六九)
- 韓國併合(二五七〇)
- 白樺(二五七〇)
- 青踏(二五七一)
- 明治天皇崩御(二五七二)

西暦・海外事項

西暦	事項
	殁
一七八九	フランス革命起る
一八〇四	カント・シルレル殁
一八二二	セッレー殁
一八二四	バイロン殁
一八二七	ベートーベン殁
一八三二	ゲーテ殁
一八五〇	ウォーズウォース殁
一八五六	ハイネ殁
一八六〇	『ショペンハウエル殁
一八六八	
一八八〇	フローベル殁
一八八一	ドストエフスキー殁
一八八一	カーライル殁
一八八二	エマーソン殁
一八八二	ダーウィン殁
一八八三	ツルゲーネフ殁
一八八三	マルクス殁
一八八五	ユーゴー殁
一八九〇	ゴッホ殁
一八九二	ホイットマン殁
一八九二	テニソン殁
一八九三	モーパッサン殁
一八九五	レントゲンX光線
一八九六	ベルレーヌ殁
一八九八	シャバンヌ殁
一九〇〇	ワイルド殁
一九〇〇	ラスキン殁
一九〇〇	ニーチェ殁
一九〇二	ゾラ殁
一九〇四	チェホフ殁
一九〇六	イブセン殁
一九〇六	セザンヌ殁
一九一〇	トルストイ・ビョルンソン殁
一九一二	清亡ぶ、支那共和國
一九一二	ストリンドベルヒ殁

昭和五年九月八日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

昭和四年十月五日印刷
昭和四年十月十日發行
昭和五年八月十五日修正印刷
昭和五年八月二十日修正發行

女國文大子綱	定價
卷一——卷十	各金六十九錢

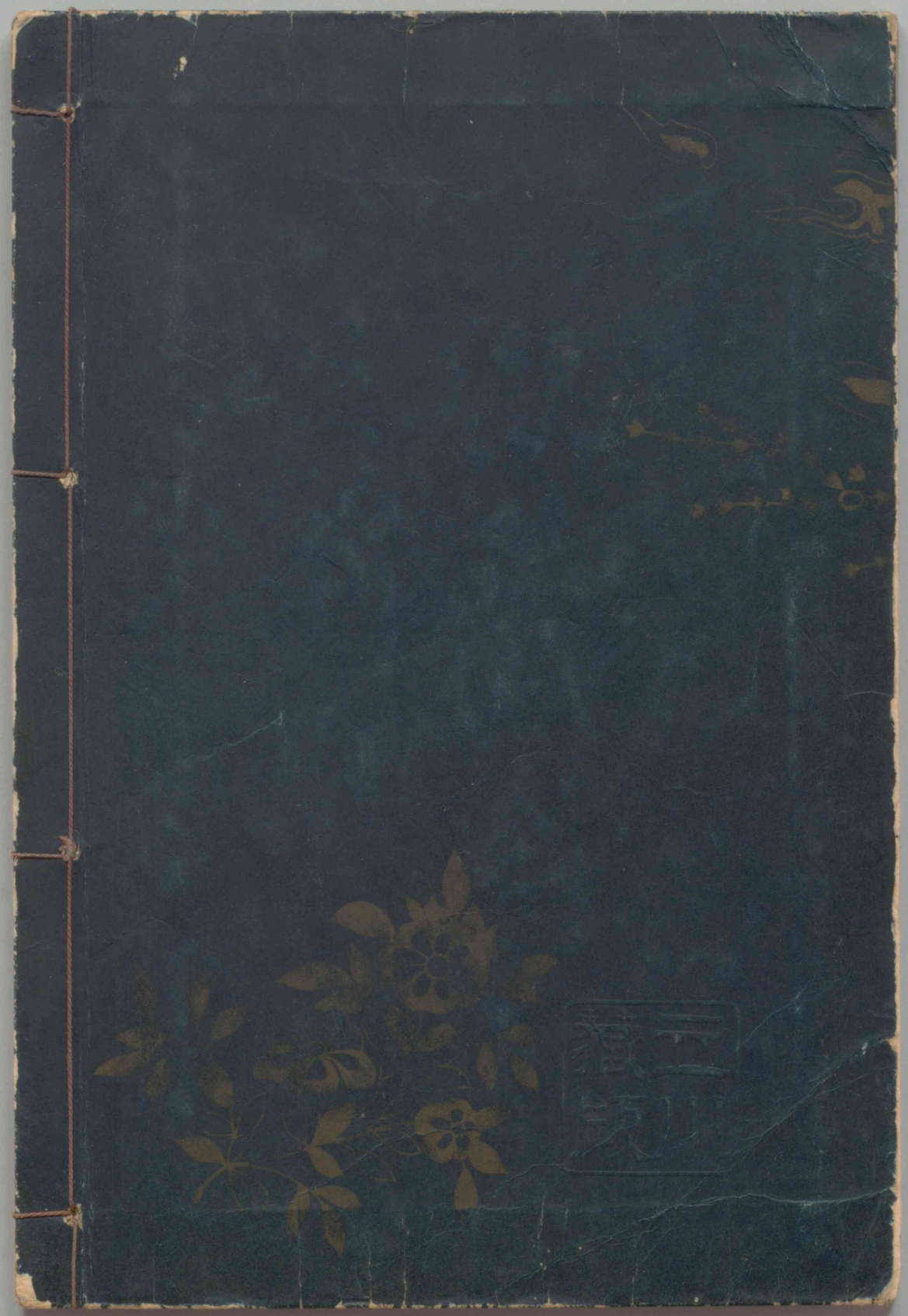
編者　平林治德
大阪市南區安堂寺橋通三丁目四十五番地

發行者　立川熊次郎
大阪市西區阿波座二番町三番地

印刷者　北隅茂

發行所　立川書店
大阪市南區安堂寺橋通三丁目四十五番地
振替口座（大阪一四六一番）

小店發行の教科書は常に多數の製本準備してありますから萬一各地賣捌所に賣切の場合課業に御差支の節は直接御註文下さい直ぐ御送り致します

四C

丸矢久子